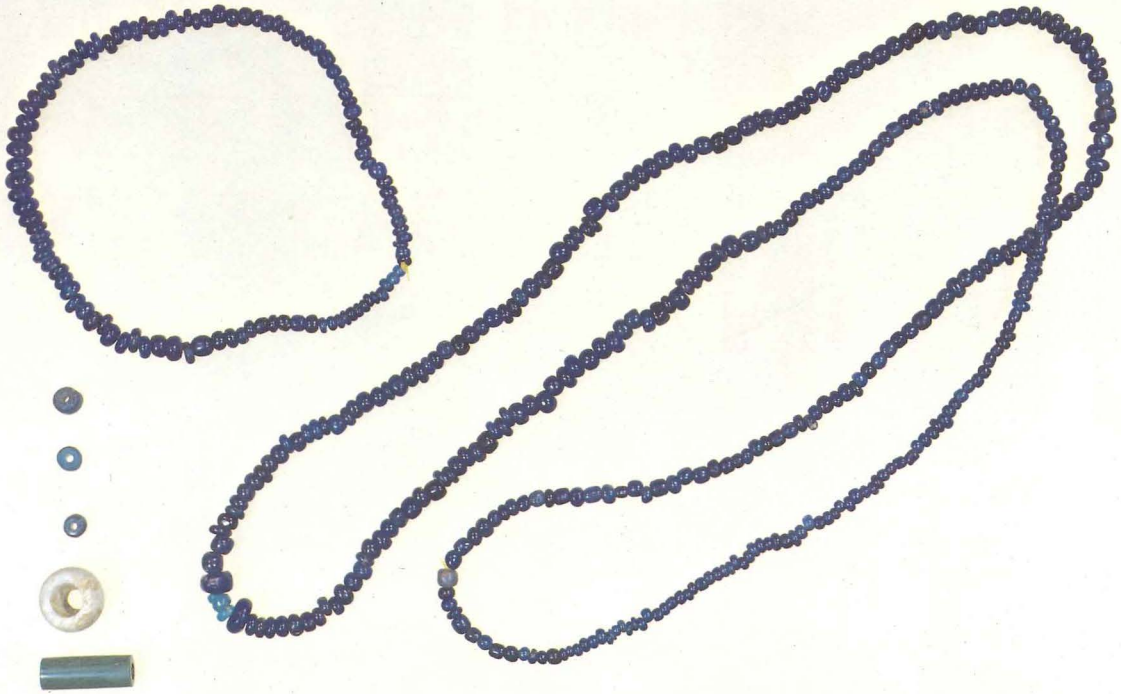
田平町文化財調査報告書 第1集

中野ノ辻遺跡
里田原遺跡

1982

田平町教育委員会



発刊にあたって

このたび，当町にあります中野ノ辻遺跡及び里田原遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。

この中野ノ辻遺跡は標高約60メートルの小高い丘の上にあり，昭和55年11月に畑地耕作中に発見され，緊急発掘調査の結果，箱式石棺10基が確認されました。

調査は第１次・昭和55年11月と第２次・昭和56年５～６月の33日間に及びました。この結果，弥生時代から古墳時代にかけての箱式石棺群であることが判明し，田平町内でも初例であります。

第１次調査は昭和55年11月に実施し，確認された石棺10基のうち３基を実測調査しました。今回の発掘作業は農耕作業のため一時中止し，未調査の石棺７基は現状のまま保存し，再度発掘調査にかかることになりました。

第２次調査では同遺跡の地形測量，残り７基の石の大きさ，向き等を記録して石棺配置図を作成，写真撮影をし，解体移築復元することになりました。

又，昭和47年に発見された里田原遺跡は県の手で６年間に亘って発掘調査が進められました。その里田原に歴史民俗資料館を建設するために当該地周辺における遺構の包蔵状態からして，その一部が調査予定地点にも展開している可能性があり，遺構範囲を確認するため，昭和56年７月に調査を実施いたしました。

本書がひろく中野ノ辻遺跡の重要性を理解していただく資料及び北松の弥生時代の生活を解明する貴重な資料になることと思います。

最後に，今回の調査実施にあたり物心両面から何かと御援助いただいた，文化庁，長崎県文化課の諸先生方に衷心より感謝申し上げるとともに，現地協力いただいた前田さん，岡田さん，一丸さん等地主の方々に厚くお礼を申し上げまして，調査報告書発刊の言葉といたします。

昭和57年３月31日

田平町教育長　鈴　木　万三郎

例　　言

一、本書は昭和56年度の国庫補助を受けて実施した田平町中野ノ辻，同町里田原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

二、本書は分担執筆し，各項の執筆者は本文目次の項に記した。

三、本書中，土器，石器の実測については，それぞれ，竹内弘，中田敦之の協力を得た。又，石棺のトレースでは，有山弘美，田中祐子の協力を得た。

四、調査時の撮影は調査員が行ったが，本書掲載の遺物撮影は中村和正による。

五、本書関係遺物は，全て長崎県教育委員会が保管の任に当り，現在文化課立山分室にて収納している。

六、本書の編集は高野晋司が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　序　　説　　頁　執筆者

一、調査に至る経過……1…田川　肇

二、遺跡の地理的歴史的環境……2…高野　晋司

Ⅱ　中野ノ辻遺跡

一、調査経過……11…田川　肇

1．第1号石棺……13…　〃

2．第2号石棺……17…　〃

3．第3号石棺……21…高野　晋司

4．第4号石棺……25…田川　肇

5．第5号石棺……29…高野　晋司

6．第6号石棺……40…　〃

7．第7号石棺……47…田川　肇

8．第8号石棺……51…高野　晋司

9．第9号石棺……55…田川　肇

10．第10号石棺……59…　〃

二、ま　と　め

1．中野ノ辻の石棺について……65…高野　晋司

2．中野ノ辻出土のガラス玉について……68…　〃

3．その他の出土遺物……75…　〃

Ⅲ　里田原遺跡

一、調査概要……78…田川　肇

1．土　層……81…　〃

2．遺物出土状況……85…竹内　弘

3．土　器……86…　〃

4．石　器……88…中田　敦之

5．木　器……91…竹内　弘

挿　図　目　次

頁

Fig. 1　田平町位置図

Fig. 2　田平町遺跡分布図……3

Fig. 3　等高線別遺跡頻度……7

Fig. 4　調査地点位置図……9

Fig. 5　遺構配置図（$\frac{1}{400}$）……12

Fig. 6　第1号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）……15

Fig. 7　第2号　〃　（$\frac{1}{20}$）……19

Fig. 8　第3号　〃　（$\frac{1}{20}$）……23

Fig. 9　第4号　〃　（$\frac{1}{20}$）……27

Fig.10　第5号　〃　（$\frac{1}{20}$）……31

Fig.11　第5号石棺出土ガラス小玉実測図　①（$\frac{1}{1}$）……33

Fig.12　〃　②（$\frac{1}{1}$）……34

Fig.13　〃　ヒスイ玉実測図　③（$\frac{1}{1}$）……35

Fig.14　第6号石棺出土ガラス小玉実測図（$\frac{1}{1}$）……41

Fig.15　第6号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）……43

Fig.16　鉄刀子実測図……47

Fig.17　第7号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）……49

Fig.18　第8号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）……53

Fig.19　第9号石棺出土管玉・ガラス玉実測図（$\frac{1}{1}$）……55

Fig.20　第9号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）……57

Fig.21　第10号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）……61

Fig.22　石棺法量図……66

Fig.23　石棺方位図……66

Fig.24　ガラス小玉径別出土比率図……69

Fig.25　県内ガラス製品出土遺跡（弥生時代）……70

Fig.26　〃　（古墳時代）……72

Fig.27　調査地点位置図……77

Fig.28　里田原調査区配置図……79

Fig.29　土　層　図（$\frac{1}{40}$）……81

Fig.30　遺物出土状況図（$\frac{1}{20}$）……85

Fig.31　出土土器実測図　①（$\frac{1}{3}$）……86

Fig.32　〃　②（$\frac{1}{4}$）……87

Fig.33　出土土器実測図　③（$\frac{1}{2}$）……88
Fig.34　出土石器実測図（$\frac{1}{2}$）……91
Fig.35　出土木器実測図（$\frac{1}{4}$）……93

図　版　目　次

頁

PL. 1　中野ノ辻遺跡の遠景と近景……10
PL. 2　調査前の供養……11
PL. 3　第１号石棺発見状況……13
PL. 4　第１号石棺……14
PL. 5　第２号石棺発見状況……17
PL. 6　第２号石棺……18
PL. 7　第３号及び第４号石棺出土状況……21
PL. 8　第３号石棺……22
PL. 9　各石棺出土状況……25
PL.10　第４号石棺……26
PL.11　第５号石棺出土ガラス玉・ヒスイ玉……29
PL.12　第５号石棺……30
PL.13　第６号石棺出土ガラス玉……40
PL.14　第６号石棺……42
PL.15　ガラス玉出土状況……46
PL.16　鉄刀子出土状況……47
PL.17　第７号石棺出土鉄刀子……47
PL.18　第７号石棺……48
PL.19　調査風景……51
PL.20　第８号石棺……52
PL.21　管玉出土状況……55
PL.22　第９号石棺出土管玉・ガラス玉……55
PL.23　第９号石棺……56
PL.24　調査風景……59
PL.25　第10号石棺……60
PL.26　第11号石棺（左），第13号石棺（右）……63
PL.27　第14号石棺（上），第12号石棺周辺出土土器（下）……64
PL.28　調査地点遠景（中央部），手前の２基は支石墓……78

PL. 29　土　層……82
PL. 30　調査風景……83
PL. 31　遺物出土状況……84
PL. 32　出土土器①（縄文土器）(½)……86
PL. 33　〃　②（弥生土器）(½)……88
PL. 34　〃　③（　〃　）(½)……89
PL. 35　遺物出土状況……90
PL. 36　出土石器（½）……92
PL. 37　出土木器（½）……94

表　目　次

頁

Tab. 1　田平町遺跡地名表……5
Tab. 2　第5号石棺出土ガラス小玉計測表　①……35
Tab. 3　〃　②……36
Tab. 4　〃　③……37
Tab. 5　〃　④……38
Tab. 6　〃　⑤……39
Tab. 7　第6号石棺出土ガラス小玉計測表　①……45
Tab. 8　〃　②……46
Tab. 9　第9号石棺出土管玉・ガラス玉計測表……55
Tab.10　石棺計測表……65
Tab.11　石棺特徴比較表……66
Tab.12　県内ガラス製品出土地名表（弥生時代）……71
Tab.13　〃　（古墳時代）……73

調査関係者

中野ノ辻遺跡第1次調査関係（昭和55年11月26日～12月2日）

調査総括　鈴木万三郎　田平町教育委員会教育長
松瀬　等　〃　教育次長
石井　哲　〃　社会教育主事
浦上　紳子　〃　主事
前田　博洋　〃　公民館主事
北川　貢　〃　〃
調査担当　田川　肇　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事
平野　敏和　〃　文化財調査員(現･外海町歴史民俗資料館学芸員)
調査協力　岡村　広法　長崎県立北松農業高等学校教諭(現・北京外国語学院分院教授)
馬場　聖美　小値賀町立小値賀小学校事務職員
前田平一（地主）・前田幸一・前田キヌエ・奥田力太郎

中野ノ辻遺跡第2次調査関係（昭和56年5月18日～6月13日）

調査総括　鈴木万三郎　田平町教育委員会教育長
松瀬　等　〃　教育次長
石井　哲　〃　社会教育主事
浦上　紳子　〃　主事
北川　貢　〃　公民館主事
小川　茂敏　〃　〃
調査担当　田川　肇　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事
高野　晋司　〃　文化財保護主事
調査協力　前田平一（地主）・前田幸一・前田キヌエ・奥田力太郎

里田原遺跡調査関係（昭和56年7月6日～7月18日）

調査総括　鈴木万三郎　田平町教育委員会教育長
松瀬　等　〃　教育次長
石井　哲　〃　社会教育主事
浦上　紳子　〃　主事
北川　貢　〃　公民館主事
小川　茂敏　〃　〃
調査担当　田川　肇　長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事
竹内　弘　〃　文化財調査員（現・外海町役場）
調査協力　一の瀬政雄　田平町やよい幼稚園園長

北古賀美津子（旧姓鴨川）田平町やよい幼稚園教諭
稲沢　悦子　（旧姓下田）　〃
尾崎　絹枝　〃
一丸　直之
池田タツエ・白石テルコ・稲沢シズエ・小森スミ子・種本トシ子・稲沢カズ子

調査内業協力　有山弘美・田中祐子・津田美由紀・野田純子

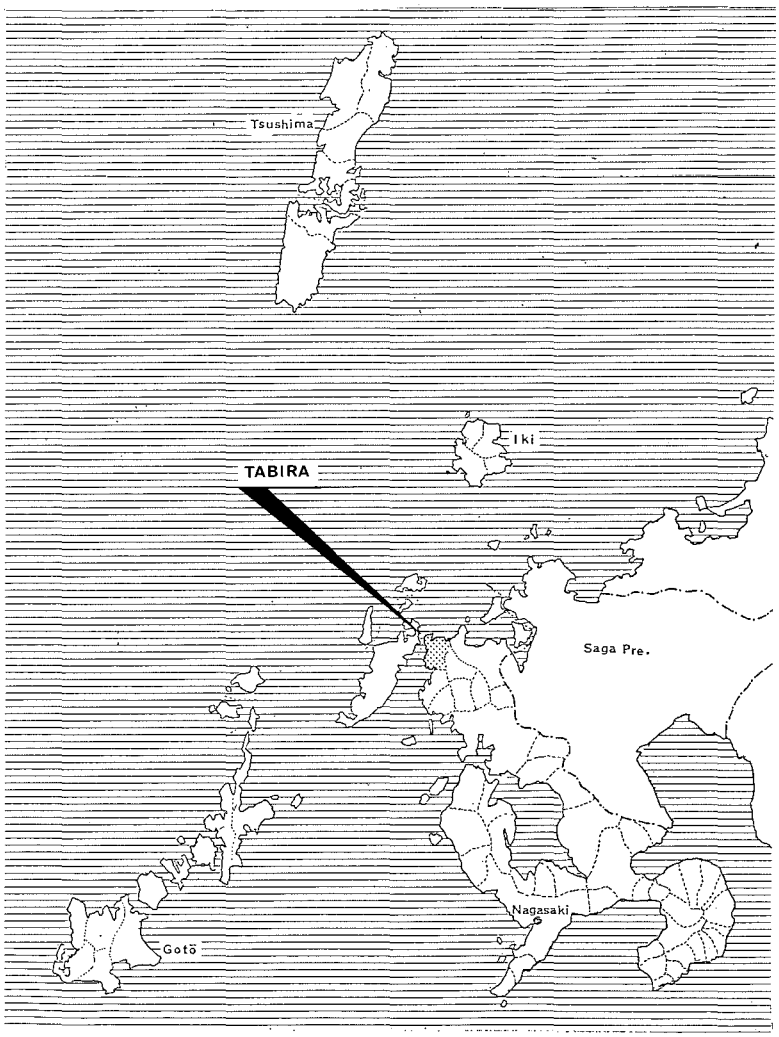


Fig. 1　田平町位置図

Ⅰ 序 説

一、調査に至る経過

○中野ノ辻遺跡

本遺跡が位置する標高約60mの丘陵の北には約30haの湿田が広がり，町内でも有数の穀倉地帯となっている。周囲の丘陵は畑地として開墾され，甘藷・麦類等の農作物が栽培されている。

昭和55年11月18日，前田平一氏は甘藷収穫後の畑の整地作業中に箱式石棺を発見し町教育委員会へ通報された。町教育委員会は早速岡村廣法県文化財保護指導委員と一緒に現場へ急行し箱式石棺であることを確認，現場保全措置を行い県文化課へ報告した。

翌11月19日，岡村氏は県文化課へ出向いてこられ詳細を報告された。報告を受けた文化課は①現出している箱式石棺は単基であるが群集する性格上このまま現地保存できないか，を第一義とし　②現地保存が不可能な場合の調査体制・調査日程・調査費用等について，町教育委員会・土地所有者と協議すべく田川　肇主任文化財保護主事を派遣した。11月21日のことである。

現地視察の結果，①現出している箱式石棺は３基である　②他に数基埋蔵している　③農機具の導入により深耕され隨所で虫喰い状況的破壊がある　④本遺跡は丘陵上に形成されているため雨水等による耕作土の薄厚があり，高い部分の石棺の破壊がひどい　⑤耕作の邪魔になる⑥すぐ次の作物を植えなければならない等により取り敢えずの対応策として，耕作の邪魔になる現出している石棺の実測調査と同畑地内の基数確認調査とを主体的に実施することとし，町教育委員会と県文化課で共催した。第１次調査である。

第１次調査で同畑地内に10基の箱式石棺を確認し，３基の実測・写真撮影を完了した。第２次調査は残りの７基について国庫補助により実施することとした。

幸いにも前田氏の快諾を得，事業終了まで現状を維持してくださることとなった。第２次調査では隣接する丘陵頂部の畑地についても埋蔵基数の確認をも併せて町事業として実施した。

○里田原遺跡

昭和47年の発見以来，県文化課は里田原遺跡の範囲確認調査および緊急発掘調査を実施してきた。一部に問題点は残るとしても，数次にわたった範囲確認調査によりある程度の内容が判明し，保護策が検討され，開発に対して調整・協議が行われる資料が得られた。

里田原遺跡は重要な遺跡であり，町民の関心も高い。町当局は遺跡の保護策のひとつに史跡指定を考慮しており，啓蒙に努力している。そういった気運の中で，俄かに町立歴史民俗資料館の建設がクローズアップされた。建設場所は町有地であり，既指定地に隣接する所である。

当該予定地は第７次の緊急調査と第９次の範囲確認調査を実施した地点を包含しており，地下の遺物・遺構に影響を与えない建設にするとはいえ，遺構等の確認をせずして計画を推進することは出来ないとして，文化庁の指導を得て試掘調査を実施した。

二、遺跡の地理的歴史的環境

本書で報告する両遺跡の所在する田平町は，北松浦半島の西北端を占め，その北側は玄海灘に面し，西側は平戸島に相対する。

田平町を含む松浦半島一帯は，長崎・佐賀の県境を占拠する国見山系より流れ出た流動性の溶岩（玄武岩）によって広く被覆され，いたるところに玄武岩の露頭をみる。またこのような溶岩台地は海岸部では，急崖をなして海中に没する。町内北西部海岸に顕著な柱状節理は，その典型である。

一方，ゆるやかな傾斜を持つ丘陵性の溶岩台地は，幾つかの小河川によって浸食され，町内所々に大小の盆地を形成している。

中野ノ辻遺跡は，釜田川中流域に開けた小盆地を取り囲む舌状の低丘陵上に位置し，又里田原遺跡は，釜田川下流域に堆積した北松浦郡最大の盆地である「里田原」の現水田下に横たわっている。

気候的にみると，田平町は県内では比較的降水量が多く，水を通しにくい第３紀層と前述玄武岩の間に浸透した雨水が地下水脈となり，町内いたるところでわき水として湧出する。その分布は標高30～140ｍにまで及び，その湧水を利用してFig. ３の如く現在町内では26ヶ所の溜池が作られている。もっとも図に示した溜池が，すなわち湧水点に一致するとは限らないのは当然であり，明瞭に後世の作りの溜池も少なくない。只，溜池のある箇所は，かつて池などがあった場所を利用する事が多く，地質的にも漏水のない地点であり，この面では湧水点に近い場所である可能性は高い。

周知遺跡を概観してみよう。

現在，町内には46の遺跡が知られている。この中には，それぞれ１遺跡で時期が複合する例も多いので総数は合致しないが，一応出土資料や表採資料で窺う事の出来る遺跡数の内訳は，旧石器時代31ヶ所，縄文時代23ヶ所，弥生時代３ヶ所，古墳時代４ヶ所，そして山城を含む歴史時代遺跡４ヶ所である。

旧石器時代の遺跡では，標高６～７ｍの微高地鞍部に位置する**2**日ノ岳遺跡を除くと，Fig.3で示した如く，標高30～50ｍで13ヶ所，60～80ｍで５ヶ所，そして100～140ｍで12ヶ所と大部分がこの標高間にある。これは，前述溜池集中ラインとも一致し，湧水地点との関連が指摘されよう。

縄文時代も旧石器時代遺跡と立地的にほぼ相似た現象を持ち，標高30～50ｍ，100～140ｍの間に集中する。一方，平戸瀬戸に面する**9**つぐめの鼻遺跡や**10**野田海中遺跡にみられる如く，現汀線，もしくは海中に位置する有力遺跡も知られる。特に前者では，縄文前期土器と同時に大形の石銛や鯨骨なども出土しており，平戸瀬戸を媒体とし，大形海獣を獲物の対象とする漁撈遺跡の性格を持っている。但し，標高的には海進時における海面高と遺跡のそれとが矛盾する

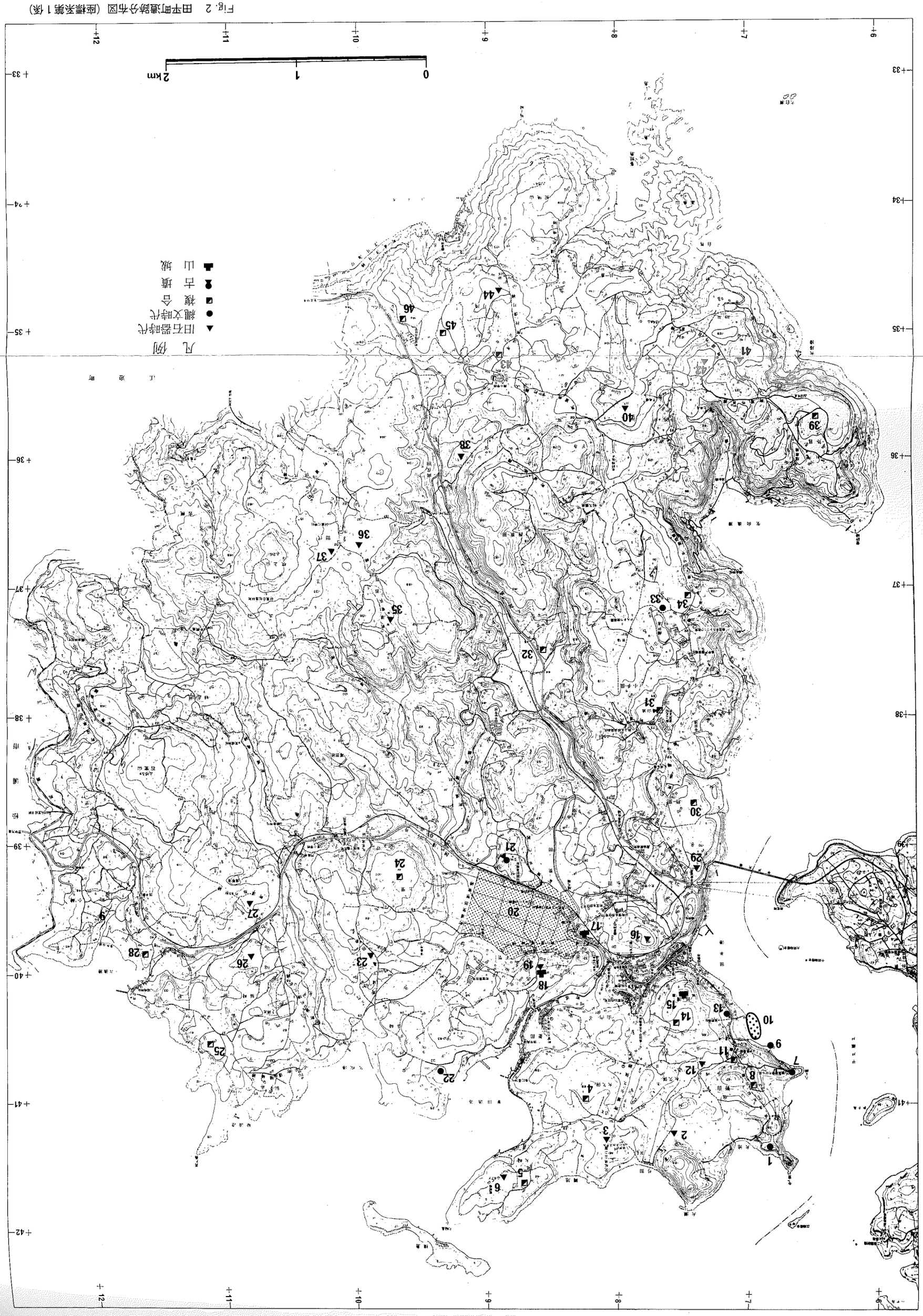


Fig. 2 田平町遺跡分布図（座標系第1係）

Tab. 1　田平町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土遺物	時期	文献
1	野田E	田平町野田免野田	溶岩台地上，標高25m	磨製石斧，石鏃他	縄文	1
2	日ノ岳	〃　大久保免字日ノ岳	標高6～7m，微高地鞍部	ナイフ形石器，台形石器，炉址他	旧石器	2
3	中瀬	〃　〃　薮田	溶岩台地上，標高40m	ナイフ形石器他	〃	3
4	永久保	〃　大久保免	標高50m，溶岩台地上	ナイフ形石器，石鏃他	旧石器～縄文	1
5	大崎みやま	〃　横島免みやま	標高40m，溶岩台地平担地	ナイフ形石器，彫器，掻器他	〃	1
6	大崎	〃　横島免	標高40m，溶岩台地斜面	ナイフ形石器，台形様石器他	旧石器	3
7	八エ崎	〃　野田免八エ崎	標高20m，溶岩台地上	掻器，石錘他	縄文	4
8	野田D	〃　野田免	標高40m，〃	石錐，石鏃他	旧石器～縄文	1
9	つぐめの鼻	〃　〃　212	標高1～5m，汀線を含む低平地	土器片，石銛，石鋸，他多数	縄文早～中	
10	野田海中	〃　野田免公有地先水面	標高0～2m，汀線下	石銛，掻器，土器片，他多数	縄文	5
11	野田B	〃　〃　野田·	標高40m，溶岩台地上	ナイフ形石器，細石核	旧石器～縄文	1
12	野田A	〃　〃　〃	標高25m，丘陵鞍部	ナイフ形石器他	旧石器	6
13	前目	〃　〃　前目	標高20m，台地平担部	土器片，掻器，石鏃，他	縄文	7
14	猿牟田	〃　山内免猿牟田	標高50m，台地斜面	ナイフ形石器，石鏃，剝片他	旧石器～縄文	1
15	陣笠城	〃　日の浦免	標高73m，山頂	かつて石墨，空堀あり	16C初	8
16	永田	〃　永田免	標高50m，丘陵頂上平担部	ナイフ形石器他	旧石器	5
17	籠手田城（こてだ）	〃　山内免	標高35m，独立丘陵	空堀·本丸，国道，鉄道により分断	15C中	8
18	里城	〃　里免	標高40m，台地上平担部	本丸，空堀，石墨，平城	12C末	8
19	里城址	〃　〃	〃　〃	細石核	旧石器	9
20	里田原	〃　〃	標高17m，沖積平野，丘陵	土器片，石器，木製品多数	縄文～中世	10
21	笠松古墳	〃　小手田免米ノ内	標高30m，丘陵平担部	長さ31mの前方後円墳	古墳	10d
22	岳崎	〃　岳崎免	標高25m，溶岩台地斜面	石鏃，剝片他	縄文	1
23	久吹	〃　下亀免大津方	標高75m，〃	ナイフ形石器，台形様石器	旧石器	1
24	広久保	〃　〃　広久保	標高65m，丘陵頂上平担部	ナイフ形石器，ポイント，石斧他	旧石器～縄文	1
25	福崎B	〃　福崎免福崎	標高35m，溶岩台地斜面	石鏃，掻器，剝片他	〃	1
26	福崎A	〃　〃　〃	標高65m，〃	ナイフ形石器他	旧石器	10
27	池の原	〃　下亀免	標高60m，〃	ナイフ形石器	旧石器	5
28	小崎	〃　小崎免辻畑	標高35m，〃	石核，掻器，石鏃，剝片他	旧石器～縄文	1
29	坊田B	〃　小手田免坊田	標高50m，〃	台形石器	旧石器	5
30	坊田A	〃　〃　〃	標高70m，溶岩台地平担部	ナイフ形石器，石核，石鏃，剝片	旧石器～縄文	1
31	鴨山池	〃　〃　鴨山池	標高65m，池周辺	石鏃，土器片	縄文～弥生	1
32	**中野ノ辻**	**田平町萩田免中野ノ辻**	**標高60m，丘陵上**	**箱式石棺14，ガラス玉，刀子他**	**弥生～古墳**	**本書**
33	瀬戸山	〃　瀬戸山	標高110m，溶岩台地上	石鏃，剝片他	縄文	1
34	生向	〃　生向	標高105m，〃	石錐他	旧石器～縄文	3
35	田代A	〃　田代免	標高110m，池周辺	ナイフ形石器他	旧石器	5
36	田代B	〃　〃	標高135m，台地斜面	台形石器他	〃	〃
37	田代C	〃　〃	標高140m，〃	台形石器，剝片他	〃	〃
38	南萩田	〃　南萩田免	標高100m，河岸段丘上	細石核，他	〃	〃
39	外目	〃　下寺免外目	標高120m，溶岩台地平担部	石鏃，剝片他	縄文	1
40	下寺	〃　下寺免	標高110m，〃	グレーバー他	旧石器	5
41	以善	〃　以善免以善	標高110m，〃	ナイフ形石器，台形様石器他	〃	1
42	石垣田	〃　〃　石垣田	標高110m，〃	ナイフ形石器　石核他	〃	1
43	南小学校前	〃　下寺免南小学校前	標高130m，〃	ナイフ形石器　台形様石器他	旧石器～縄文	1
44	万場	〃　深月免万場	標高150m，〃	ナイフ形石器　他	旧石器	11
45	馬の元	〃　〃　馬の元	標高140m，〃	ナイフ形石器，台形様石器他	旧石器～縄文	1
46	深月	〃　〃	標高130m，〃	石核，剝片他	〃	1

文　献

1．長崎県教育委員会　1978　「里田原遺跡」　長崎県文化財調査報告書　第38集
2．下川達彌　1975　「日ノ岳遺跡」　日本の旧石器文化３　雄山閣
　長崎県立美術博物館　1981　「日ノ岳遺跡」　他
3．萩原博文　1971　「長崎県松浦市周辺の先土器文化」　考古学ジャーナル59
4．1971年県教委試掘　報文未刊
5．中村和正氏教示
6．山口譲治　1968　「長崎県田平町における無土器文化遺跡」　発掘者44
7．1977　県教委緊急調査　報文未刊
8．日本城郭大系17　1980　「長崎県」　新人物往来社
9．下川達彌　1975　「日ノ岳遺跡」　日本の旧石器文化３　雄山閣
10．a 長崎県教育委員会　1972　「里田原遺跡（図録）」　長崎県文化財調査報告書　第14集
　b　〃　1974　「里田原遺跡 略報Ⅱ」　〃　第18集
　c　〃　1975　「里田原遺跡」　〃　第21集
　d　〃　1976　「里田原遺跡」　〃　第25集
　e　〃　1977　「里田原遺跡」　〃　第32集
　f　〃　1978　「里田原遺跡」　〃　第38集
　他
11．芝本・下川　1966　「伊万里湾沿岸における無土器文化」　古代学研究46

こととなり，この面では，陸地の沈降などの地殻変動を考えざるを得ないものと思われる。

弥生時代では**20**里田原遺跡が著名である。昭和46年に多くの土器片と共に多種多様な木製品が出土して耳目を集め，爾来，昭和54年までに19次にわたって遺跡の範囲確認が行なわれた。その結果，縄文晩期，弥生前～中期，古墳，そして中世に至る非常に巾のある，地点を異にした複合遺跡であることが判った。

当該地は，現在標高17ｍ前後，面積50ha程の盆地内に在り，平坦なその殆んどは水田であり町内有数の穀倉地帯であるが，旧状は粘土，礫などを含む埋積谷であり，いたるところに深山沼沢を含む起伏に富んだ照葉樹林を形成していたものと考えられる。そのような湿潤な地勢が初期の農耕には適していたものと思われ，農耕具を多量に含む豊富な木製品の出土が里田原開拓の初源期の様相をよく物語っているものと言えよう。

この他の弥生遺跡については，**31**で中期の土器を散見し得るのと，本書で報告する中野ノ辻遺跡が知られるのみである。墓地についても前述里田原で中期の土壙墓が１基半壊した形で残存するのみで，その点では，明確な墓址としてはこの中野ノ辻遺跡が初例である。

古墳時代の遺物も又それ程多くない。この中野ノ辻の他では，里田原での若干の須恵・土師器が出土するのみである。只，21の笠松古墳は北松浦半島に残る唯一の前方後円墳である。位置的には里田原を見下す丘陵上に築かれ，その生活基盤が何処にあったかが窺える。

以上の如く，里田原の利用が始まって以来の田平町の歴史は，殆がど里田原及びその周辺を巡って展開する。

古墳時代以降，重要なのは里田原に残る条理制の痕跡であろう。当地の条理については先学の研究[註1]があるので詳述しないが，現在測量し得る限りにおいても，一部地域によって乱れはあるが，耕地は一坪，すなわち方1町を10筆割した短冊型の地割であることが明瞭である。

この本格的な新田開発については，鎌倉時代この地へ封ぜられた地頭，峯五郎披によって開始され，その開発に当って神社が奉祀されたとある[註2]。里田原北方に鎮座する宗像神社がそれである。しかし，一方，日本三大実録巻第19[註3]には「貞観十三年四月三日己卯肥前国宗形天神，並従五位下」とあって，社の創建は9世紀以前に遡ることを示す重要な資料と[註4]される。

ここでは，それらについて言及するすべもないが，現在まで行ってきた発掘調査の結果では，少なくとも7C頃の段階では里田原には旧地形がかなり残存していた事は確実である。しかし，それ以降については確かな遺構に接し得ない状況であるので，今後の調査に期待する他はない。

町内には3つの山城が知られている。この内18の里城址は，先述した峯五郎披によって建久3年（1192年）築城された[註5]。城址は北側より里田原を見下す台地上に位置し，空堀，石墨を残す平城の構造をもつ。1977年の里田原第17次の調査の折には，里田原北方微高丘陵部から多数の掘立柱穴とともに，多くの北宋の青・白磁[註6]が出土しており，時期的にも一致する。

峯氏は，この後，300年にわたって勢力を維持するが，その後は松浦氏の支城としての役割りに変っていく[註7]。

旧藩時代の田平町は，平戸瀬戸を狭んで位置する平戸と盛衰を一にする。町内，日の浦には平戸との渡津として，渡頭集落が発生し，大いににぎわっていたらしい。現在同地は，平戸大橋の開通により，かっての隆盛はなくなり，江戸時代の渡し場として記録にとどまるものである。

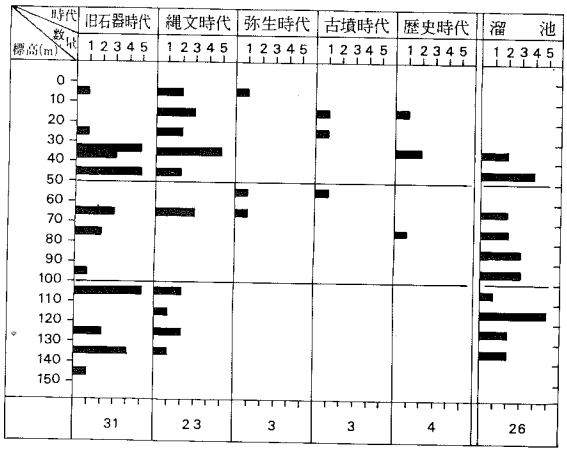


Fig. 3　等高線別遺跡頻度

註1　a．吉田敬市　1959　「肥前松浦郡西部の歴史地理学的考察」　人文地理20巻5号

b．土肥利男　1965　「多良山麓研究」

註2　平戸藩史考編纂會　1936　「平戸藩史考」

註3　1673　「日本三大実録　巻第19」

国史大系第４巻所収

註４　註１ａに同じ

註５　日本城郭大系17　1980　「長崎県」　新人物往来社

註６　長崎県教育委員会　1978　「里田原遺跡」　長崎県文化財調査報告書第38集

青白磁については馬場強氏の教示を得た。

註７　註５に同じ

中野ノ辻遺跡

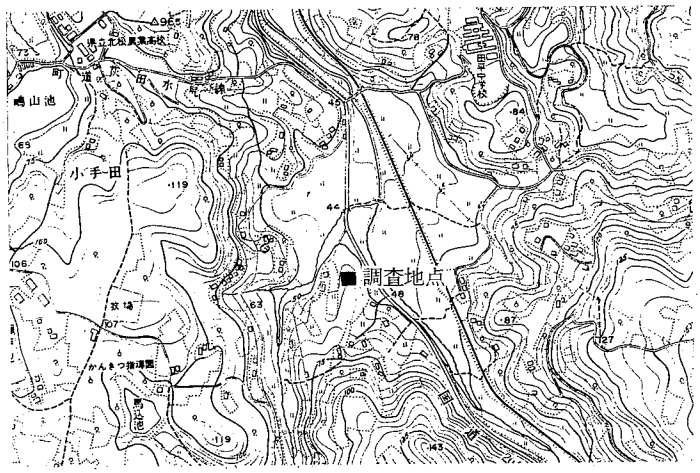
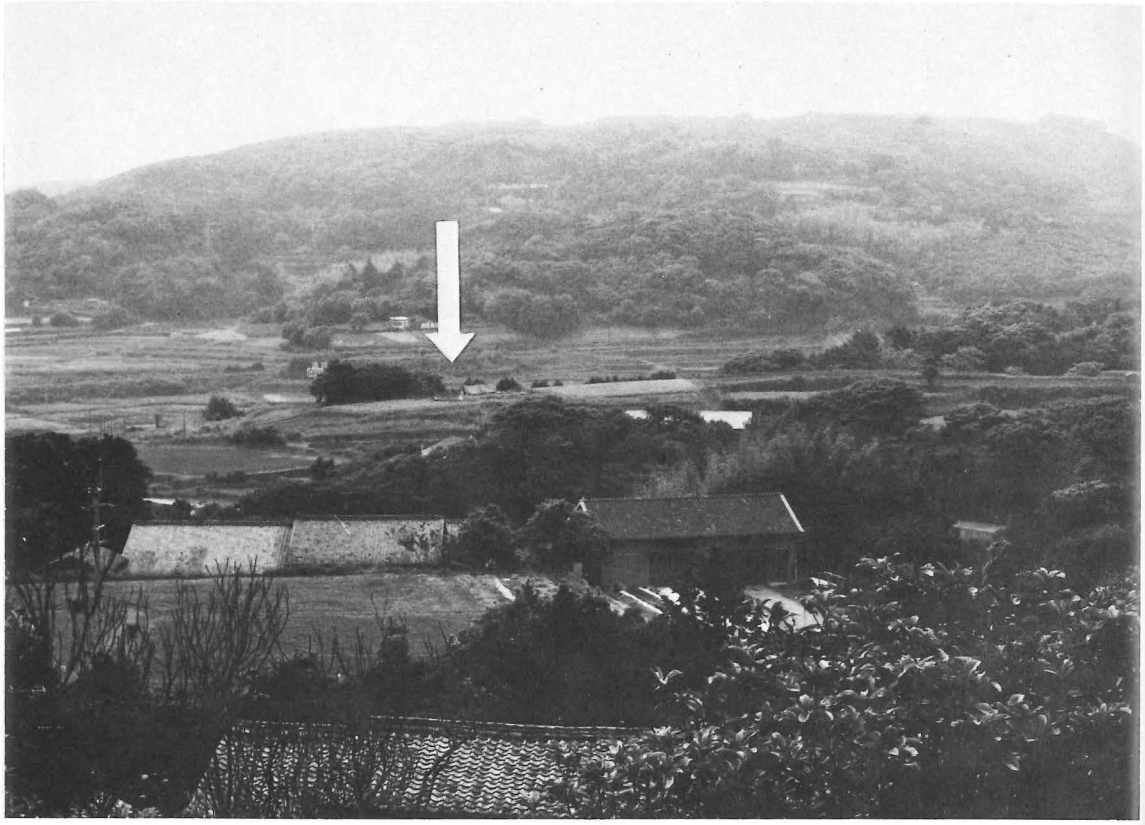
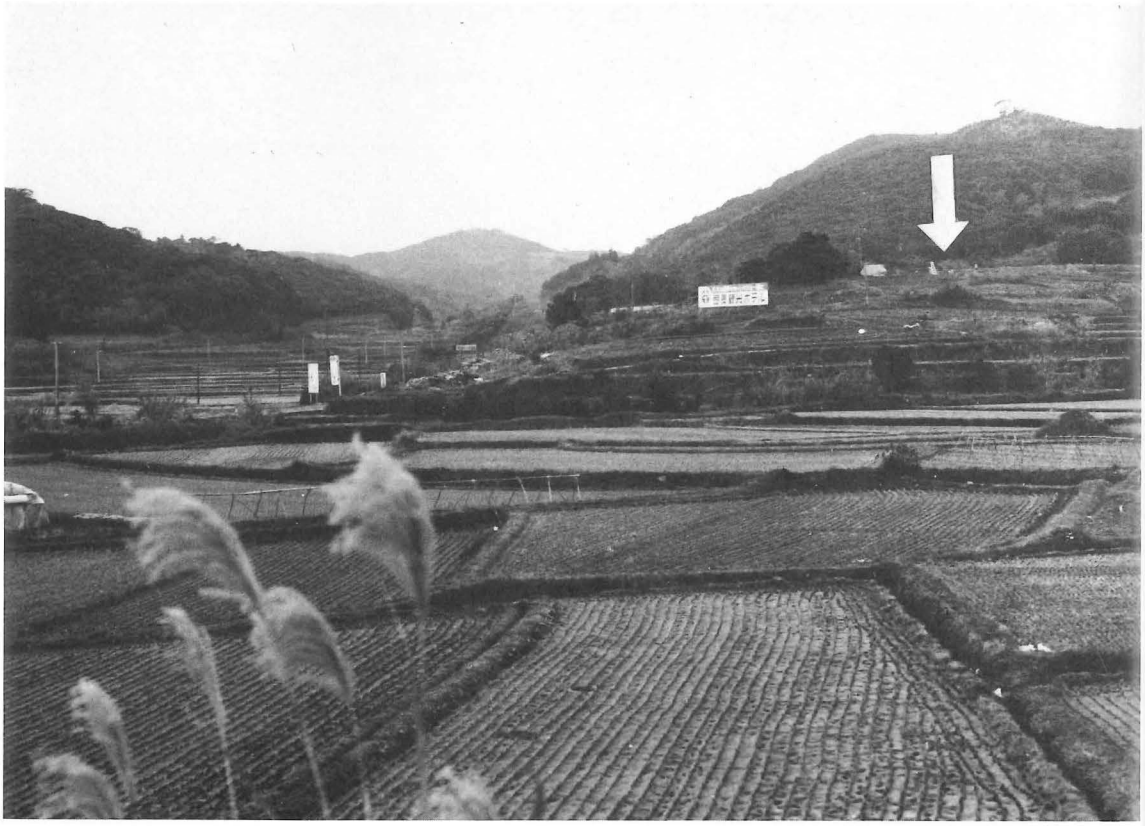


Fig. 4　調査地点位置図

PL. 1　中野ノ辻遺跡の遠景と近景





Ⅱ　中野ノ辻遺跡

一、調査経過

（第１次調査）　調査は昭和55年11月26日から同年12月２日までの７日間実施した。前述の如く露出している箱式石棺３基の実測・写真撮影および基数確認を行った。石棺の番号は発見順に附した。石棺は丘陵頂部に近い部分に集中しており，その主軸方向もまちまちであるが，標高に沿って作られたものとそうでないものとがあり一貫性がないように見受けられる。第２・３・７・８号は主軸が交錯する。棺材の利用も附近に産出する玄武岩の板状石を使用したり転石を使用したり変化に富んでいる。棺内からの時期決定ができるような副葬品は出土せず，第９号石棺から管玉・ガラス小玉等が認められたに過ぎない。

調査は，日程・費用等の都合により第２次調査の止むなきに至ったのであるが，一般的に埋蔵文化財が発見されたとか，あるいは埋蔵していると知っただけで嫌われたりするとかがある風潮の中で，数ヶ月もの間耕作もせず，しかも畑地を踏み荒らす見学者のために供覧の便を取ってくださった前田氏一家に感謝する次第である。

（第２次調査）

国庫補助を得て昭和56年５月18日から６月13日まで実施した。前回の調査で未調査の７基と隣接し丘陵頂部の畑地内の基数確認を実施した。５月とはいえ猛暑が続き調査員にとっては苦痛とさえ感じたし，雨が降らず麦の収穫が延び隣接地の基数確認調査が出来るかどうか逆の心配もあった。調査も終盤になって梅雨の影響を受け，雨中での地形測量となった。

隣接畑での基数確認は耕作土が比較的厚く、しかも炎天のため乾燥し難行を極めたが，４基を確認した。これらの箱式石棺は土地所有者の岡田力太郎氏の深い御理解により，耕作に支障がない限りそのまま現地保存することとなり埋め戻した。調査が完了した10基は適当な場所に移築復元することとし，候補地は関係機関と協議中で大筋合意を得ている。

PL．２　調査前の供養

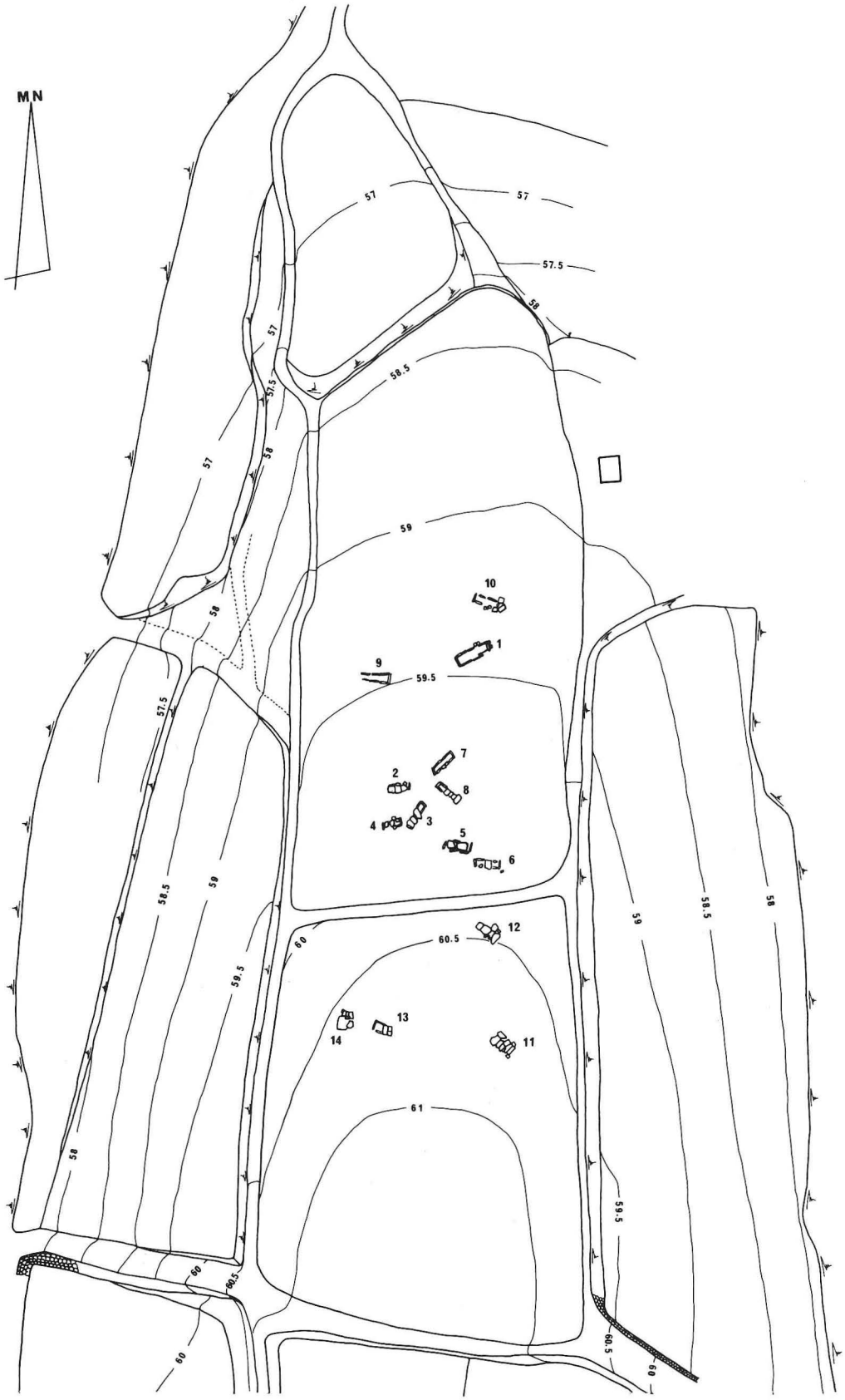


Fig. 5　遺構配置図（$\frac{1}{400}$）

1．第1号石棺（Fig. 6，PL. 3・4）

畑のほぼ中央部に位置し，今般深耕により露出し本遺跡発見の端緒となった箱式石棺である。蓋石は発見時に全部除去されてしまっておりその枚数は不明であるが，比較的大きめの板状石3～5枚を使用している。棺床も発見時に掘り抜かれてしまっており，棺身も側壁1枚が僅かにズレただけであり他の棺材は原位置を保っていた。副葬品の出土はなかったというが，後日附近よりガラス小玉を採集しており，この石棺の副葬品であった可能性は強い。

石棺の主軸はN55°08′00″Eをはかり,棺身は西側で僅かに広いがほぼ長方形を呈している。その法量は，内法で長辺 173cm，木口部で東短辺35cm，西短辺45cmと大形の類に属する。使用棺材は板状剝離した玄武岩で，使用枚数は木口にそれぞれ1枚づつ，側壁に4枚づつの計10枚であり，棺身は東が10cm位低くなっている。北壁の棺材は直線的に配列されているが，南壁は持ち送って構築されている。各棺材はほとんどと垂直に立てられている。また，北壁部の東側半分と東木口部に蓋石固定用の石材が残存している。

土壙は棺身より少し大きく，長辺で 193cmを測る。短辺は東で55cm，西で70cmを測り，棺身とほぼ相似形を示すのであるが，深度を観ると上述の理由により不正確の感は拭えないにしても，その残存状況からみて西が－20cm，東が－30cmと西から東に傾斜している。

本石棺群中最大規模ともいえる石棺で，完全な形で調査出来なかったのは残念であるが，町立歴史民俗資料館の庭に復元予定である。

PL. 3　第1号石棺発見状況

第１号石棺

同土壙↓

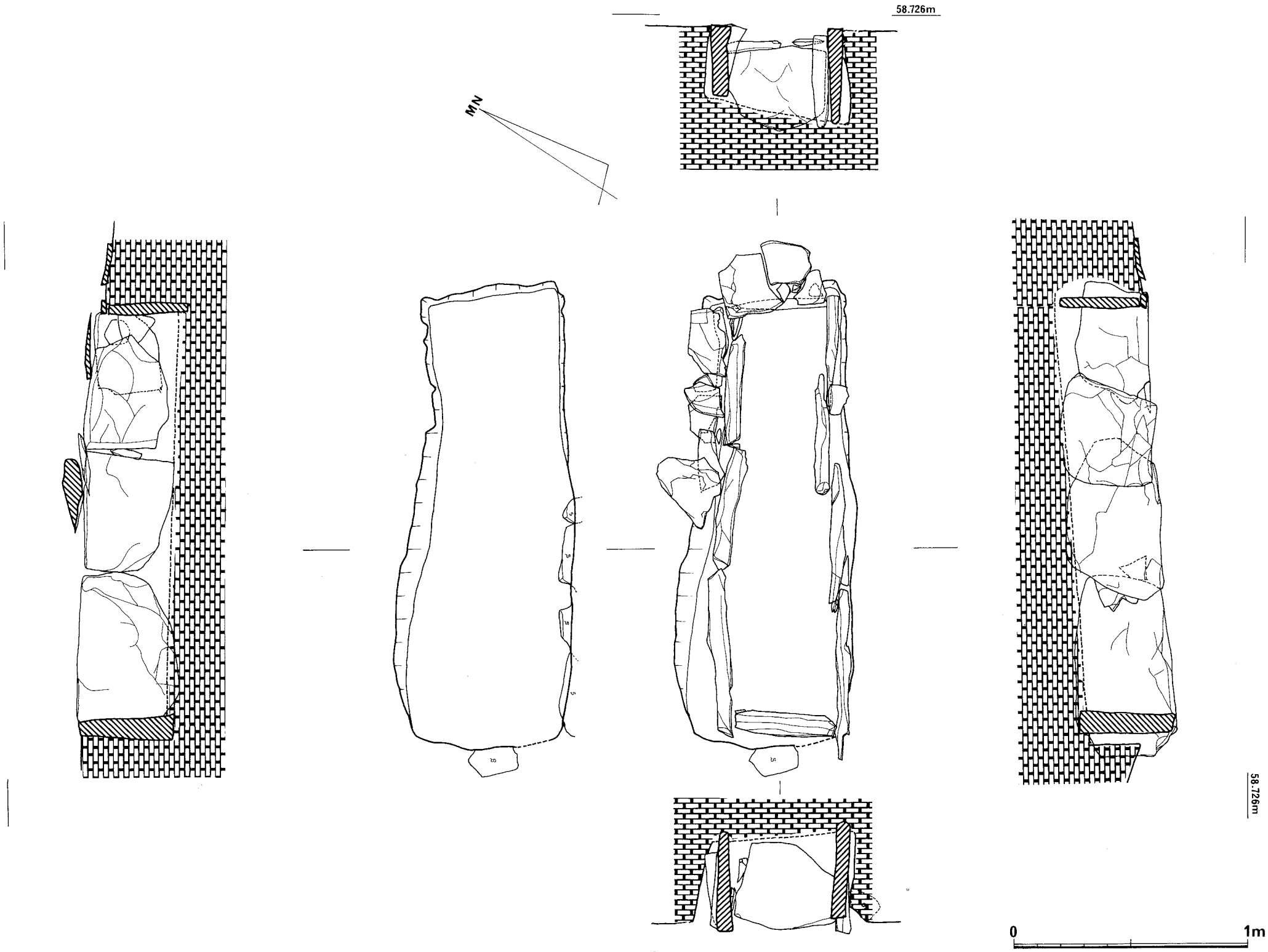


Fig. 6　第1号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

2．第2号石棺（Fig. 7，PL. 5・6）

群集する石棺のひとつで，4号と並行し，3号・7号・8号と放射状に交錯する。畑の上部にあたり耕作土の堆積は薄く，耕作の邪魔になったものと考えられるにもかかわらず，完全な状態で検出できた。築造順に土壙から見てみると，土壙の形状は下底面で隅丸の長方形を呈し，長辺 121cm，東短辺約50cm，西短辺約40cmと東を僅かに広く，また深度も東側が深い。棺材の安定を図るためほぼ垂直に掘り，棺材の状態に応じて一部に凹みをつけるなどしている。下底面はほぼ水平である。棺身は南北長辺に3枚づつ計6枚，西木口部に1枚，東木口部には主壁材が三角形のため他にもう1枚補足して塞いでいる。合計9枚の使用である。法量は長辺が117cm，東短辺39cm，西短辺が40cmと長方形で，土圧によるためかすべての棺材が内側へ約30°傾斜している。東枕と考えられ，主軸をN77°59′00″Eにとる。棺床は大体水平で，その深度は約25cm位である。他の石棺にも見られる傾向であるが，この石棺により顕著に見られる石材の利用法として，棺身の上縁を揃えるために石材の直線的な部分をあて凹凸の激しい部分は下方にする方法がとられている。副葬品の出土はない。次に蓋石を載せていくのであるが，まず，棺身のレベル調節を行うために3～5枚の小形の石材を置き，飛び出している東木口壁に接して1枚並べる。1枚分の空間をあけ2枚目，3枚目と続ける。1枚分の空間部に小形の石材を直角に置き，その上に1枚載せる。あたかも5枚使用しているかの如く見える。最後に棺身すべてを覆うように石材を載せる。合計19枚の石材利用である。棺身をも合せると28枚使用している。

PL. 5　第2号石棺発見状況

第２号石棺

同土壙

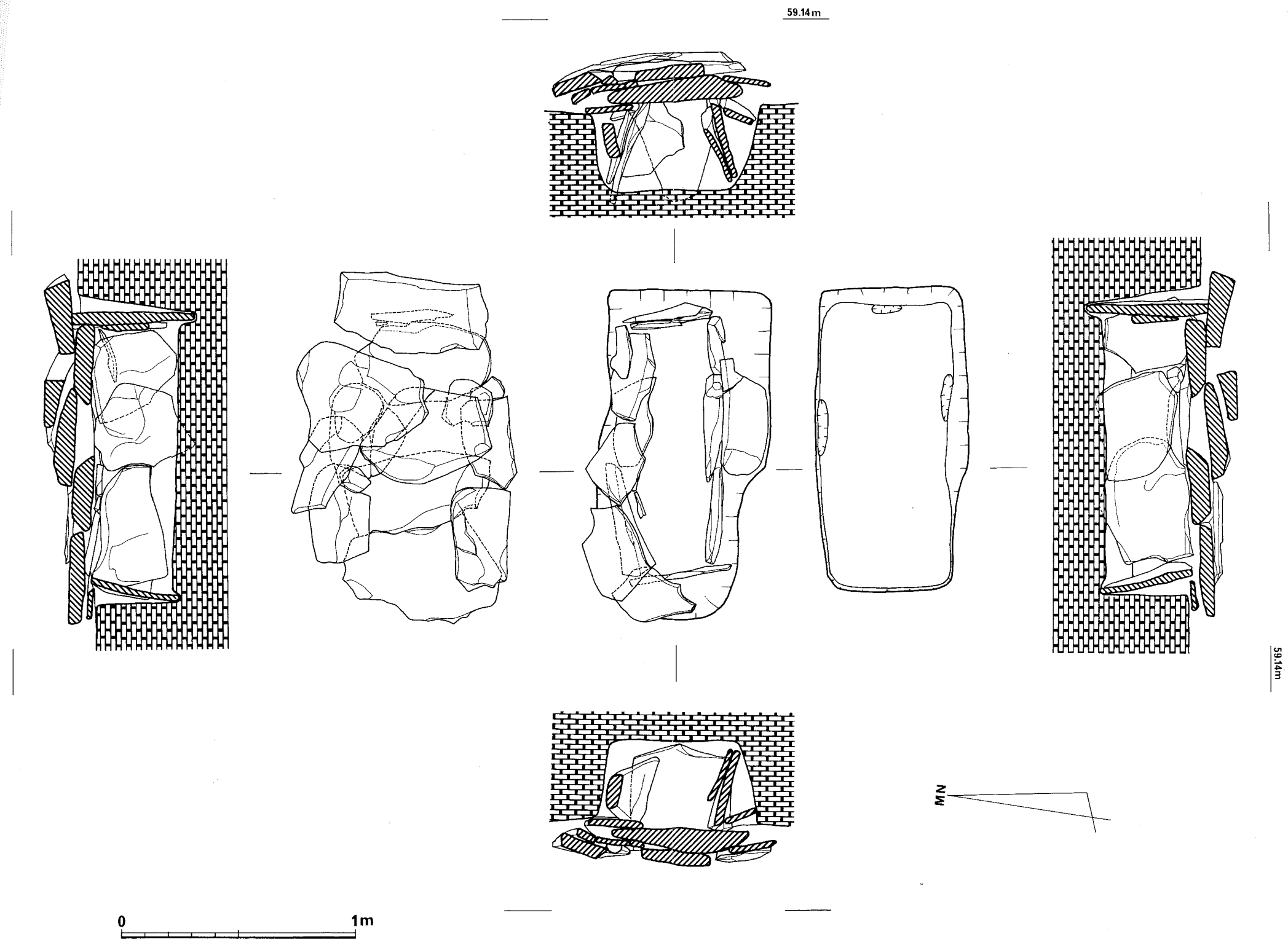


Fig. 7　第２号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

3．第3号石棺（Fig. 8，PL. 7・8）

石棺群のほぼ中央部に位置し，方位はN－23°46′38″－Eを計る。蓋材には比較的細長い扁平礫を使用するが，その数は大小合わせて19枚あり，当石棺群中最も多い。

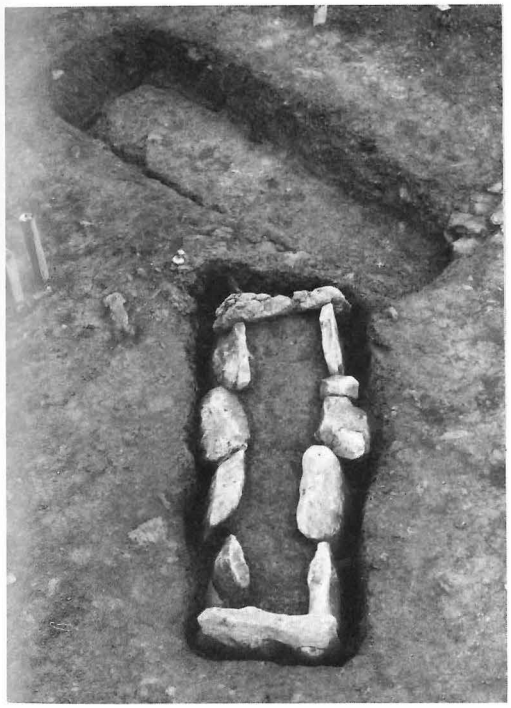
径は，土壙底部で長さ 193cm，巾は45cmであるが，石棺底部径は長さ 180cm，巾は西側で22cm，東側部分で43cmあり，長さの面でも本石棺群中最長である。また，東西の巾の違いは東枕である事を示している。深さは30～33cmでやはり東側頭部の方が若干深い。

棺の構築にあたっては，木口壁にはそれぞれ1枚，側壁については，南側で5枚，北側で6枚を用いるが，北東隅には，東に1枚の扁平小礫でその間隙を埋めている。材はそれぞれ重複させて構築しているが，深さは棺床面か，それより若干深い程度に立てかけてあるといった程度であり，この点あまり強固な作りとは言えない。なお，蓋石については，西側部分から順に蓋をしていき，東側頭部部分で完了している。

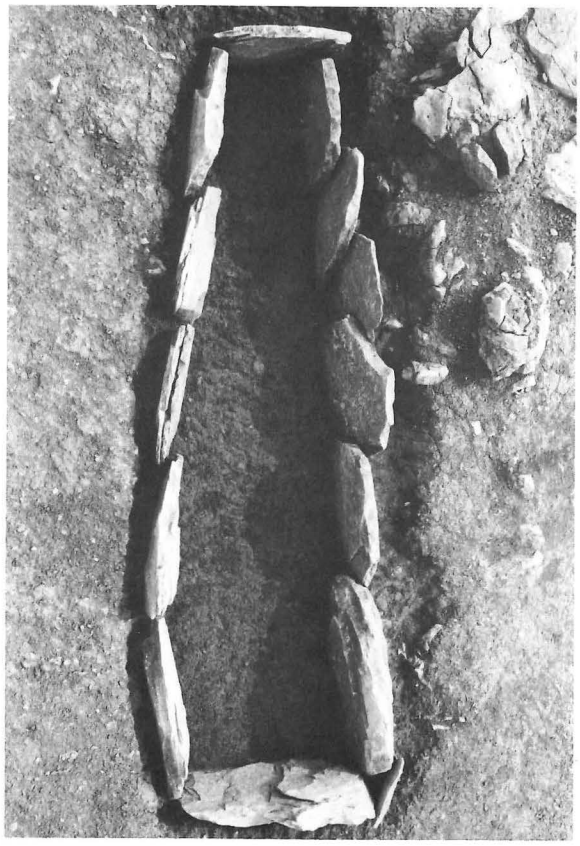
この棺の西側には第4号石棺が位置するが方位はかなり異なる。又，この両石棺の土壙の観察からすると，3号が4号土壙の東側部分を若干切っている状況があり，この事は当然ながら時期的に3号が4号より後出することを示していよう。

その他，副葬品は全く見当らない。又，石材には全て玄武岩を用いている。

PL. 7　第3号及び第4号石棺出土状況



第3号石棺



蓋石除去状況

同土壙

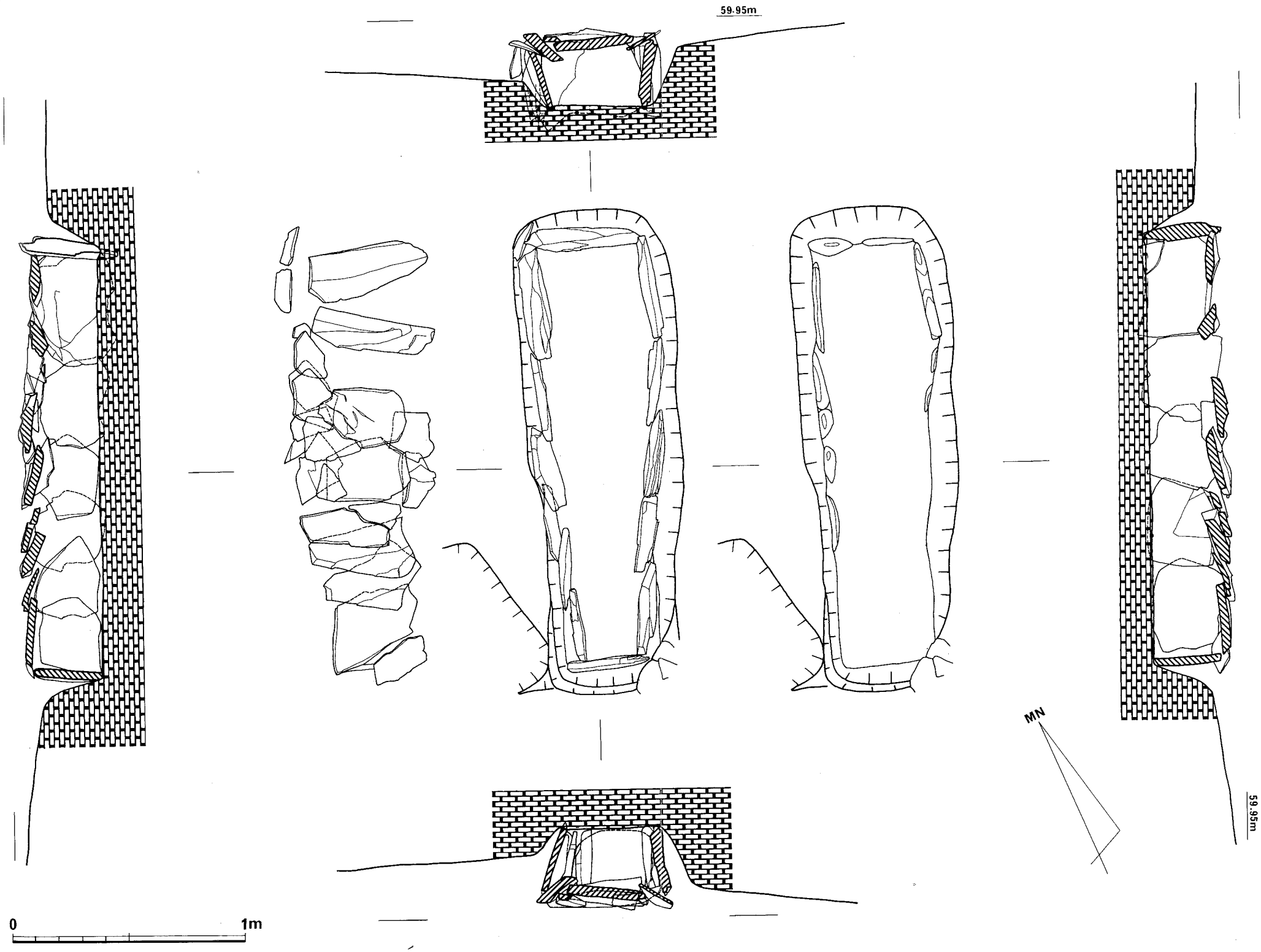


Fig. 8　第3号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

4．第4号石棺（Fig. 9，PL. 10）

丘陵の高い部分に埋設されているため，蓋石は耕耘機の爪でかなり破砕されている。いずれも厚さ5～8cmくらいの扁平な石材を4枚利用している。中に1個だけ地山に多く含まれている転石があり（一番東側），5号・6号石棺にはその利用例があるので当初は蓋石の一部と考えていたのであるが，棺身からはずれており，あるいは違っているのかも知れない。西木口壁石は覆ってなかったが，2号石棺と同じように飛び出しており，次の蓋石のレベルが合うところからすると，この上に1枚載せられていた可能性は強い。棺身と蓋石の間にはやはり小さな板状石や転石を置き蓋石の安定を図っている。

棺身は東西木口部には約30×40cmくらいの板状石1枚づつを凸部を下にして垂直に立て棺幅棺長を決定している。棺長は123cmを計る。南北側壁とも4枚の石材を木口部と同じ要領で立て，隙間を小さい石で埋め補強している。両側壁とも東木口から2枚目にひとまわり小形の石材を置いており，上縁の高さをあわせるためにさらに1枚笠状に載せ，さらに周囲に転石を配している。両側壁とも内傾する。棺床は上縁より28cm下がったところである。東枕であろう。

土壙は棺身より一まわり大きい長方形を呈し，長辺137cm，短辺は東で55cm，西45cmを計る。棺材の凸部にあわせた掘り込みをもつ。深度は約30cmで3号石棺土壙で一部切られる。

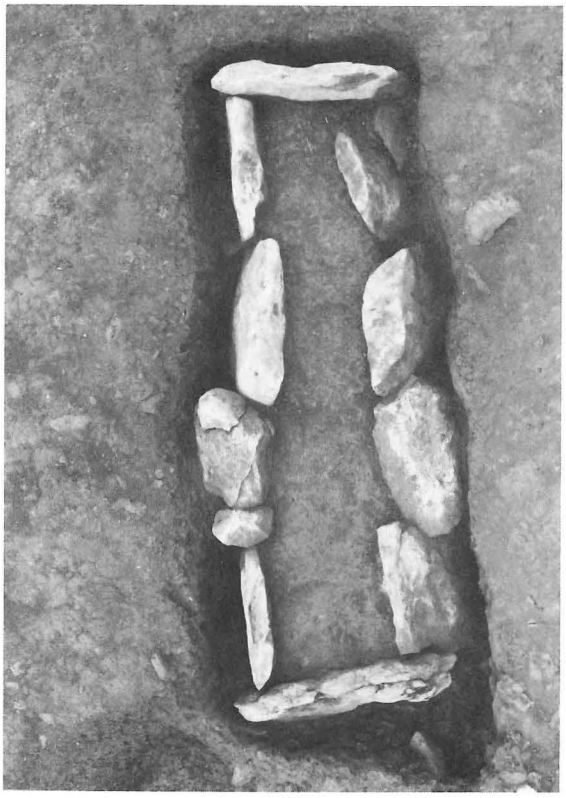
出土遺物は，蓋石直下から土器の小破片1点と棺床面から黒耀石の剝片1点をみるが，時期決定ができる資料ではない。

PL. 9　各石棺出土状況

PL.10　第４号石棺

第４号石棺

同蓋石除去状況



同土壙

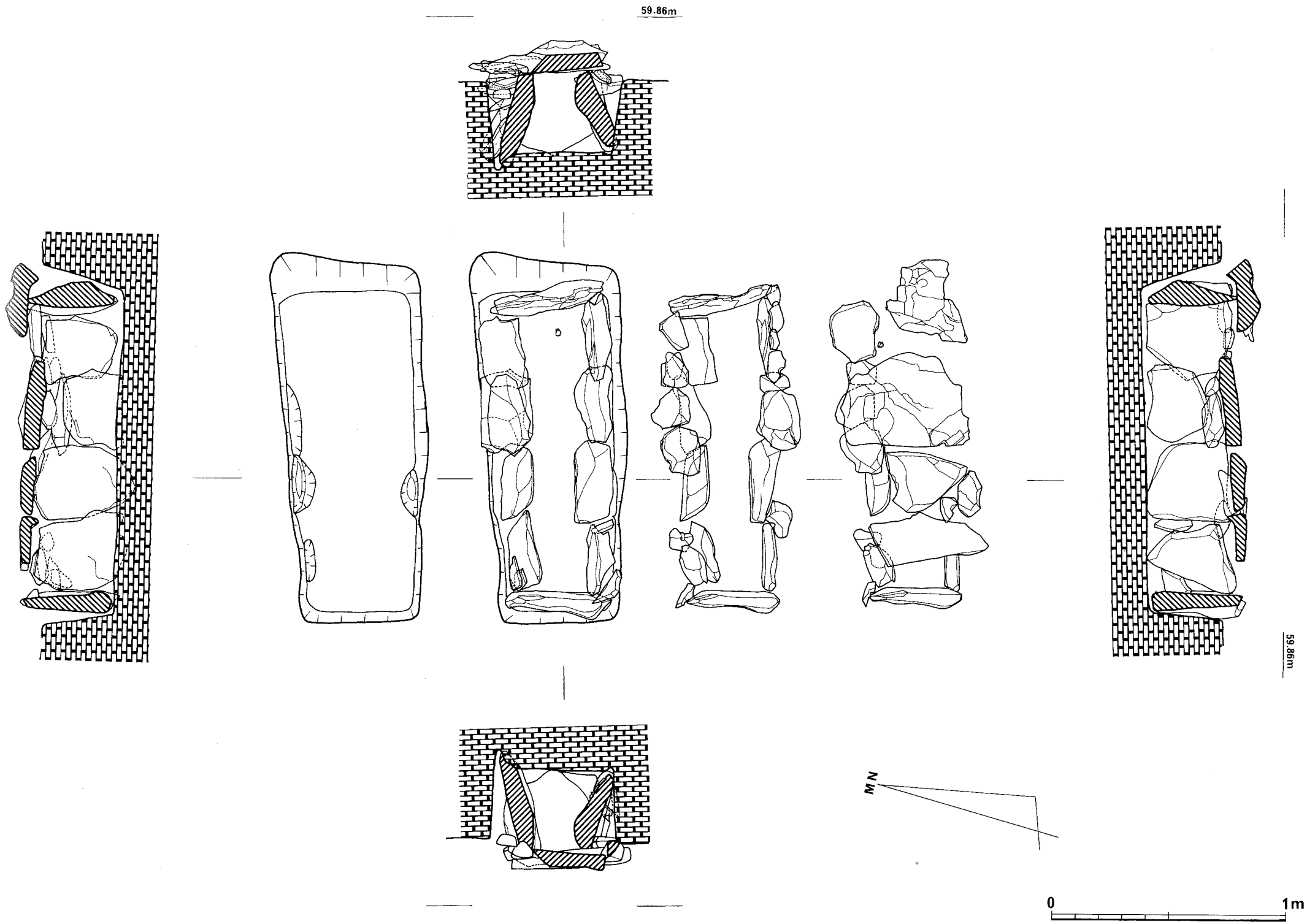


Fig. 9　第４号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

5．第5号石棺（Fig.10，PL.12）

石棺群中の中央部分に位置する。第6号石棺とほぼ同じ向きでN－94°42′30″－Eの方位を持つ。

径は土壙底部で長さ135cm，巾は45cm，深さ35cmを計り，石棺の内法では長さ125cm，巾は西側27cm，東側35cmで東側部分が若干広い。

棺材は，木口部分にはそれぞれ1枚石を用いる。又，側壁には北側で3枚，南側で4枚を使用するが，特に南壁では更に4枚の扁平小礫で材間の間隙を埋めている。なお，側壁中央部は南北共に小型の材である為に上端が揃わず，北側で5枚，南側で1枚の扁平礫を上に重ねて空間を埋めている。この事は又，棺自体の径に比して深さがより強調される結果となり埋納姿勢を窺わせる。

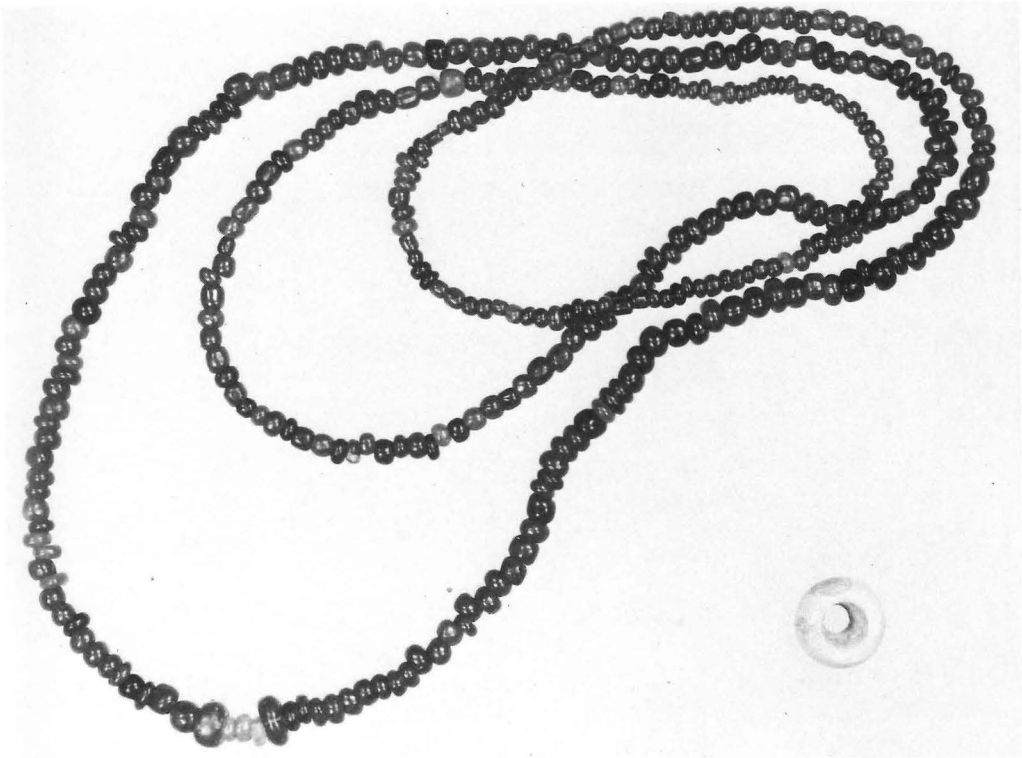
掩蓋については，まず石棺周辺に比較的小型の扁平礫を敷いた後，次に大きな板石で蓋をして完了するが東側部分では材が抜き取られた為か，木口壁が露出している。

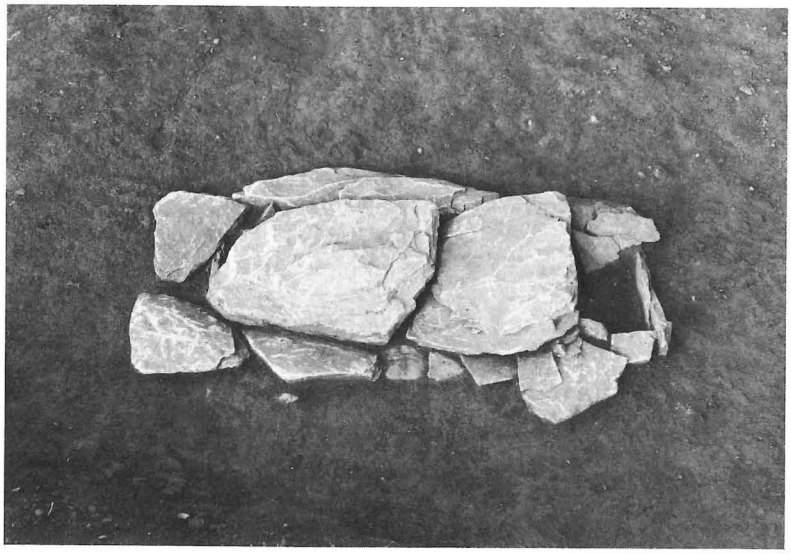
副葬品としてはガラス小玉346個とヒスイ玉が1個出土した。

ガラス小玉は特に東側部分のみに集中しており，首飾り的な用途に比定し得れば東枕である事を示している。ヒスイ玉は棺の西側寄りに単独で出土しており，ガラス小玉との間に45cm程の間隔がある事は，それらが別々の装飾品であると考えられる。

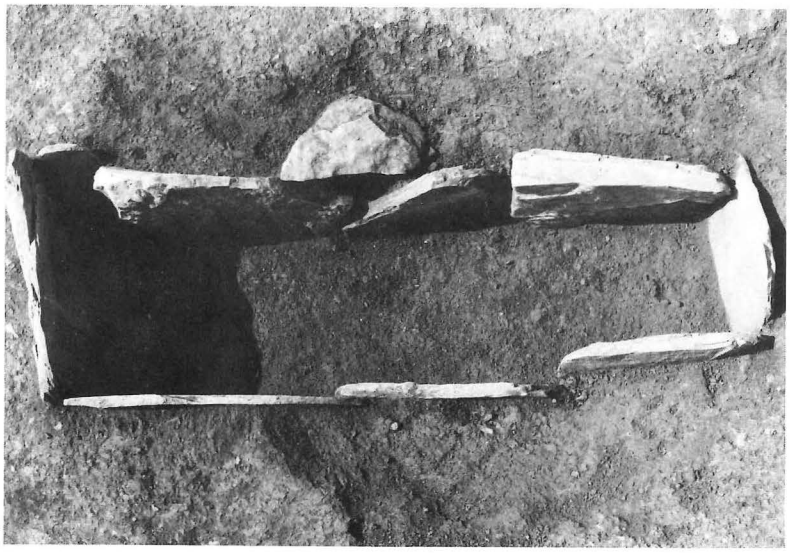
なお蛇足であるが，このヒスイ玉は位置的に被葬者の腰の部分にあたり，以下石棺の東端までが35cmしかない事は脚の形を限定する事となる。すなわち，埋納姿勢として仰臥屈葬が考えられ，この事は，先述した長径に比して深さを強調した構造の理由として理解し得る。

PL.11　第5号石棺出土ガラス玉，ヒスイ玉

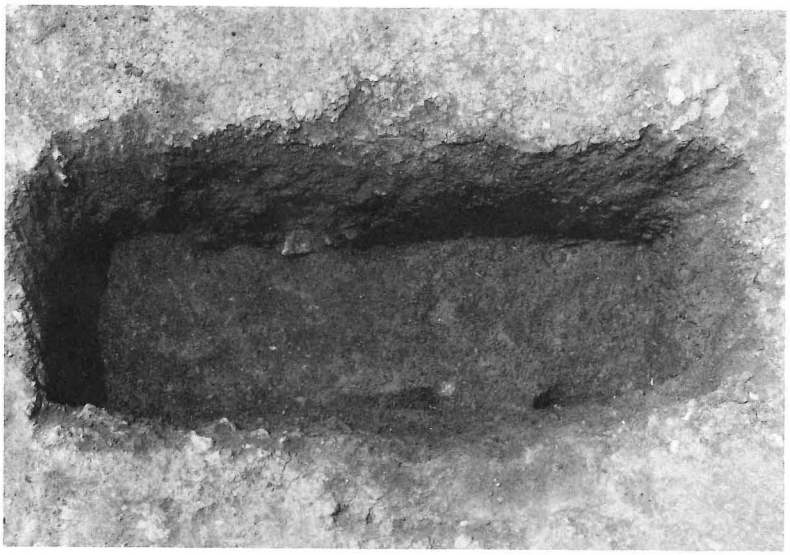




第５号石棺



同蓋石除去状況



同土壙

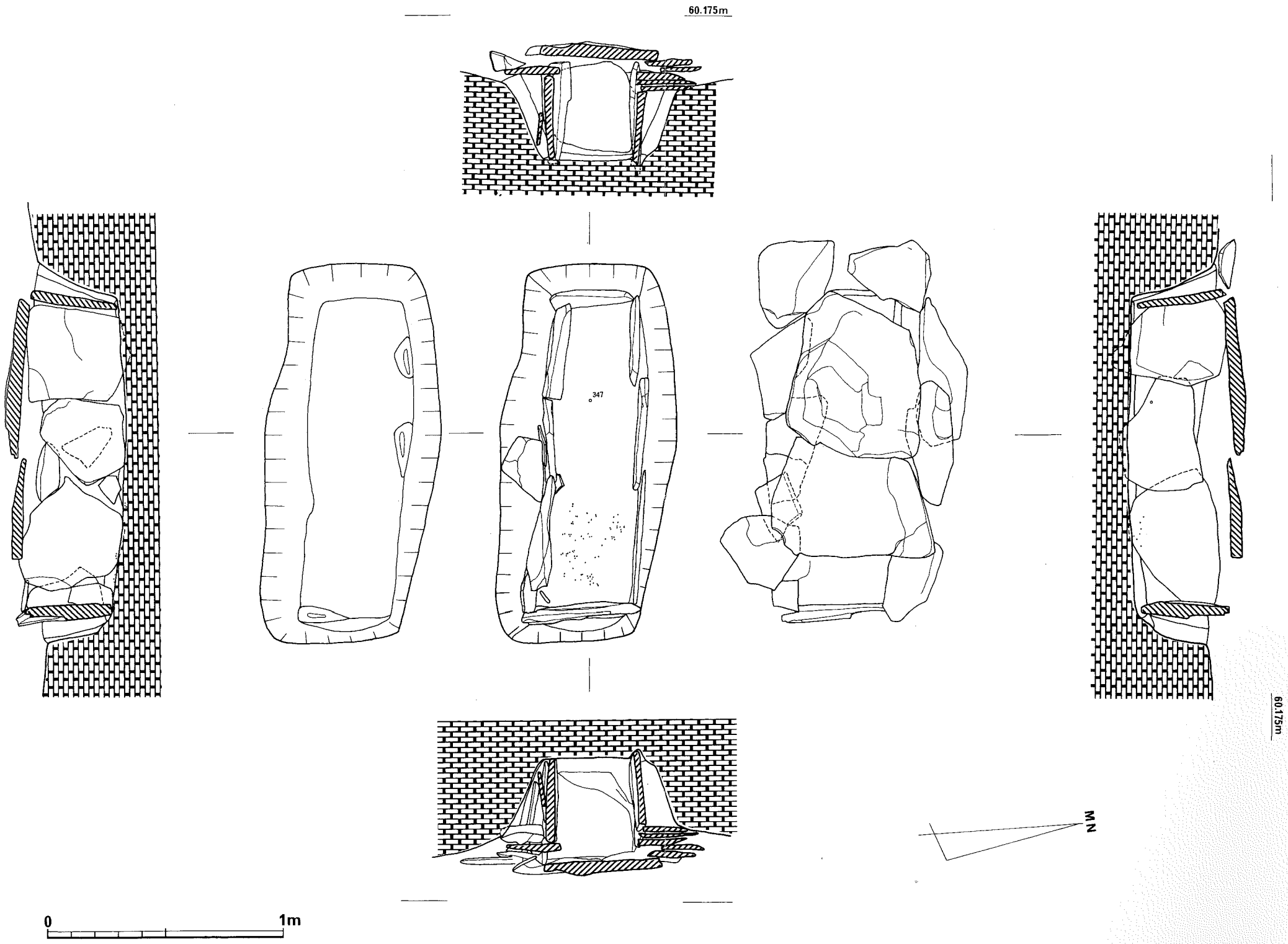


Fig.10　第５号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

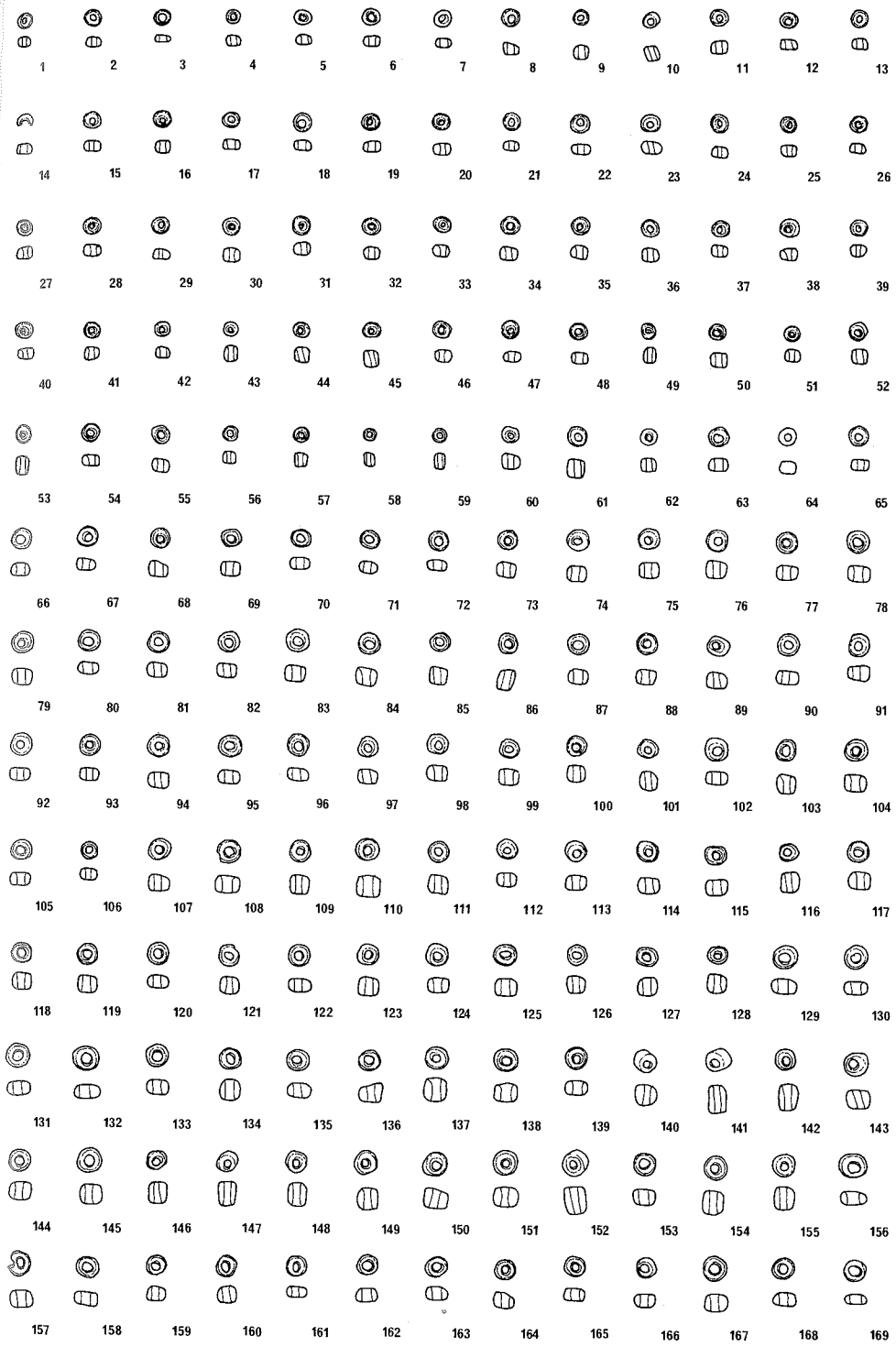


Fig.11　第５号石棺出土ガラス小玉実測図①（$\frac{1}{1}$）

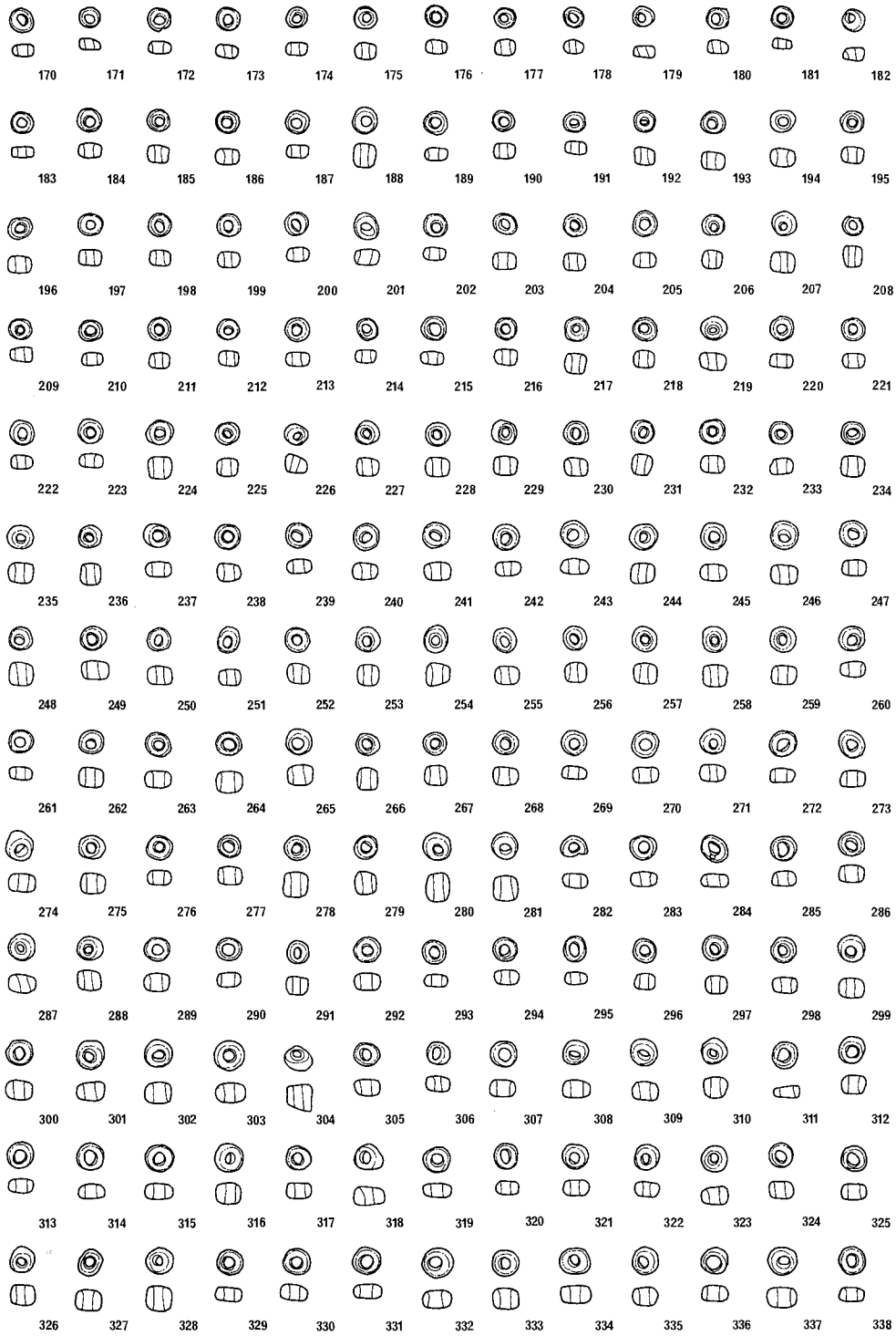


Fig.12　第５号石棺出土ガラス小玉実測図②（$\frac{1}{1}$）

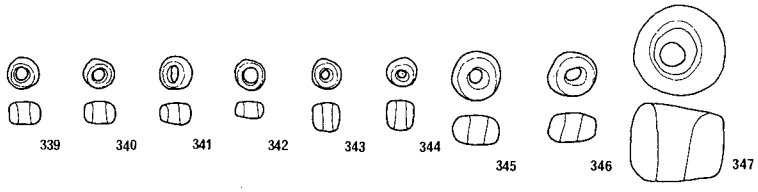


Fig.13　第５号石棺出土ガラス小玉，ヒスイ玉実測図③（$\frac{1}{1}$）

Tab. 2　第５号石棺出土ガラス小玉計測表(1)　(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考
1	2.9	1.3	1.3	紺		2	2.2	1.1	0.9	紺	
3	2.5	1.5	0.9	紺		4	2.9	1.7	1.0	紺	
5	2.9	1.9	1.0	紺		6	3.2	1.7	1.2	青	
7	2.6	1.0	1.2	青		8	2.5	0.7	2.2	青	
9	2.3	1.3	1.0	青		10	2.6	1.5	0.7	青	
11	2.8	1.3	1.2	紺		12	2.8	1.2	1.3	紺	
13	2.7	1.7	0.9	紺		14	2.7	1.5	1.1	紺	
15	2.9	1.8	1.1	紺		16	2.9	2.0	1.0	紺	
17	2.5	1.8	1.0	紺		18	2.6	2.0	1.1	紺	
19	2.4	2.0	0.8	紺		20	2.7	0.9	1.0	紺	
21	2.6	1.4	1.1	紺		22	2.7	1.5	1.1	紺	
23	2.6	2.1	1.2	紺		24	2.6	1.5	0.9	青	
25	2.7	2.7	1.0	青		26	2.5	1.2	1.2	青	
27	3.0	2.0	0.9	濃紺		28	2.8	1.2	0.4	濃紺	
29	2.9	1.6	0.8	紺		30	3.1	1.6	1.2	紺	
31	2.7	1.7	0.9	紺		32	2.7	1.9	0.7	紺	
33	3.3	1.6	1.4	青		34	3.3	1.7	1.4	青	
35	2.5	1.5	0.9	濃紺		36	2.8	1.4	1.2	紺	
37	2.5	0.9	1.3	紺		38	2.7	2.2	1.1	青	
39	3.1	2.1	1.0	青		40	3.0	1.2	1.3	紺	
41	3.5	1.7	1.2	濃紺		42	3.7	2.1	1.3	濃紺	
43	2.7	2.0	1.1	濃紺		44	3.0	1.2	1.3	濃紺	
45	2.9	2.0	1.3	紺		46	3.6	1.6	1.5	青	
47	2.9	1.9	1.0	青		48	3.1	2.2	0.9	濃紺	
49	3.1	1.9	1.0	濃紺		50	3.1	2.1	1.1	濃紺	
51	2.6	1.6	0.9	紺		52	2.9	1.5	1.2	紺	
53	3.2	1.5	1.3	濃紺		54	2.5	1.9	0.9	濃紺	
55	2.7	1.6	0.9	濃紺		56	2.3	1.2	0.8	濃紺	
57	2.4	2.3	0.9	濃紺		58	2.7	2.8	0.7	濃紺	
59	3.1	1.8	1.0	紺		60	2.9	1.9	1.3	紺	
61	3.4	1.6	1.0	濃紺		62	3.5	1.9	0.9	紺	

Tab. 3　第５号石棺出土ガラス小玉計測表(2)　(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚ささ	孔径	色彩	備考
63	3.7	2.0	1.2	紺		64	2.8	1.3	0.8	紺	
65	3.3	1.2	1.2	紺		66	2.8	1.8	0.9	濃紺	
67	1.3	2.3	1.1	濃紺		68	2.7	1.2	1.1	紺	
69	2.4	2.0	0.9	紺		70	2.7	2.3	1.2	濃紺	
71	3.2	1.6	1.0	濃紺		72	3.2	1.8	1.3	濃紺	
73	2.7	2.6	0.9	青		74	2.7	2.0	1.0	紺	
75	2.9	2.1	1.0	濃紺		76	2.3	2.2	0.9	濃紺	
77	2.4	2.4	0.8	濃紺		78	1.9	2.2	1.9	濃紺	
79	2.0	2.5	0.7	濃紺		80	3.8	1.9	1.4	紺	
81	3.0	2.7	0.1	濃紺		82	3.6	1.7	1.4	〃	
83	3.4	1.2	1.8	青		84	3.9	1.6	1.3	青	
85	3.3	1.9	1.2	青		86	3.6	1.7	1.4	濃紺	一部破損
87	3.1	1.6	1.5	紺		88	3.0	2.3	1.0	紺	
89	3.5	1.5	1.4	紺		90	3.3	2.3	0.8	濃紺	
91	3.7	1.6	1.7	青		92	2.8	2.7	1.0	濃紺	
93	3.5	2.4	1.4	濃紺		94	3.5	2.4	1.5	紺	
95	3.1	2.6	1.0	濃紺		96	3.4	1.5	1.6	濃紺	
97	3.4	2.3	1.1	紺		98	3.6	1.9	1.6	濃紺	
99	3.4	1.4	1.1	紺		100	3.4	2.3	1.5	紺	
101	3.3	2.0	1.2	紺		102	3.5	1.8	1.3	濃紺	
103	3.3	2.5	1.2	紺		104	4.1	1.8	1.6	青	
105	4.7	1.7	2.8	濃紺		106	3.7	2.0	1.4	青	
107	3.4	2.4	0.9	濃紺		108	3.4	2.3	0.8	紺	
109	3.5	2.6	1.0	紺		110	3.4	2.5	1.5	紺	
111	3.5	1.5	1.0	濃紺		112	3.4	1.3	1.0	紺	
113	3.3	2.2	1.2	紺		114	3.6	2.2	1.2	紺	
115	3.5	2.8	1.3	紺		116	3.6	2.5	1.0	紺	
117	3.5	2.4	1.0	紺		118	3.2	2.8	1.2	紺	
119	3.1	2.7	1.5	紺		120	3.5	2.2	1.4	紺	
121	3.4	2.4	1.2	青		122	3.3	2.7	1.1	青	
123	3.4	0.9	1.2	濃紺		124	3.5	2.0	1.2	紺	
125	3.7	1.4	1.2	青		126	3.5	1.7	1.2	青	
127	3.1	2.1	1.0	濃紺		128	4.0	3.3	1.3	紺	
129	3.4	2.0	1.1	紺		130	3.7	2.0	2.4	紺	
131	3.6	1.7	0.9	紺		132	1.5	1.6	1.2	青	
133	3.2	2.3	1.2	濃紺		134	3.3	1.2	1.0	濃紺	
135	3.0	2.6	1.3	紺		136	3.1	2.5	1.1	紺	
137	3.4	2.1	2.2	青		138	4.2	1.7	2.0	薄緑	
139	3.8	2.7	1.7	薄緑		140	3.3	1.9	1.5	薄緑	

Tab. 4　第５号石棺出土ガラス小玉計測表(3)　(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考
141	3.2	2.6	1.2	濃紺		142	3.0	2.5	0.9	紺	
143	3.7	2.6	1.1	紺		144	3.8	2.8	1.4	紺	
145	3.6	2.4	1.1	濃紺		146	3.7	2.4	1.3	紺	
147	3.2	3.7	1.0	濃紺		148	3.8	2.2	1.2	濃紺	
149	3.7	2.0	1.5	濃紺		150	3.6	2.7	0.9	紺	
151	3.5	2.4	1.2	濃紺		152	4.3	1.9	1.3	濃紺	
153	3.3	1.6	1.2	濃紺		154	3.5	1.8	1.4	濃紺	
155	2.8	1.7	0.8	濃紺		156	3.4	2.6	1.1	紺	
157	3.5	2.4	1.3	青		158	3.6	2.5	0.9	濃紺	
159	4.1	2.9	1.4	紺		160	3.4	2.7	0.9	濃紺	
161	3.7	2.9	2.3	紺	傷有り	162	3.8	3.1	1.2	濃紺	
163	3.2	2.7	1.2	紺		164	3.4	3.1	1.0	紺	
165	3.2	2.7	1.3	濃紺		166	3.3	2.7	1.0	濃紺	
167	3.3	2.2	1.2	青		168	3.4	2.5	1.0	濃紺	
169	3.3	2.7	1.2	紺		170	3.2	3.2	1.1	紺	
171	3.2	2.5	1.0	濃紺		172	3.7	2.9	1.1	濃紺	
173	3.7	2.0	1.6	青		174	2.9	2.7	1.4	濃紺	
175	3.2	3.1	0.8	紺		176	3.4	2.5	2.4	濃紺	
177	3.8	2.2	1.7	紺		178	3.3	1.3	0.9	紺	
179	3.1	2.7	1.1	紺		180	3.5	1.8	1.1	濃紺	
181	3.4	2.3	1.4	紺		182	3.9	2.5	1.4	濃紺	
183	4.0	1.4	1.9	青		184	3.5	2.0	1.3	濃紺	
185	3.5	2.4	1.2	紺		186	4.0	3.0	1.2	紺	
187	3.2	2.9	0.9	紺		188	3.5	2.4	1.2	紺	
189	3.7	2.3	1.1	濃紺		190	3.8	2.2	1.3	濃紺	
191	3.1	2.7	1.1	青		192	3.9	2.7	1.1	紺	
193	3.8	1.9	1.0	濃紺		194	3.7	2.1	1.2	紺	
195	3.3	2.9	1.1	紺		196	2.9	2.7	1.2	紺	
197	3.8	2.0	1.4	青		198	3.8	1.9	1.7	濃紺	
199	3.4	1.7	1.3	濃紺		200	4.0	0.9	1.3	紺	
201	3.8	1.8	1.6	濃紺		202	3.9	1.5	1.5	紺	
203	3.7	2.0	1.4	濃紺		204	4.3	2.7	1.2	濃紺	
205	4.0	2.8	0.3	濃紺		206	4.1	1.6	1.3	濃紺	
207	3.9	1.9	2.1	紺		208	3.7	2.5	1.2	紺	
209	4.1	2.2	1.2	濃紺		210	3.5	2.6	1.3	濃紺	
211	3.7	1.7	1.5	紺		212	4.0	1.6	1.4	紺	
213	4.1	1.8	1.4	濃紺		214	3.5	1.5	1.3	紺	
215	4.1	2.4	1.1	濃紺		216	4.3	2.6	1.2	紺	
217	3.7	2.1	1.1	紺		218	3.9	2.5	1.1	濃紺	

Tab. 5　第5号石棺出土ガラス小玉計測表(4)

(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考
219	3.4	2.8	1.1	青		220	3.7	2.9	1.2	濃紺	
221	3.4	2.9	1.3	濃紺		222	3.8	2.6	1.1	濃紺	
223	3.9	2.9	1.1	紺	傷有り	224	3.7	2.5	1.6	紺	
225	3.6	3.2	0.9	濃紺		226	3.6	3.0	1.5	濃紺	
227	3.9	2.4	1.3	濃紺		228	3.7	2.4	1.2	濃紺	
229	4.1	2.2	0.9	紺		230	3.8	3.2	1.2	濃紺	
231	3.7	2.7	1.0	紺		232	3.3	2.4	1.0	濃紺	
233	4.3	2.3	1.5	濃紺		234	3.3	2.6	1.0	濃紺	
235	4.0	3.1	1.0	濃紺		236	3.3	3.2	1.1	濃紺	
237	3.4	2.9	1.1	紺		238	3.8	2.7	1.3	濃紺	
239	3.6	2.5	1.0	濃紺		240	3.8	2.7	1.5	濃紺	
241	3.0	3.4	1.0	紺		242	3.3	3.1	0.8	紺	
243	3.4	3.3	1.1	濃紺		244	3.7	2.9	1.2	濃紺	
245	3.6	3.4	0.8	紺		246	4.2	3.1	1.0	濃紺	
247	4.2	2.3	1.5	濃紺		248	4.3	2.0	1.6	青	
249	4.1	2.4	1.5	紺		250	4.7	2.7	1.0	濃紺	
251	4.0	1.9	1.7	青		252	4.4	3.2	1.6	濃紺	
253	3.9	3.1	1.2	濃紺		254	4.8	3.7	1.4	濃紺	
255	4.2	2.1	1.2	濃紺	傷有り	256	3.9	2.9	1.4	濃紺	
257	3.9	3.5	1.2	濃紺(強)		258	4.2	2.4	1.5	紺	
259	4.1	1.9	1.0	紺		260	3.6	1.8	1.6	濃紺	
261	4.4	1.7	1.6	濃紺		262	4.3	2.6	1.3	濃紺	
263	4.4	3.7	1.3	紺		264	4.2	2.3	1.4	紺	
265	4.2	4.1	1.2	紺		266	3.6	3.0	1.1	濃紺	
267	4.2	2.7	1.4	紺		268	3.8	2.6	1.1	紺	
269	4.0	2.6	1.3	濃紺		270	4.0	2.3	1.7	青	
271	3.9	2.1	1.5	濃紺		272	4.2	2.0	1.6	濃紺	
273	4.0	2.6	1.2	濃紺		274	3.7	3.1	1.2	紺	
275	4.2	2.8	1.5	濃紺		276	4.0	3.6	1.4	濃紺	
277	3.8	3.0	1.2	紺		278	4.3	2.7	1.2	紺	
279	4.4	3.9	1.3	紺		280	4.0	3.0	1.2	紺	傷有り
281	4.0	3.4	0.7	紺		282	3.7	3.4	0.8	濃紺	傷有り
283	3.5	3.4	1.0	紺		284	4.1	3.0	0.9	濃紺	
285	4.3	0.9	1.9	青		286	4.3	2.7	1.6	濃紺	
287	4.3	2.7	1.7	紺		288	4.3	1.9	1.9	濃紺	
289	4.2	1.7	1.9	紺		290	4.5	2.0	1.6	濃紺	
291	4.2	2.8	1.4	濃紺		292	3.8	2.3	1.2	紺	
293	4.5	2.9	1.4	紺		294	4.0	2.0	0.9	紺	
295	4.2	1.7	1.4	濃紺		296	4.7	3.8	1.3	濃紺	

Tab. 6　第5号石棺出土ガラス小玉計測表(5)

(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考
297	4.3	1.6	1.7	紺		298	4.2	1.8	1.6	濃紺	
299	4.1	2.5	1.4	紺		300	4.2	2.1	0.9	紺	
301	4.1	2.9	1.4	濃紺		302	3.8	1.5	1.6	紺	
303	4.0	2.6	1.6	紺		304	4.2	1.9	1.4	濃紺	
305	4.1	2.8	0.9	紺		306	4.3	2.4	1.1	紺	
307	4.2	3.3	1.5	紺		308	4.1	2.8	1.5	紺	
309	4.1	3.4	1.8	濃紺		310	4.3	2.6	1.5	紺	
311	4.3	1.5	1.4	濃紺		312	3.8	3.3	1.0	紺	
313	3.7	3.1	1.0	紺		314	4.0	2.4	1.2	濃紺	
315	4.2	2.8	1.5	青		316	4.0	1.4	1.6	青	
317	4.3	1.7	1.7	紺		318	4.1	2.1	1.5	紺	
319	4.5	1.7	1.5	紺		320	3.9	2.6	1.2	紺	
321	4.3	1.7	1.5	青		322	4.6	2.1	1.5	青	
323	4.9	2.9	1.7	濃紺		324	4.6	2.7	1.8	濃紺	
325	4.2	3.3	1.3	紺		326	4.0	3.1	1.2	紺	
327	4.1	1.9	1.4	紺		328	4.8	2.8	1.4	濃紺	
329	4.2	2.7	1.5	濃紺		330	3.6	3.0	1.7	紺	
331	4.4	2.4	1.9	紺		332	4.6	3.0	1.6	紺	
333	4.5	1.8	1.1	青		334	4.6	2.9	2.5	濃紺	
335	4.4	3.2	1.6	濃紺		336	4.9	3.2	1.3	紺	
337	4.4	1.8	1.9	紺		338	4.1	3.7	1.3	濃紺	
339	3.1	3.0	0.5	青		340	4.5	3.7	1.3	紺	
341	3.9	3.3	1.7	濃紺		342	4.4	4.0	1.4	濃紺	
343	4.4	3.4	1.3	濃紺		344	4.0	1.6	1.1	青	
345	7.1	3.2	1.9	青		346	6.9	3.9	3.5	濃紺	

6．第6号石棺（Fig. 15，PL. 14）

第5号石棺の東側至近距離にほぼ向きを同じくして築かれている。方位はN－86°23′45″－Eである。

蓋石は棺中央部に1個が残存するのみで，他は耕作時に削平され欠失している。この区域は他と異なり，地山に自然礫を多く含み，土壙周囲には大小の礫が露出している。この為，棺構築にあたっては，特に側壁部でその規制を受けている。

径は土壙底辺で長さ167cm，巾40cmを計る。又，石棺内法では長さ160cm，巾は西側で20cm，東側で35cmとやはり東側部分が若干広く，後出するガラス小玉の出土状況と合わせてこの棺が東枕であったことを物語っている。

棺材には基本的には板状礫を使用するが，同時に塊石の利用もみられ，この点他の石棺と趣を異にしている。なお，棺床上におかれた4枚の板石は一見敷石的な感を受けるが，側壁強化の目的で置かれた塊石の重みによって南側側壁が内側に落ち込んだ結果と思われる。又，側壁北東部分に材がみられないのはこの部分に地山の自然礫を利用している為である。　。

副葬品としては108個のガラス小玉があった。何れも棺床上東側部分に集中しており，ガラス玉のレベルと木口壁上面との差は35cmを計る。

なお，この石棺でも同様であるが，概して壁材の土壙中への掘込みが浅く，この点棺の構造上のもろさを示していよう。

PL.13　第6号石棺出土ガラス玉

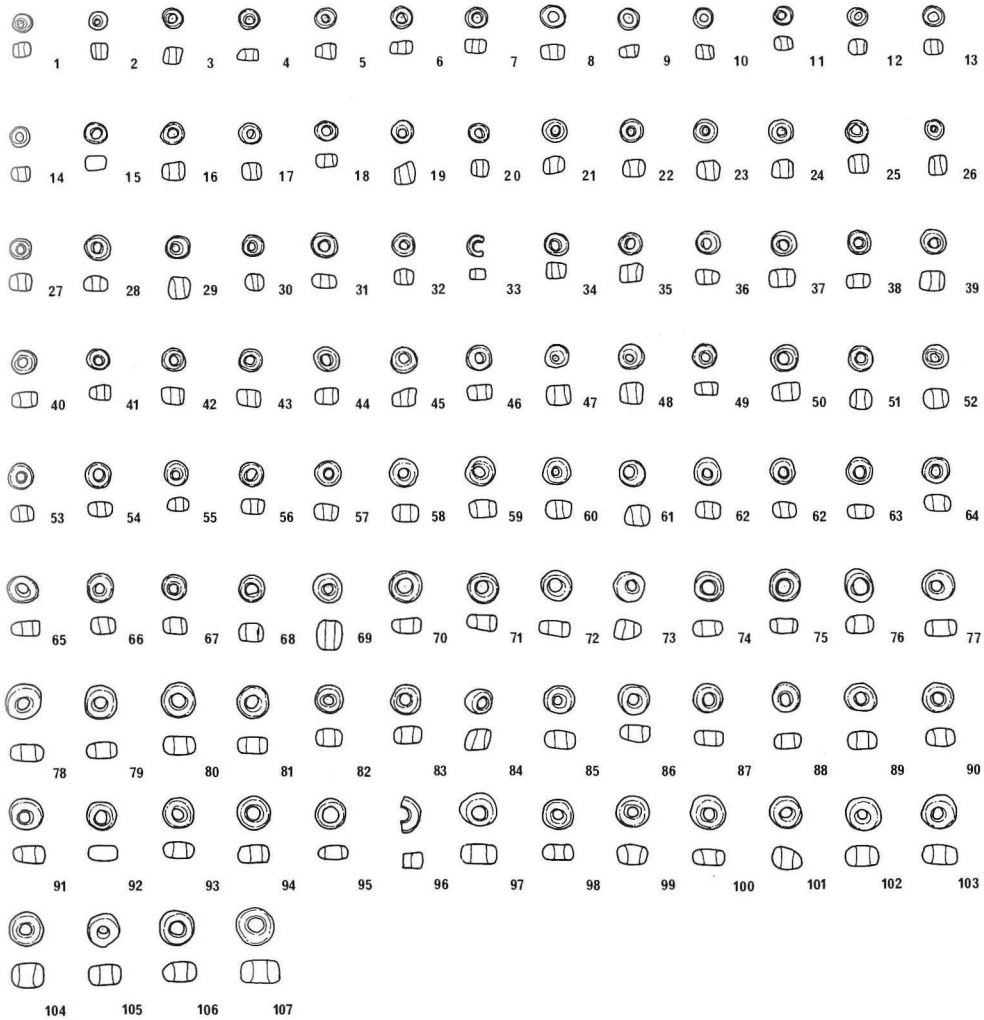


Fig.14　第６号石棺出土ガラス小玉実測図（$\frac{1}{1}$）

第6号石棺

同蓋石除去状況

同土壙

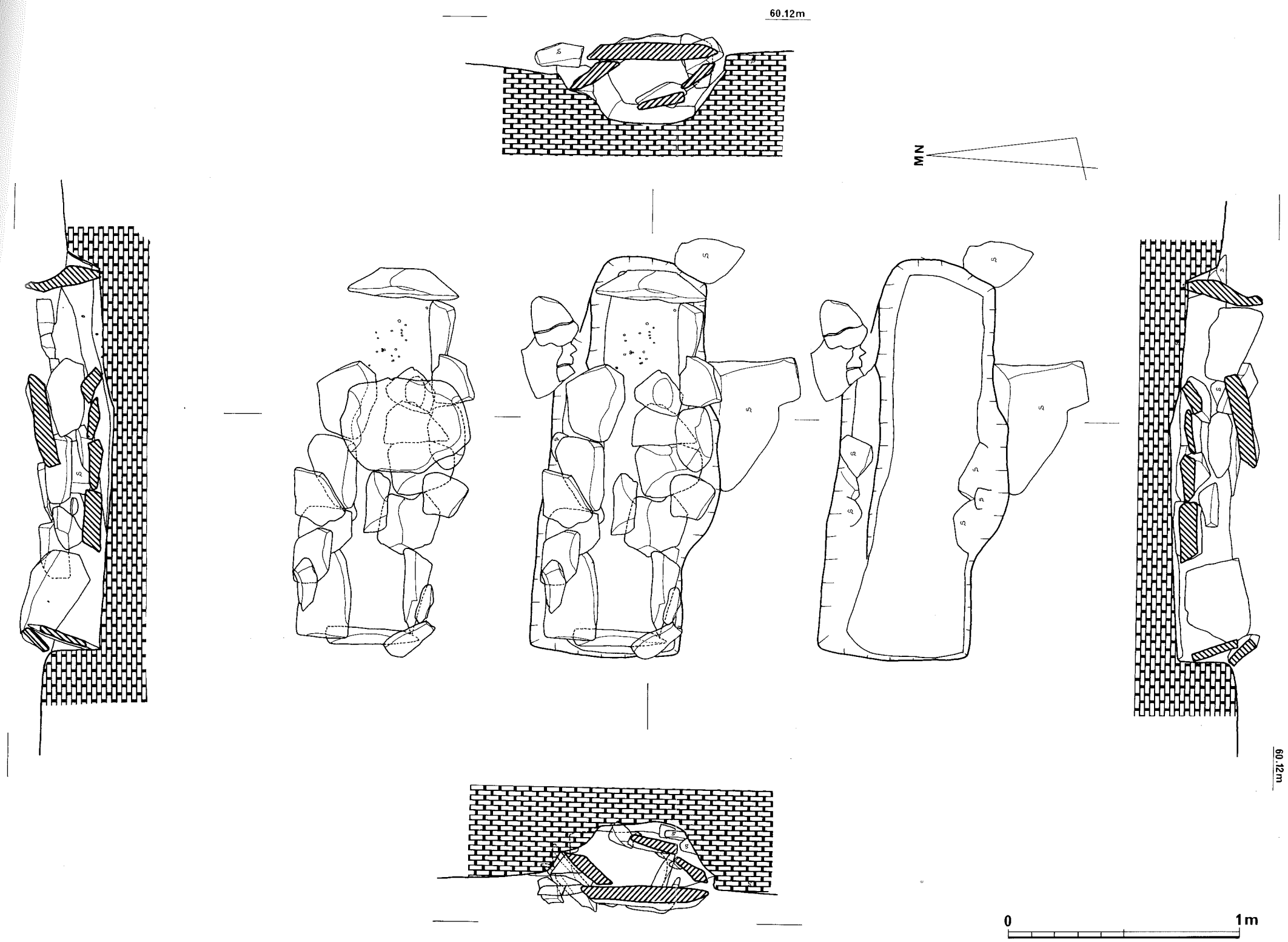


Fig.15　第6号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

Tab. 7　第6号石棺出土，ガラス小玉計測表(1)

(mm)

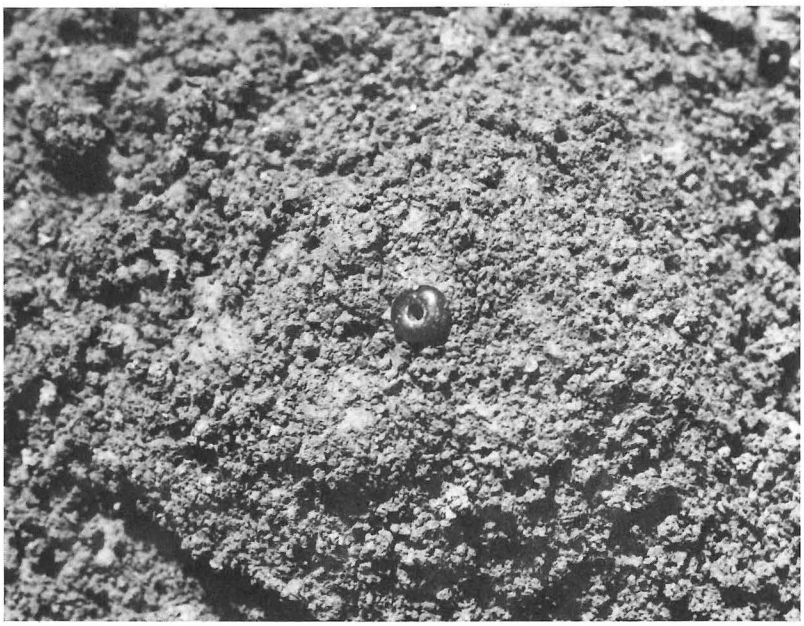
番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考
1	3.1	2.0	0.9	青		2	2.9	2.1	0.6	青	
3	3.5 (3.0)	1.9	1.1	紺	変形	4	3.0 (2.8)	1.2	0.8	紺	
5	3.0	2.0	0.1	青		6	4.3	1.2	0.9	青	
7	3.1	1.2	1.1	紺		8	3.8	1.4	1.0	紺	
9	3.4	1.2	0.9	青		10	3.2	1.3	0.8	紺	
11	3.0	1.5	0.8	濃紺		12	2.9	1.6	0.8	紺	
13	3.7 (3.0)	1.3	0.9	紺		14	3.1	1.9	0.7	濃紺	
15	3.2	1.6	0.9	青		16	3.7	2.1	1.2	紺	
17	3.4	1.9	1.1	紺		18	3.3 (2.9)	1.8	1.0	紺	
19	2.9	2.5	1.0	紺		20	3.3	1.9	0.9	紺	
21	3.2	2.0	1.0	紺		22	3.4	2.3	0.9	紺	
23	3.0	3.0	0.7	紺		24	3.4	2.6	1.0	濃紺	
25	3.1	2.7	0.9	濃紺		26	2.8	2.9	0.6	青	
27	3.5	2.2	1.0	紺		28	3.8	1.8	0.9	濃紺	
29	3.9	3.1	0.5	青		30	3.2	2.3	0.8	紺	
31	3.7	1.9	1.1	紺		32	3.4	2.2	1.2	濃紺	
33	3.2	1.3	1.0	青	破損	34	3.4	1.8	0.8	紺	
35	3.5	1.8	0.9	濃紺		36	3.4	1.6	1.9	紺	
37	3.8	2.1	1.1	紺		38	3.5	1.6	1.0	紺	
39	3.5	2.0	1.0	濃紺		40	3.8	1.6	0.9	濃紺	
41	3.5	1.6	0.8	紺		42	3.6	2.0	1.0	濃紺	
43	3.4	1.2	0.9	濃紺		44	3.7	1.6	1.2	紺	
45	3.7	1.7	1.4	紺		46	3.6	1.6	0.5	青	
47	3.2	2.9	1.1	紺		48	3.8	2.7	0.7	紺	
49	3.8	1.7	0.9	紺		50	4.3	2.0	1.4	青	
51	3.6	2.4	0.9	濃紺		52	3.7	2.6	1.2	濃紺	
53	3.8	2.0	1.3	濃紺		54	4.0	1.6	1.0	紺	
55	3.7	2.1	0.6	青		56	3.5	2.0	1.2	青	
57	3.9	2.6	1.0	紺		58	4.2	2.2	1.4	濃紺	
59	4.1	2.0	1.5	濃紺		60	4.0	2.8	1.3	濃紺	
61	3.8	2.9	0.8	濃紺		62	4.1	2.2	1.1	紺	
63	3.9	2.1	1.1	紺		64	3.9	2.0	1.0	青	
65	4.2	2.0	1.1	青		66	4.2	2.8	1.7	青	
67	4.5	1.8	1.1	青		68	3.4	2.5	1.4[5]	紺	
69	4.7	2.2	1.8[5]	紺		70	4.0[5]	3.9	1.1	濃紺	
71	4.7	1.7	2.1	青		72	4.3	1.8	1.8	青	
73	4.2	1.9	2.9	青		74	4.3	2.3	1.3	青	
75	4.0	1.6	1.9	青		76	4.4	1.6	2.3	紺	
77	4.6	1.9	1.9	紺		78	4.6	2.4	1.4	紺	

Tab. 8　第6号石棺出土ガラス小玉計測表(2)

(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備考
79	4.6	2.2	0.5	紺		80	4.6	2.2	0.5	紺	
81	4.9	2.0	0.8	青		82	4.5	1.7	1.9	青	
83	3.9	2.3	1.1	紺		84	4.3	2.6	1.7	紺	
85	3.7	2.6	1.4	濃紺		86	4.1	2.1	1.4	紺	
87	4.5	1.8	1.3	紺		88	4.1	1.7	1.4	紺	
89	4.3	1.9	1.4	青		90	4.5	2.4	1.4	紺	
91	4.2	2.3	1.6	青		92	4.7	2.3	1.4	紺	
93	4.1	2.0	1.7	紺		94	4.3	2.4	1.4	紺	
95	4.8	2.4	0.9	紺		96	4.3	1.9	2.1	紺	
97	5.0	2.0		紺	破損	98	5.1	2.8	1.7	濃紺	
99	4.6	2.0	1.4	紺		100	4.7	2.5	1.5	濃紺	
101	4.8	2.4	1.6	濃紺		102	4.7	2.9	1.9	濃紺	
103	5.0	2.8	1.7	濃紺		104	5.0	2.4	1.3	紺	
105	4.8	2.9	1.8	濃紺		106	4.8	3.0	1.8	濃紺	
107	5.0	2.5	1.8	濃紺		108	5.5	2.6	2.2	濃紺	

PL.15　ガラス玉出土状況



7．第7号石棺（Fig. 17，PL. 18）

主軸が交錯する一群の構成員で，長大な部類に属する。蓋石はすべて玄武岩の板状石を使用するが，その配し方は西木口部から置き始め，いわゆる刺身状に順次重ねている。西木口部(頭部と考えられる）は1枚分不足しており，耕作時の抜き取りが考えられる。9枚の使用である。北側壁部では立てかけた石材も認められる。

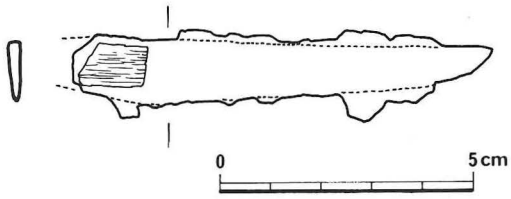
棺身は160cmとやはり長い。側壁は北壁に5枚，南壁に4枚，木口部は1枚づつ合計11枚使用しているが，石材の大きさは一定していない。また，南壁の傾斜はさほどでないのに，北壁のそれは東部分において急激な傾斜が見られる。幾分かは土圧にもよるのだろうが，木口部の石材利用からみても極端に狭く作出したことが窺われる。ちなみに東西木口の差は20cmある。持ち送りの手法は北側壁に僅かに見られるが，南壁は直線的に並べている。棺床面は上縁より約25cmくらいで，頭部附近より1本の刀子の出土を見た。

刀子（Fig. 16）は鉄製で中心を一部欠損するが，現長で8.3cm，最大幅1.2cm，最大厚0.3cmを計測する。全体的に腐触が進行しており，錆でふくれているが切先部，刃部は比較的遺存状況は良好である。

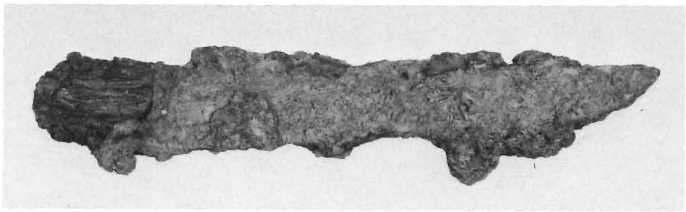
土壙は，比較的浅く掘られ中央部附近が僅かに凹む。やはり棺材の安定を図るための措置を施している。棺身に合わせて労力を少くして掘っている。主軸はN34°05′35″Eである。

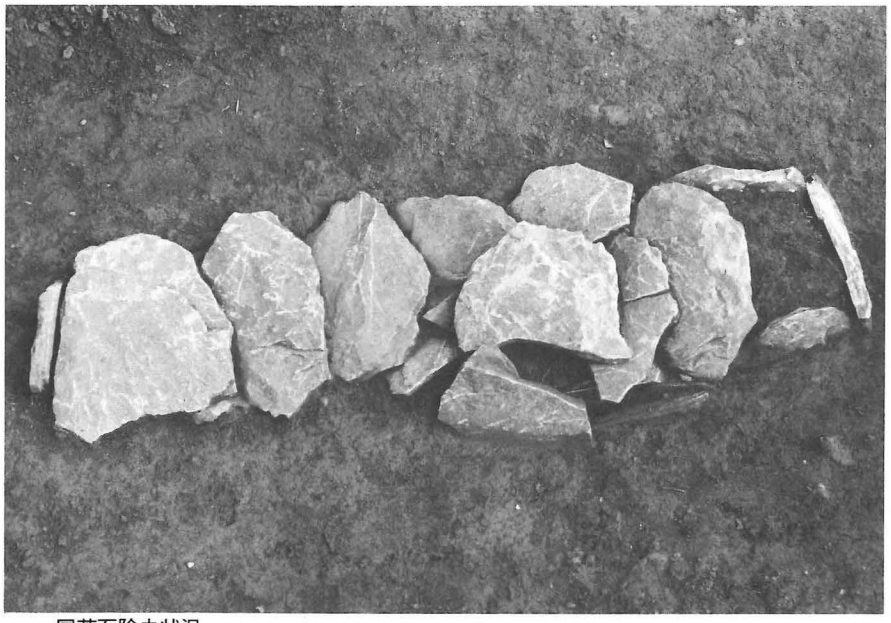
PL.16　鉄刀子出土状況

Fig.16　鉄刀子実測図



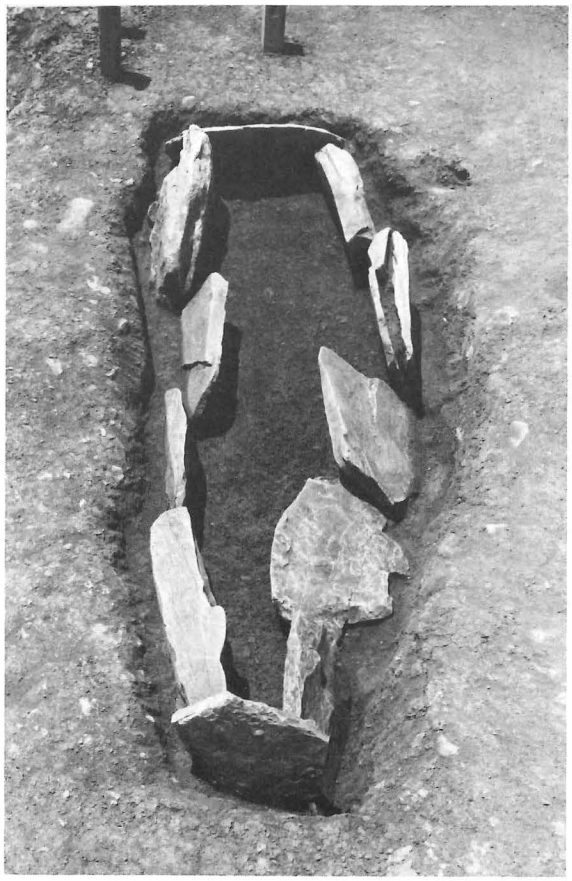
PL.17　第7号石棺出土鉄刀子





第７号石棺

同蓋石除去状況



同土壙

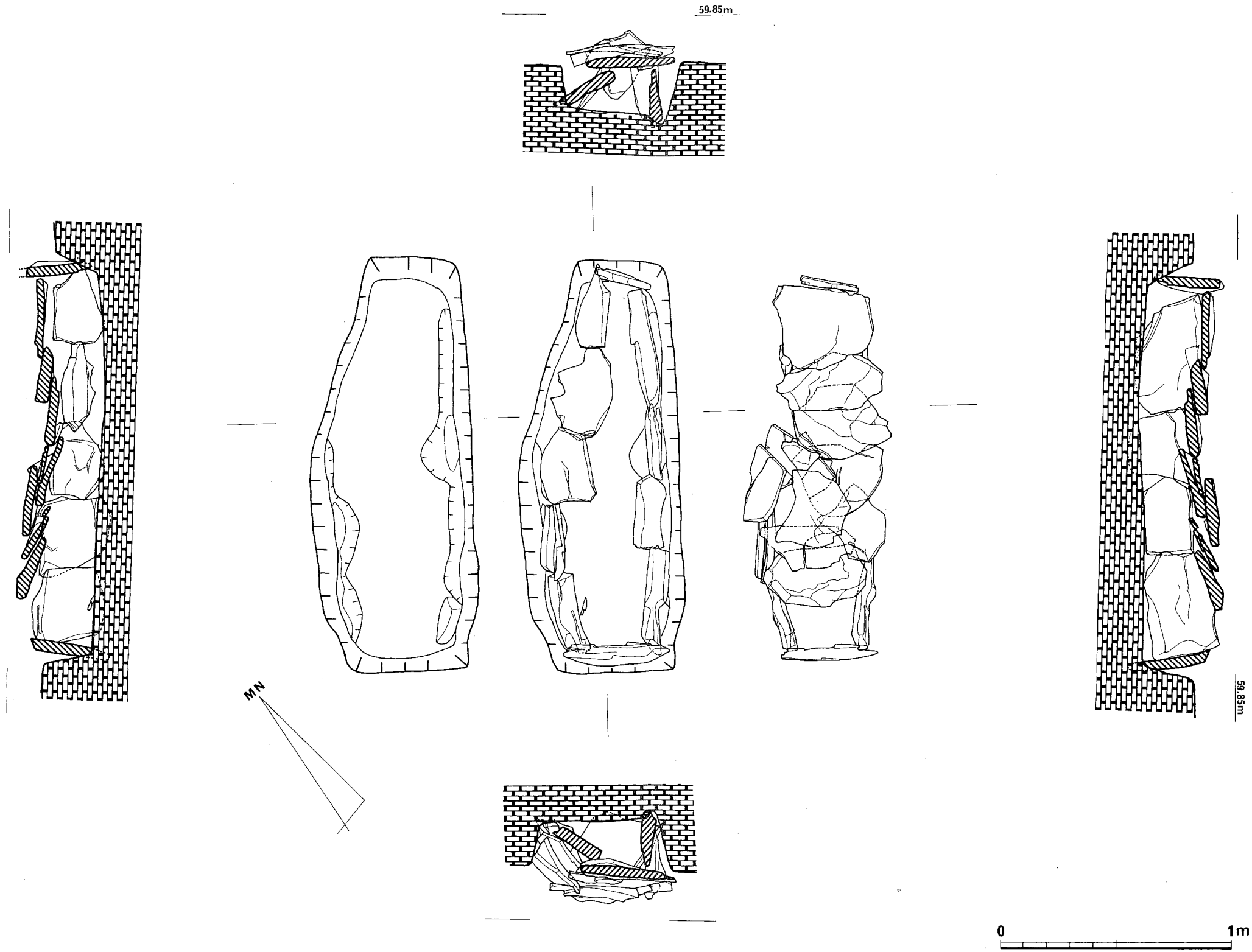


Fig.17　第７号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

第８号石棺（Fig.18, PL.20）

石棺群中ほゞ中央部に位置し，方位はN-118°40′25″-Eを計る。

８個の扁平礫と５個の塊石からなる蓋石は，平面でみる限り弯曲して置かれている為に当初打った実測用の長軸線と蓋石除去後の実際の棺の軸が合致せず，杭の打ち直しを行って軸線の訂正を行った。

径は土拡底辺で193 cm，巾は西側で35cm，東側で41cmを計り，一方石棺内法は長さ167 cm，巾は20cm，深さは35cmとなる。棺床面は東側が若干高い。

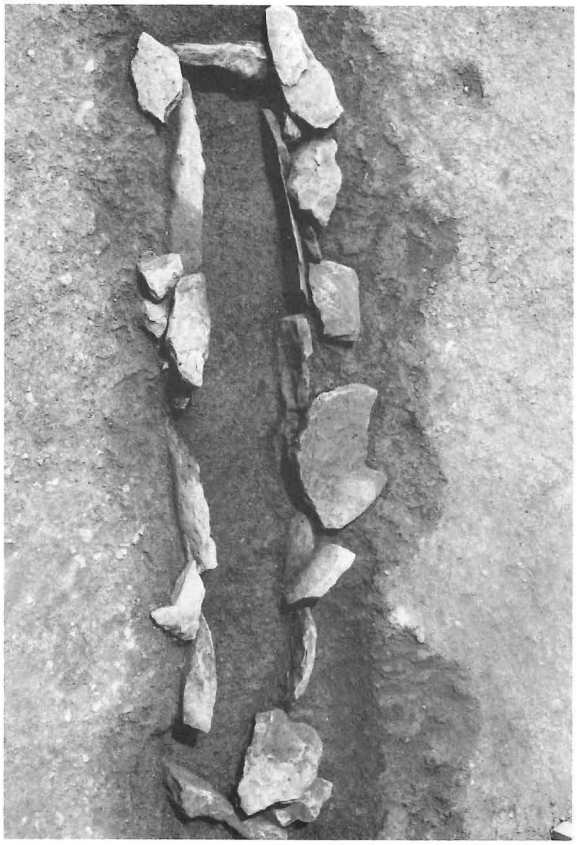
棺の構築には，東側木口壁では１枚の扁平礫を用いるが，西側は３枚の材を合掌形に組み合わせている。又，側壁には南北壁共に基本的には４枚づつの板石を使用するが，板の間隙には小礫を持って埋めている。なお，側壁は共に内側へ若干傾斜し，為に空間が狭く感じられる。

副葬品として明確なものは見当らないが，東側棺床上に１点の土器片が認められる。しかし土器そのものは無文の胴部破片であり，弥生式土器か土師器片なのかの断がつけ難く明瞭な時期比定をし得る資料ではない。

石棺そのものの組み方は，やはり他の石棺と同様，材の掘り方が浅く，構造的に決して強固とはいえない特徴をもっている。

PL.19　調査風景

第８号石棺



同蓋石除去状況

同土壙

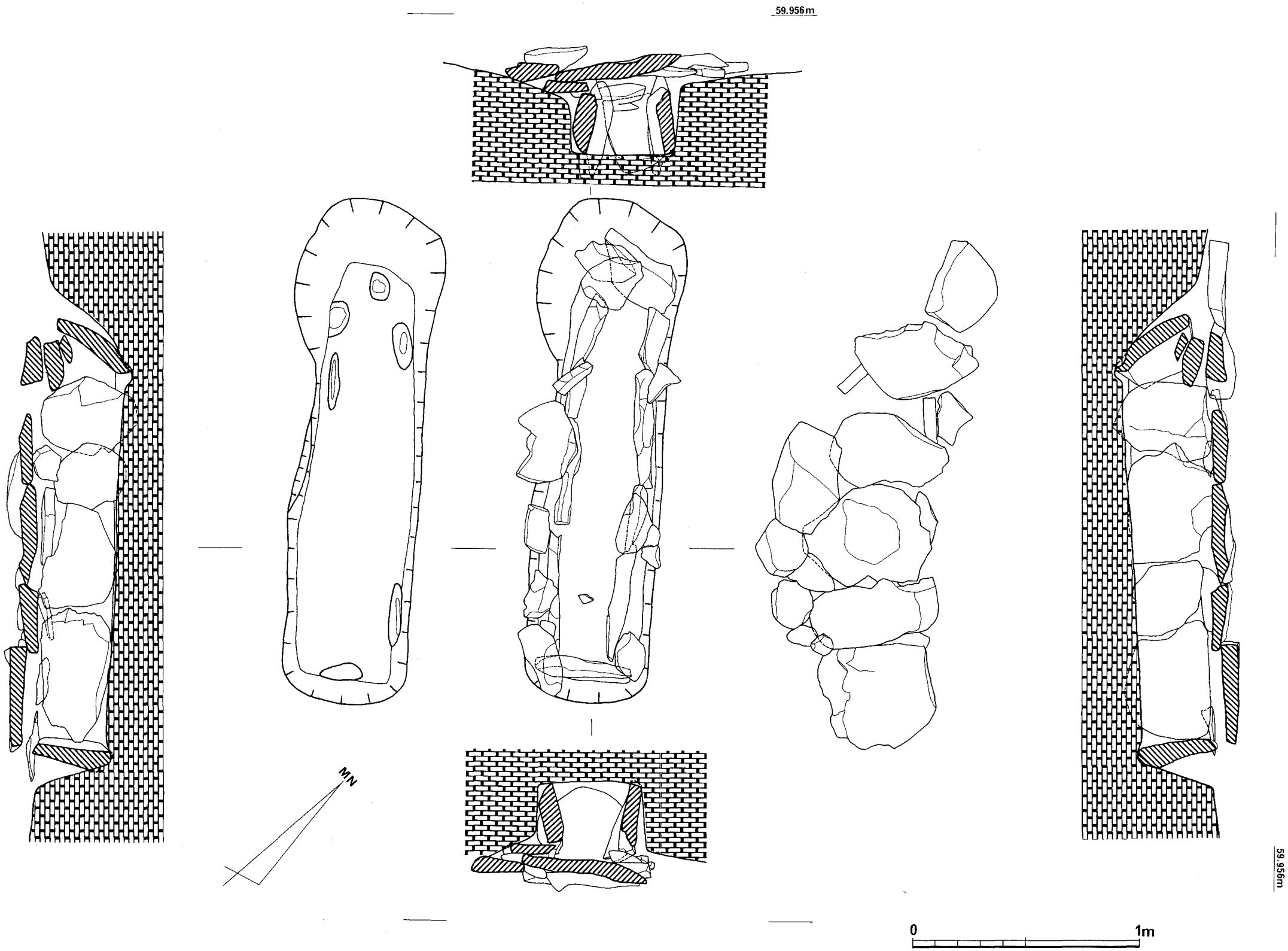


Fig.18　第8号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

第９号石棺（Fig.20，PL.23）

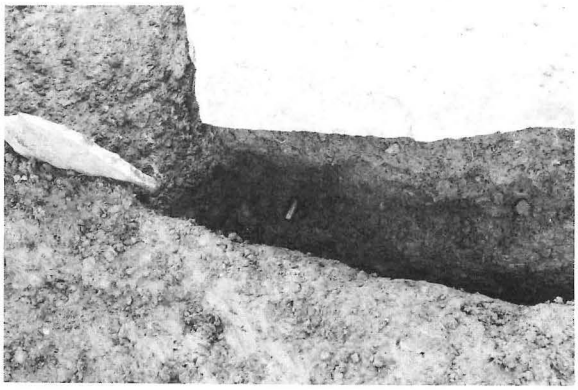
丘陵の中央部より僅かに西にあり，２号の北，１号の西にほぼ等高線に沿って位置する。蓋石，西木口石はすべて除去され，東木口は一部が残存するだけである。

棺身長は130 cm，東木口30cm，西木口10cmと７号同様20cmの差がつけられている。石棺の主軸は，N86°19′00″Eにとり，２・５・６号石棺と並列する。石材は北壁に４枚，南壁に３枚の使用であるが，隙間には小さな板状石を置く配慮がみられる。なお，南壁の１枚は棺内に倒れ込んでいる。恐らく，他の石棺と同じ手法をとったと考えられるが，現存する部分で見る限り蓋石を載せるための安定用の小石もなく，棺の上縁は水平的配慮がなく棺材の凹凸が激しい。棺床面も約20cmと浅く，西木口が僅かに高くなるがほぼ水平である。

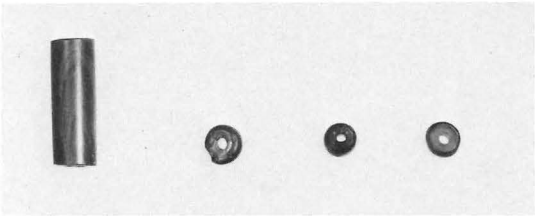
土壙は，長辺133 cm，東木口40cm，西木口15cmと棺身にあわせて小さく掘られている。棺材を置く部分はさらにその幅，深さをU字形に掘り込んでいる。

副葬品は碧玉製の管玉１個とガラス小玉３個（Fig.19）があり，出土位置は東木口に近い部分であり，遺物の性格からしてその埋葬体位は東枕とされる。これら出土遺物の各種計測値はTob. 9に示すとおりである。

PL.21　管玉出土状況



PL.22　第９号石棺出土，出土管玉ガラス玉



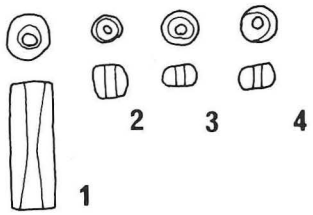


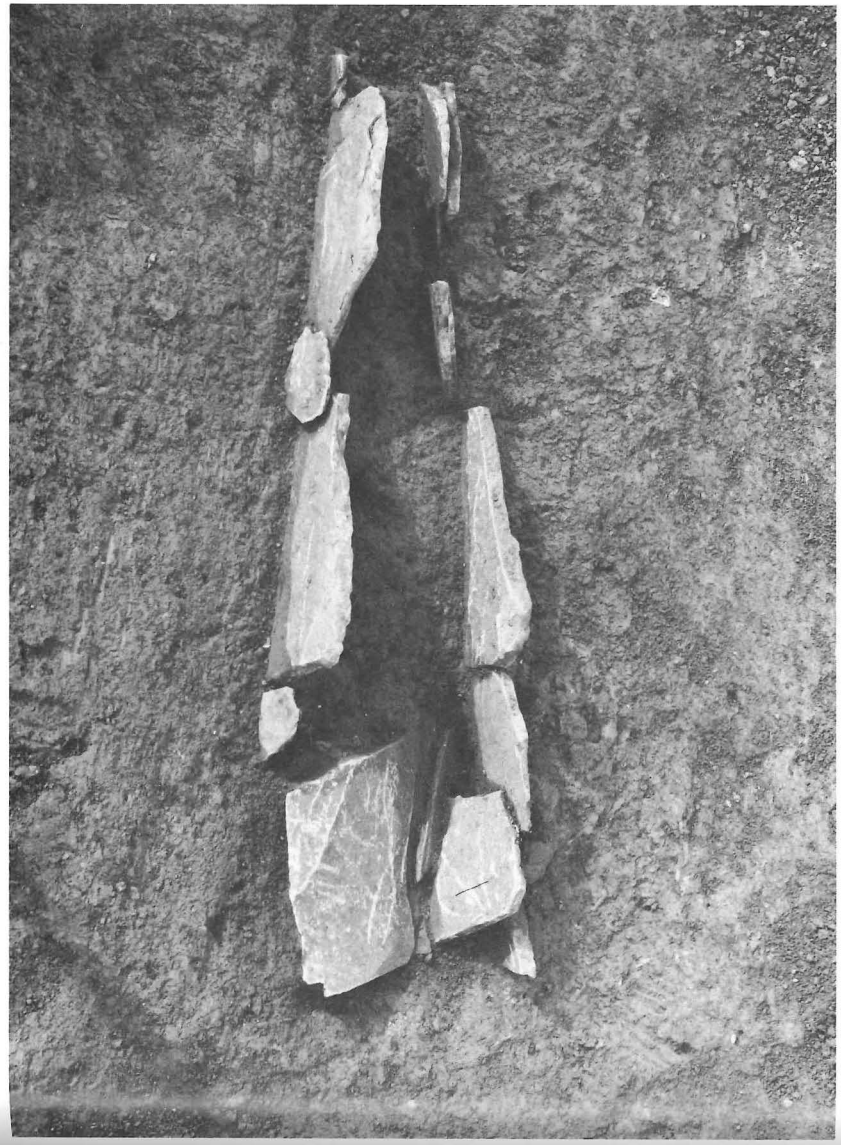
Fig.19　第９号石棺出土管玉，ガラス玉
実測図（$\frac{1}{1}$）

Tab. 9　第９号石棺出土ガラス小玉，管玉計測表

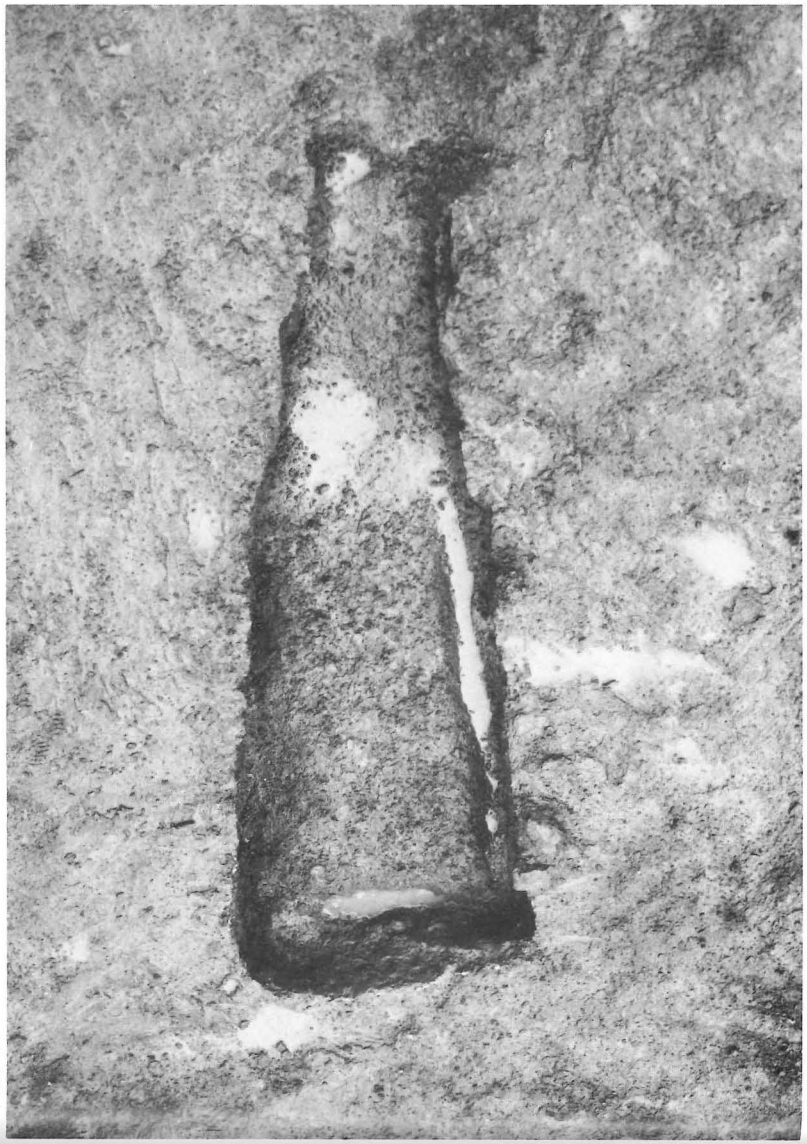
(mm)

番号	径	厚さ	孔径	色彩	備　考	番号	径	厚さ	孔径	色彩	備　考
1	5.4	3.6	1.7	紺	ガラス小玉	2	4.5	4.6	1.4	紺	ガラス小玉
3	5.0	2.8	1.7	〃	〃	4	6.0	17.0	3.0	濃緑	管　玉

PL.23　第９号石棺



第９号石棺←



同土壙→

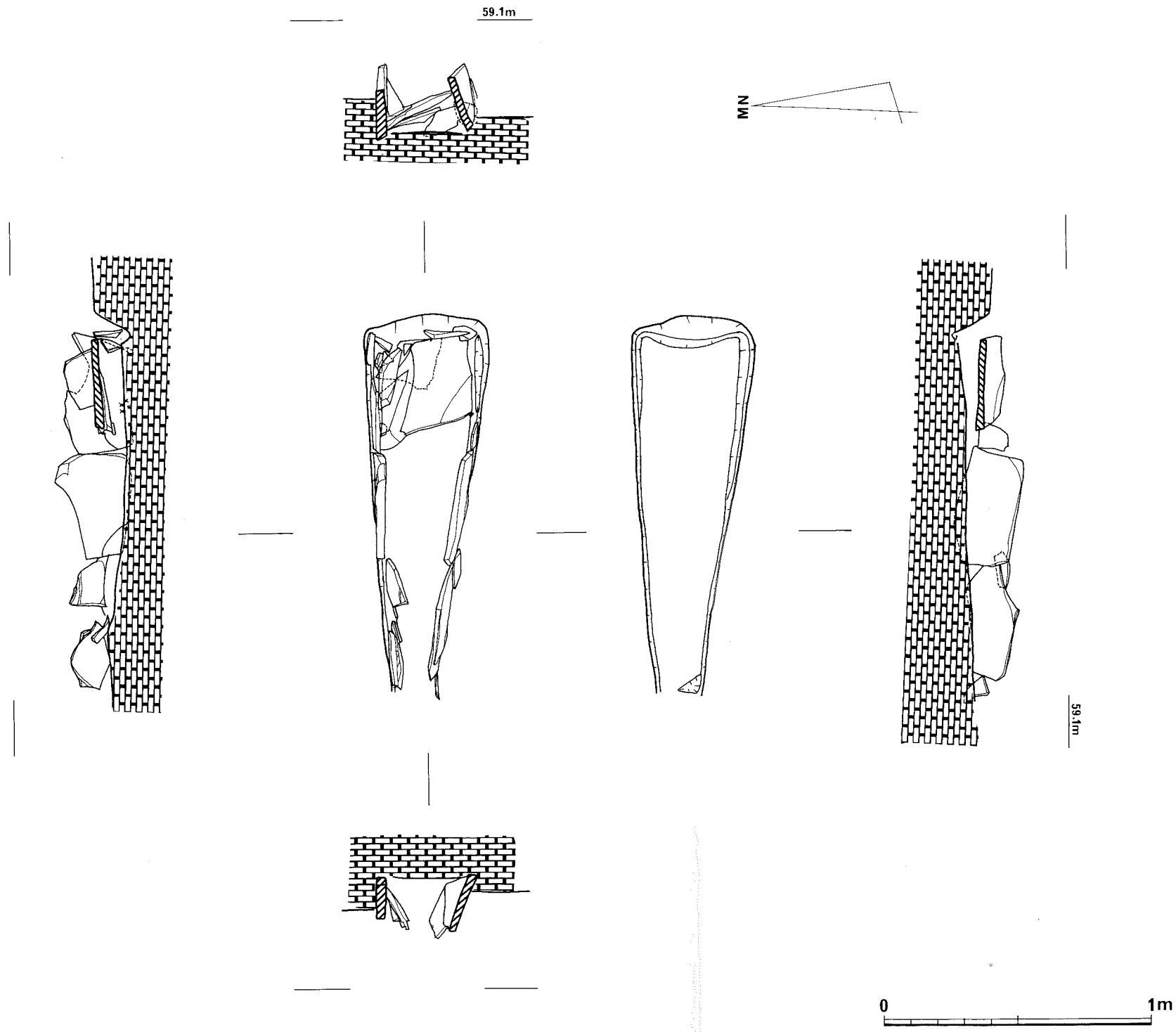


Fig.20　第９号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

第10号石棺（Fig.21，PL.25）

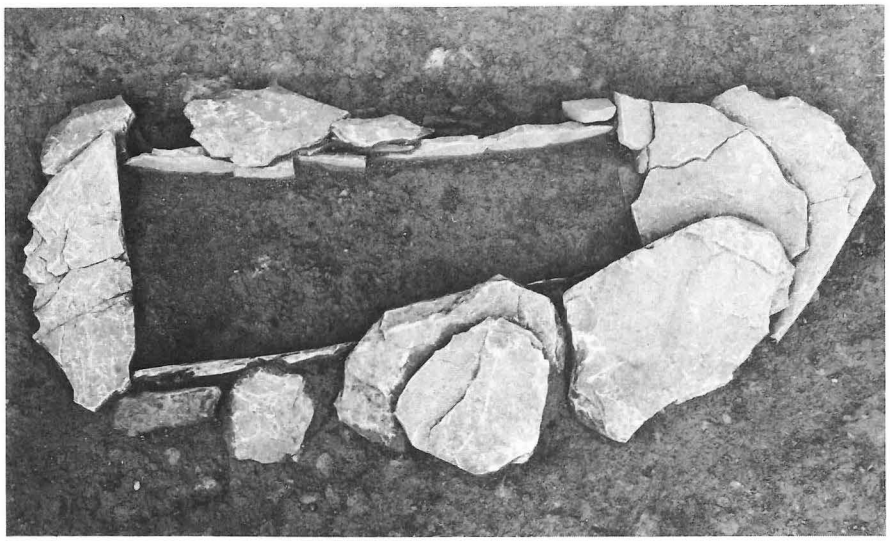
石棺群中最北端に位置しており，主軸をN104°38′38″Eにとる。蓋石はほとんど除去されており，東木口にその一部の残存を見る。西側に見られるように，蓋石下すぐ棺身ではなく，小さめの板状石を周囲に配し，高低差を調整した後比較的大きい板状石を蓋石として載せるという極めて丁寧な工法をとっている。かなりの枚数が予想される。

棺身も大きく立派で第1号石棺に類似する。木口部は東西ともに1枚で，側壁は北に4枚，南に3枚利用し，棺材の隙間は小板状石で充填する。全体的に見て石棺の下底面より上縁部が広く，外反する石材さえ見られる。法量は長辺165 cm，東木口30cm，西木口40cmで，その形態からして頭の位置は西と考えて良いだろう。棺床面は水平で水糸交点部で35cmを計る。

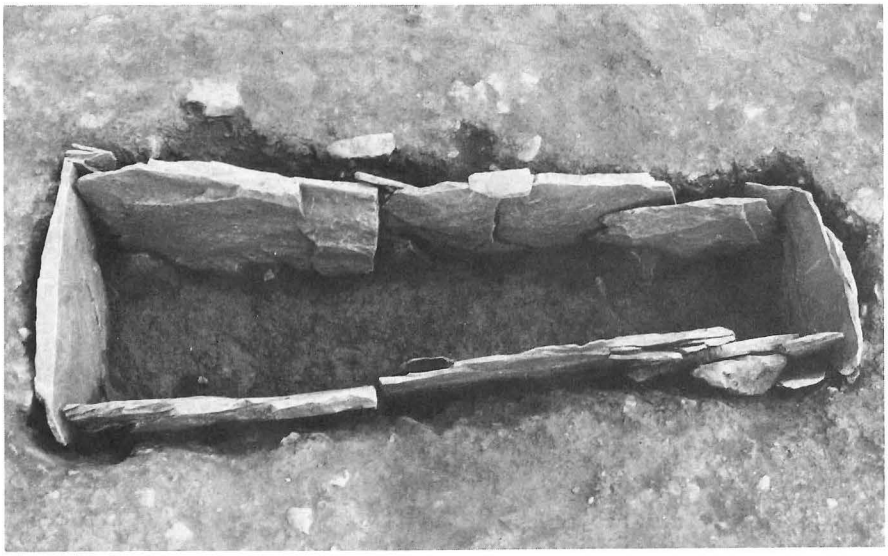
土壙は棺身にあわせて西に広いほぼ長方形で，断面は梯形を呈する。下底面もほぼ水平に掘られている。長辺168 cm，東木口30cm，西木口50cmである。

棺内から土器の小破片が出土したが，時期判定する資料とはなり得ていない。点数にして5点であり，2点は上部から，他の3点は棺床面と同一レベルであり，その内の1点は底部である。これらは別個体であり小破片であることからして副葬品とは考え難く，流れ込みによるものと解釈される。これだけの規模で作出されているにもかかわらず副葬品の出土は全くない。

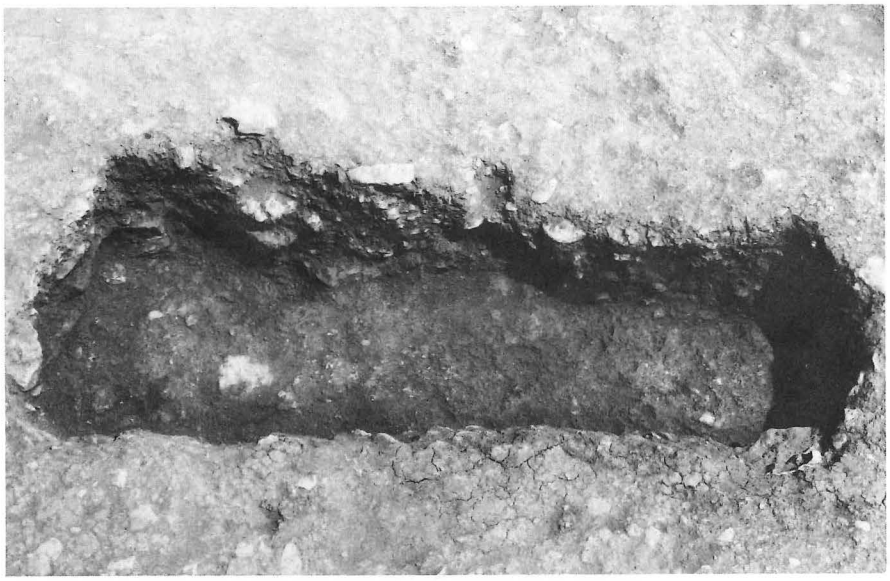
PL.24　調査風景



第10号石棺



同蓋石除去状況



同土壙

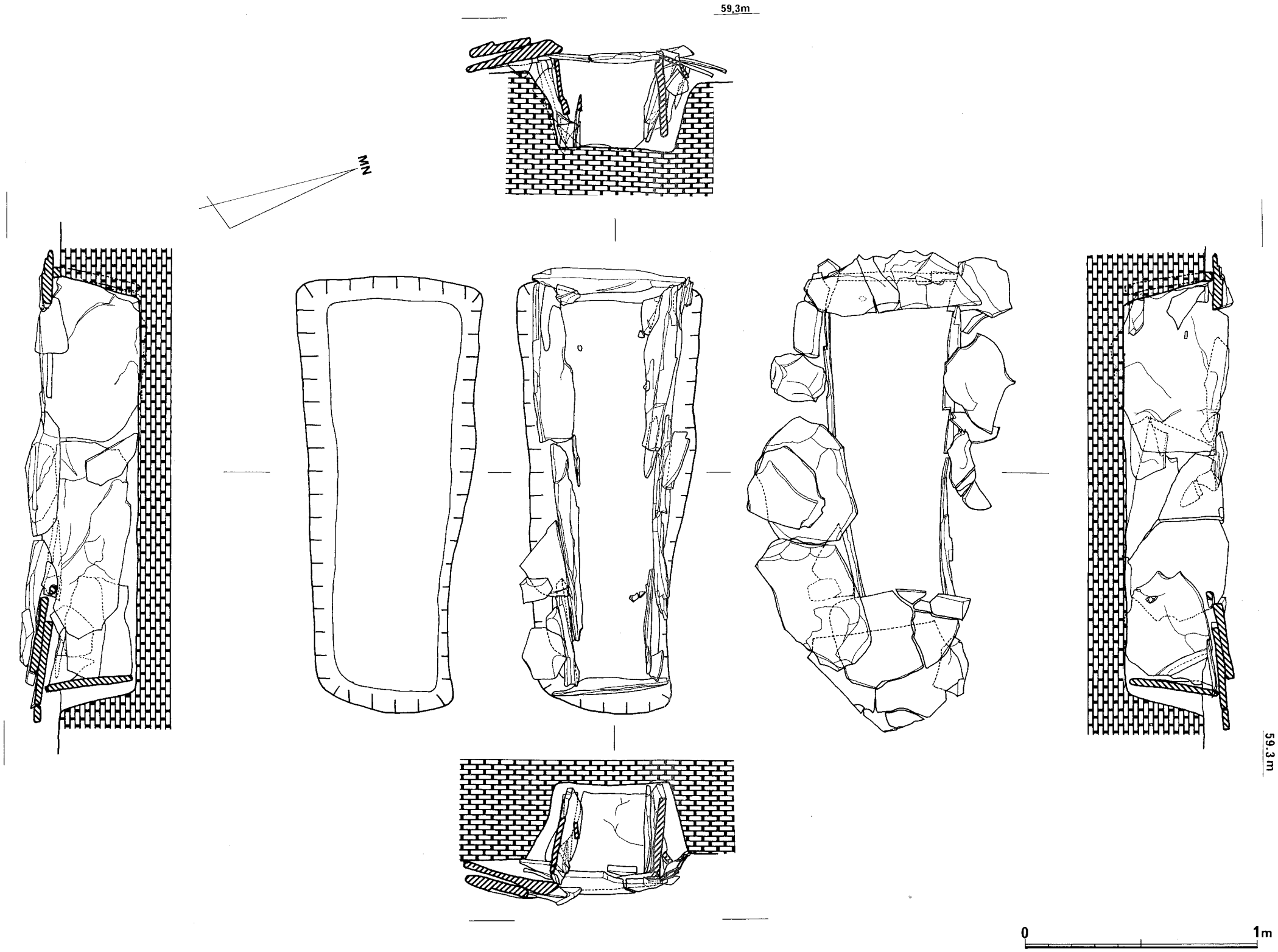
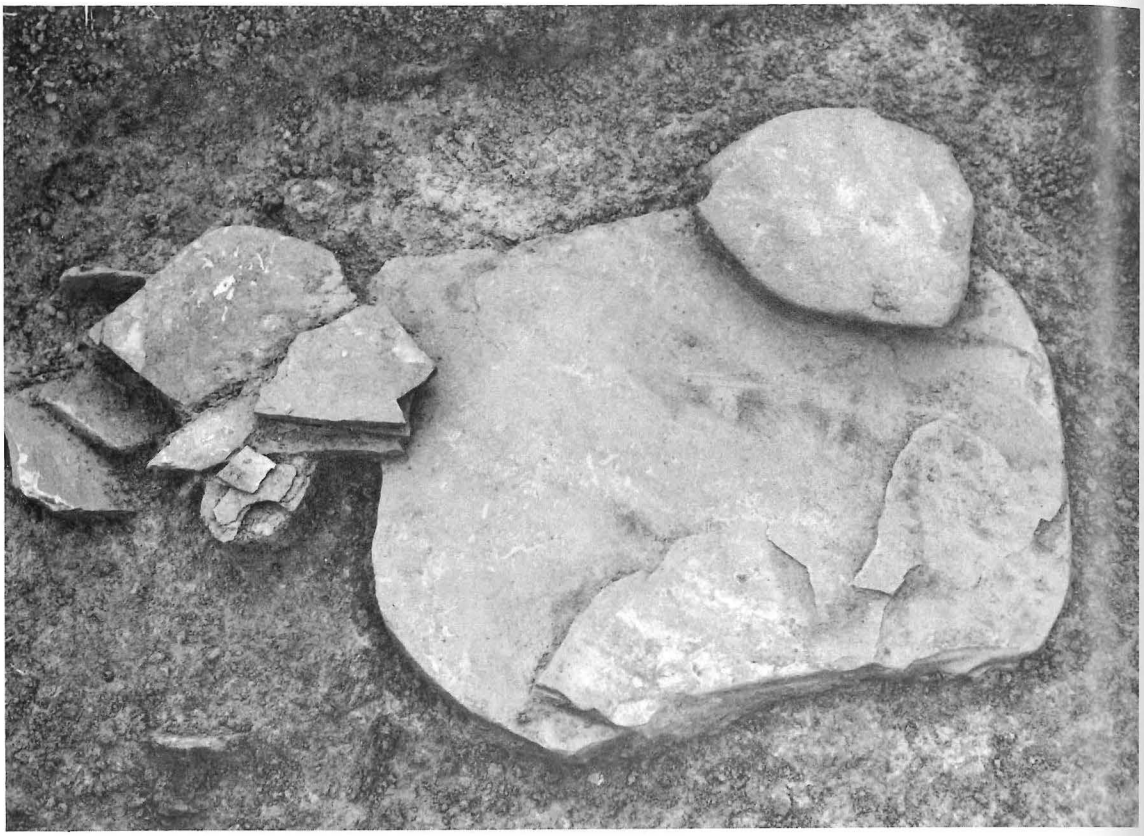
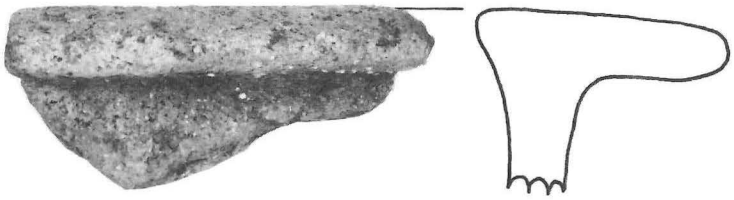


Fig.21　第10号石棺実測図（$\frac{1}{20}$）

PL.26 第11号石棺(左)，第13号石棺(右)

PL.27　第14号石棺(上)，第12号石棺周辺出土土器(下)





二、まとめ

1．中野ノ辻の石棺について

中野ノ辻では計14基の箱式石棺が出土したが，その内第11号～第14号の４基については地主の岡田氏の好意により現状のまま保存できることとなった。なお，緊急調査した10基については，後日の復元展示に備えて全て石材に番号を附して取り上げている。

石棺は舌状に張り出した丘陵尾根上に在り，標高59～61mの間に位置する。丘陵の傾斜は石棺が築かれた地区ではゆるく，特に棺が集中する中央部は平担に近い。従ってこの地形が棺の方位など石棺の構築に際しての規制要因になることはあまりなかったものと思われる。

以下，中野ノ辻の石棺についてまとめをしておきたい。

(1)．中野ノ辻石棺の特徴

石棺の法量計測については，Tab.10に記したとおりである。この表をもとに若干の検討を行ってみたい。

まず，石棺の長さと巾の関係については，Fig.22でみる如く，３つのグループに分類可能である。すなわち，長さ120～130cm，巾30～40cmまでのグループである**2**，**4**，**5**，**9**，長さ160～165cm，巾35～40cmまでの**6**，**7**，**8**のグループ，そして長さ175～180cm，巾35～45cmと一番長大な**1**，**3**のグループである。以上をそれぞれA，B，Cグループと仮称しておく。

Tab.10　石棺計測表

番号	土壙径			石棺径			方位	副葬品	北(東)側壁数	南(西)側壁数	蓋石数	枕方位
	長径	短径	深さ	長径	短径	深さ						
1	193	東55 西70	東32 西22	173	東35 西43	37	N-55°08′-E		4	4		西(南)
2	121	55	東43 西33	117	40	東45 西35	N-77°59′-E		3	3	13	東
3	185	東50 西40	東20 西25	180	東43 西25	東32 西27	N-23°40′38″-E		6	5	19	東(北)
4	137	東55 西45	32	123	31	33	N-71°25′50″-E	蓋石直下に土器片	4	4	7	東
5	135	40	東30 西35	125	東35 西27	45	N-93°42′30″-E	ガラス玉344 ヒスイ玉１	3	4	11	東
6	165	東35 西50	20	160	40	35	N-86°23′45″-E	ガラス玉108	6	6	1＋α	東
7	166	東50 西35	20	160	東30 西25	30	N-34°05′35″-E	刀子１	5	4	9	西
8	182	東40 西35	30	165	東32 西20	30	N-118°40′25″-E	棺床上に土器片	4	4	15	東
9	133	東40 西15	10	130	東30 西10	22	N-86°19′-E	管玉１ ガラス玉３	5	3		東
10	168	東30 西50	33	165	東30 西40	35	N-104°38′38″-E	棺内に土器片	4	4	13＋α	西

次に方位についてみると，Fig.23に示した如く，長軸が北東～南西を向く1，3，7のグループ，長軸がほぼ東西を向く2，4，5，6，9のグループ，そして長軸が南東～北西を向く8，10，の3つのグループが認められる。以上をやはりそれぞれA，B，Cグループと仮称する。

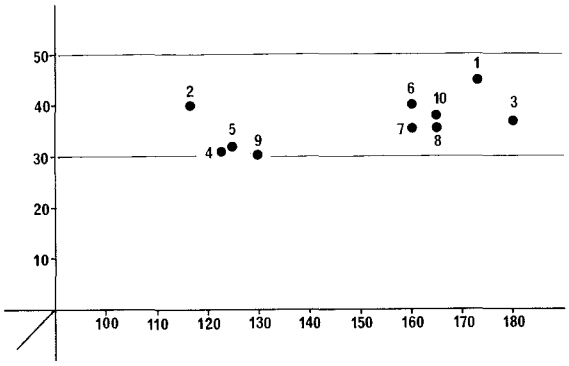


Fig.22　石棺法量図

又，頭部の向きでは，2，3，4，5，6，9が東，もしくは北東であるのに対し，1，7，10が西，もしくは南西を向いている。つまり，東枕と西枕の2グループに分けられる。

この他，構築に際しての，例えば材の組み合わせについては，あまり規格制がなく，各棺の特徴が現われない。ただ，全体的に材の組み立てについては掘り方が相対的に浅く，棺床面レベル附近が壁材の下端である事も多く，構造的に強固な作りとは言えない点は一致している。

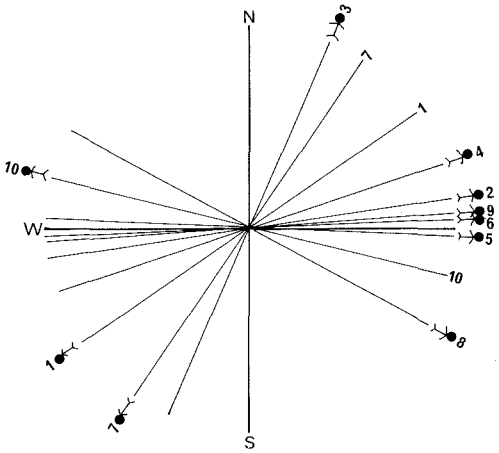


Fig.23　石棺方位図

以上，述べてきた諸特徴をまとめると，Tab.11のようになる。すなわち，2，4，5，9号は，法量，方位，頭部の位置などで全く一致し，6がこれに近い傾向にある。又，1，と3，及び7，8，10がそれぞれ似かよった状況にあることが判り，結果的にそれぞれ1類～

Tab.11　石棺特徴比較表

番号	法量			方位			枕方位		北(東)側壁数	南(西)側壁数	蓋枚数	副葬品
	A	B	C	A	B	C	東	西				
2	○				○		○		3	3	13	
4	○				○		○		4	4	7	
5	○				○		○		3	4	11	ガラス玉
9	○				○		○		5	3		ガラス玉、管玉
6		○			○		○		6	6	1＋α	ガラス玉
1			○	○				○	4	4		
3			○	○			○		6	5	16	
7		○		○				○	5	4	9	刀子
8		○				○	○		4	4	15	
10		○				○		○	4	4	13＋α	

3類に分類が可能であるといえよう。

(2). 石棺の時期について

本石棺群の場合，第12号周辺より出土した土器片（PL.27）を除いて，明瞭な時期を比定し得る資料に乏しい。僅かに第4号石棺蓋石直下で1点，第8号棺床上で1点，そして第10号石棺内で5点の土器片の出土をみるが，何れも無文の胴部細片であり，胎土・焼成・色調等よりみても，弥生式土器か土師器なのかの断がつけ難く，土器片からの時期比定は難しい。この他，時期比定の参考となる各石棺間の切り合いについては，第3号石棺の項で述べた如く，4号土壙を切って3号が築造されたのは確実であり，この点では3号石棺が後出する事は疑えない。

このように，時期的に明瞭な特徴を持つ遺物が無い場合の石棺にあっては，棺の長径が長い程時期が後出する傾向が指摘されている[註1]。そして，本石棺についても，ある程度それは言えるものと思われる。すなわち，先に述べた1類→2類→3類は時期差としてとらえられるのではないかと思われるのである。その場合，未調査ながらNo.11～No.14の石棺が長径・方位共に1類のグループと近似値を示すことは，同じグループに属する可能性が指摘でき，同時に時期的には12号周辺出土土器の特徴から弥生中期以降が考えられよう。又，1類に属する第4号より2類に属する第3号が後出し，更に2類より径が長大となる3類のグループが後出するものとすれば，この石棺群は大略弥生中期～古墳期にまたがる石棺群であるといっても大過のないものと思われる。

しかし，後出する如く，5号，6号，9号より出土するガラス小玉は，本県においては，北九州と強い紐帯で結ばれる対馬・壱岐における出土例を除くと弥生中期までさか上る例はなく，近接する松浦市栢ノ木[註2]2号石棺の如く，後期後半以降であるのが一般的である。この点では，5号，6号，7号共に弥生期に属する可能性は高いが，中期までさか上る事はないものと思われる。

なお，石棺の側壁数[註3]や蓋石数[註4]の相違によって時期的な特徴を指摘する論がある。本石棺群においては，側壁において1類のグループが比較的枚数が少い傾向もあるが，蓋石数については，明瞭な差異を指摘することはできない。

以上，述べてきた如く，1類から3類への経緯が時期的な差異によるものであるならば，本石棺群は当初丘陵頂上部附近から漸次下方へ向って築かれたものであるといえよう。

註1．井上和夫　1974　「化屋大島遺跡」　多良見町文化財調査報告書第2集
　　多良見町教育委員会

註2．正林護　1973　「栢ノ木遺跡」　松浦市教育委員会

註3．高倉洋彰　1980　「対馬豊玉町ハロウ遺跡」　豊玉町教育委員会

註4．註1に同じ

2．中野ノ辻出土のガラス玉について

中野ノ辻の石棺群では，第5号より346個，第6号より108個，そして第9号より管玉1個と共に3個のガラス小玉が出土した。大きさを他の出土遺跡のものと比較する為にも次の4種に分けておく。

A		～ 2.9mm	極小
B	3	～ 3.9mm	小
C	4	～ 4.9mm	中
D	5mm～		大

第5号，第6号出土のガラス小玉の計測値はTab.2・3・4・5・6，Tab.7・8，に示したとおりであり，出土総数に対する各A，B，C，Dの比率はFig.24のようになる。

色調は第5号石棺出土のものでは青色12%，紺色43%，濃紺45%であり，この他緑色のものが3個のみ含まれるが，圧倒的に青系統が多い。第6号でも同様で，青色23%，紺色48%，濃紺27%でこれには緑色は含まれない。なお，色調別による径の大小は本遺跡では殆ど関係なく，各種まんべんなく見受けられる。

小玉の形状は，両端が平行なものと，そうでないものなどまちまちであるが，両端をカットし，その折断面を研磨する特徴は共通している。又，観察し得る限りでは，中の気泡は楕円状を呈し，孔に対して平行であり，製作については管状に延ばしたガラス管を折断したものと思われる。

本県でのガラス玉の出土状況はFig.25，Fig.26，及びTab.12，Tab.13，に示したように，弥時代で20遺跡37例[註1]，古墳時代で27遺跡34例が知られている。しかし，地域的にはまだ，相当例が増すものと思われる為，あくまで資料は現在値であることを断っておく。

弥生時代の場合，地域的には対馬が過半数を越える13遺跡23例で最も多く，その全てが箱式石棺内に副葬されている。次に壱岐では，原ノ辻，及びカラカミ周辺の2大遺跡7例が確実なものとして知られるが，原ノ辻の場合は甕棺内出土，カラカミの場合は包蔵地よりの出土である。以上の地域を除くと出土地は稀薄となり，松浦市栢ノ木2号石棺，福江市一本木，及び島原半島北有馬町今福遺跡の4遺跡7例のみであり，ガラス玉出土の中心地が対馬，壱岐両島にある事が判る。

時期的には原ノ辻大原[註2]で確実に中期初頭に属する甕棺内より出土したガラス玉1個が初源である。同時にこれは，現在知られている確実な例として我国でも初例であろう[註3]。この他，対馬峰町下ガヤノキE，同美津島町五次郎で中期に属する例があるが，他は全て中心である北部九州から各地へ拡散する後期以降の所産である。なお，出土数は，中期に属するものは何れも1～3個程度であり，この点後期以降に属する塔の首2号の8,000余個，峰町下ガヤノキEの770余個，黒木南鼻の1,000余個などと比較して著しい相違をみせる。

色調的には青・紺系統が一般的であるが，特に原ノ辻２号や栢ノ木２号などでは，紫色で径が僅か１mm前後しかない微細な例が知られる。

古墳時代に入ると，各地で出土遺跡数は飛躍的に増大するが，本県では弥生時代に比して，遺跡数で７遺跡しか増加していない。しかし，これは本県に於ける古墳の調査例が極めて少ない事にも帰因し，地域的に，特に壱岐島などには未発見のものが相当数あるものと思われる。

一方，ガラス玉の出土遺跡数は増えるが，総じて１件あたりの埋納数は弥生時代に比して減じる傾向にある。特に8,000余個を副葬した塔の首２号石棺や3,400余個を副葬した佐賀県二塚山[註4]22号土壙墓の如く，特定墓に数千の単位で埋納する例はなくなる。これは副葬品の種類が

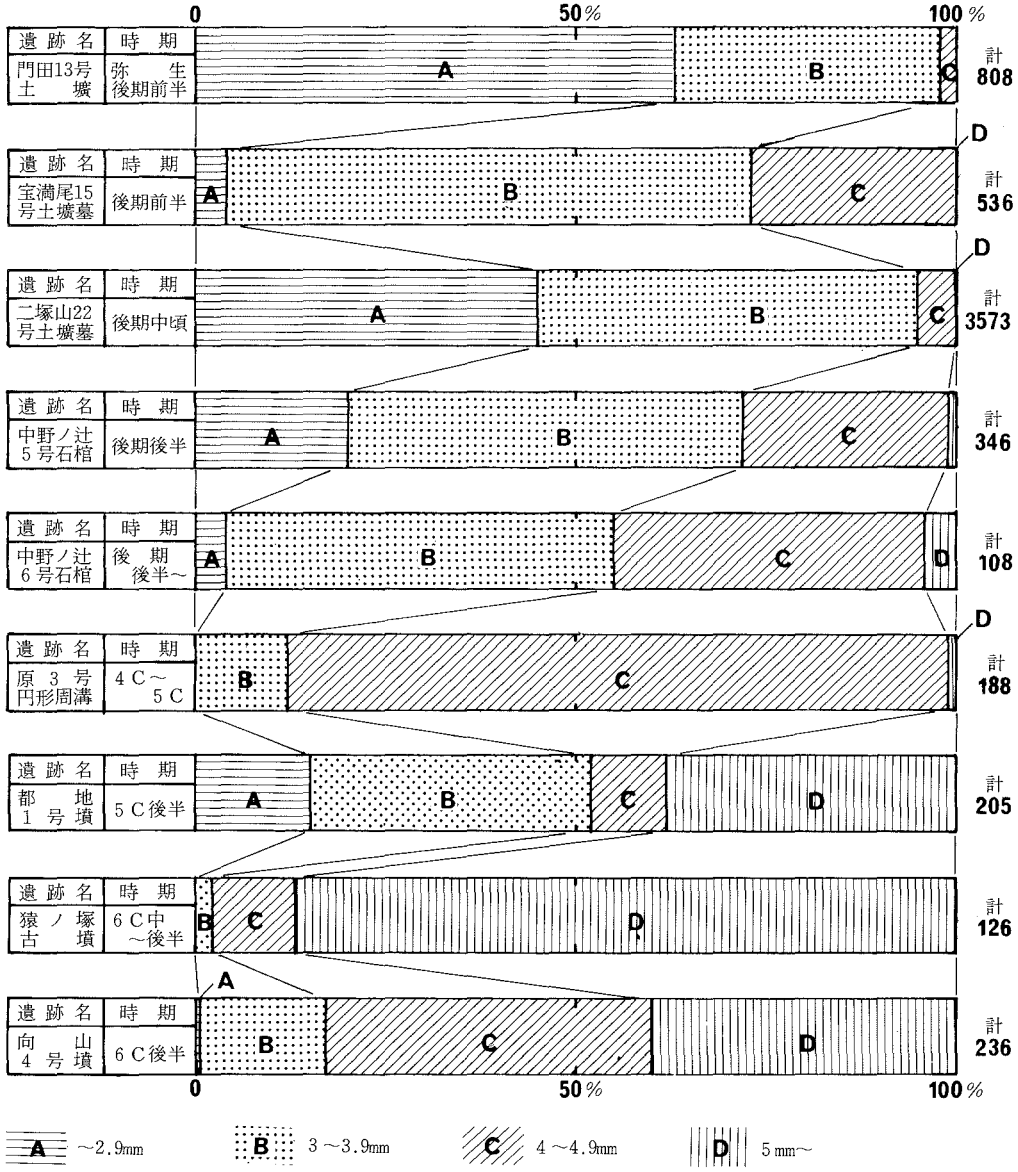


Fig.24　ガラス小玉径別出土比率図

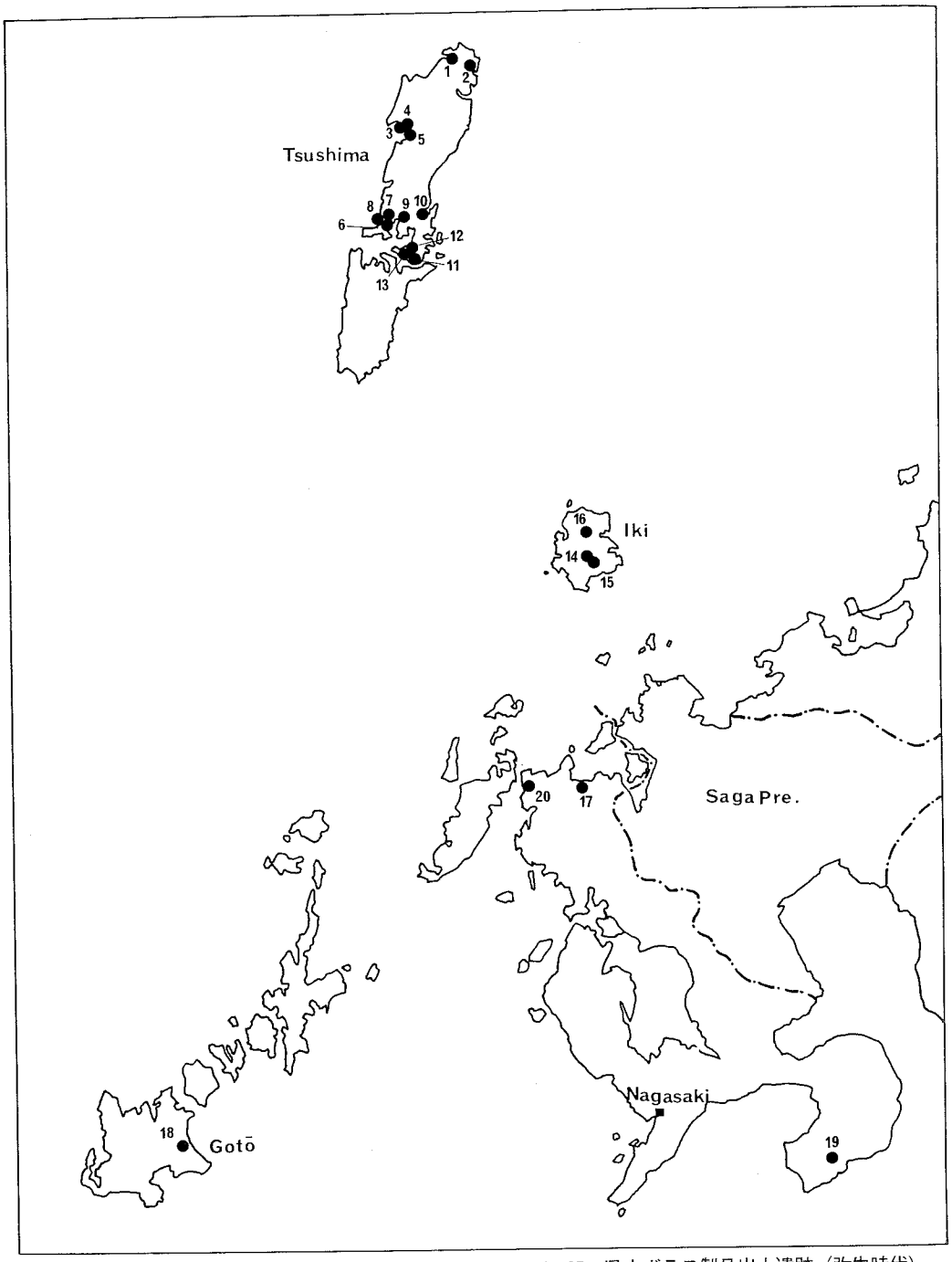


Fig.25　県内ガラス製品出土遺跡（弥生時代）

Tab.12　県内ガラス製品出土地名表（弥生時代）

番号	遺跡名	所在地	出土状況	勾玉	管玉	丸玉	小玉	共件遺物	時期	文献
1	経隈	上県郡上対馬町河内					73		後期前葉	1
	〃　1号		箱式石棺				180	壺形土器，他	〃	
	〃　3号		〃				86	鉄剣，弥生式土器他	〃	
2	塔の首2号	〃　〃　古里	箱式石棺				1400	管玉，銅訓他	後期前半	2
	〃　3号		〃				8236	広鋒銅矛，銅訓他	〃	
	〃　4号		〃				7	鏡，鉄斧，土器片	〃	
3	木坂1号	〃　峰町三根	箱式石棺				190	広鋒銅矛，土器片他	後期後葉	1
	〃　4号		〃				12	管玉，鉄鎌他	〃　終末	
	〃　5号		〃				20		〃　〃	
4	タカマツノダン	〃　峰町三根	箱式石棺				290	細形銅剣，鏡，馬鐸，鍔金具他	後期前半	3
5	下ガヤノキE	〃　峰町三根	石蓋土拡				771	鉄剣，青銅製品他	後期前半	2
	〃　F		箱式石棺				数不明	鏡，鉄剣，鉄刀他	中期後半	
6	赤崎2号	下県郡豊玉町佐保浦	箱式石棺			1	321	鏡，鍔金具，管玉	後期前半	2
7	黒木南鼻	〃　〃　大字麦	箱式石棺				1047	馬鐸，鍔鉄他	後期初頭	2
8	唐崎	〃　〃佐保唐崎	箱式石棺				40	有孔笠頭形銅器 有孔十字形金具，角形銅器 十字形把頭金具他	後期初頭	2
9	ハロウA地点2号	〃　〃　仁位	箱式石棺				18	土器他	後期終末	4
	〃　5号		〃				18 (壺内1)	鏡，広形銅矛他	後期後半 ～終末	
	ハロウB地点2号	〃　〃　〃	箱式石棺				208	鏡，広形銅矛，管玉	終末	
	〃　3号		〃				554	鉄剣，弥生土器他	後半～終末	
10	観音鼻2号	〃　〃　千尋藻	箱式石棺				3	鏡，銅訓他	後期前半	2
11	玉調五次郎2号	〃　美津島町玉調浦	箱式石棺				数不明	土器片他	中期以降	2
12	玉調ハナデンボ2号	〃　〃　〃	箱式石棺				1		後期初頭	2
13	高浜ヒナタ1号	〃　〃　鶏知	箱式石棺				60	鉄剣，鏡	後期	5
	〃　2号		〃				数不明		〃	
14	原ノ辻大原2号	壱岐郡石田町大原	甕棺				1	勾玉，鏡	中期初頭	6
	〃　3号		壺棺				3	管玉		〃
	〃　32号		甕棺				1		中期前半	〃
15	原ノ辻3号	〃　〃　〃	甕棺	1	1		5	勾玉，管玉	後期前半	7
	〃　1号	〃　〃　〃	甕棺				140	水晶玉	終末	8
	〃　2号		〃				200	管玉	〃	8
16	カラカミ	壱岐郡勝本町立石仲触	包含層		数不明		数不明	鏡，石斧，鉄刀子他		13
17	栢ノ木2号	松浦市志佐町栢ノ木	箱式石棺				350	鏡	後期後半	9
18	一本木	福江市下大津一本木	壺棺				240	管玉	後期	10
19	今福	南高来郡北有馬町	甕棺				1		後期～	11
	〃	〃　〃	包・地				207		〃	〃
20	中野ノ辻5号	北松浦郡田平町萩田免	箱式石棺				346		後期～	本書
	〃　6号		〃				108			
	〃　9号		〃				3	管玉		

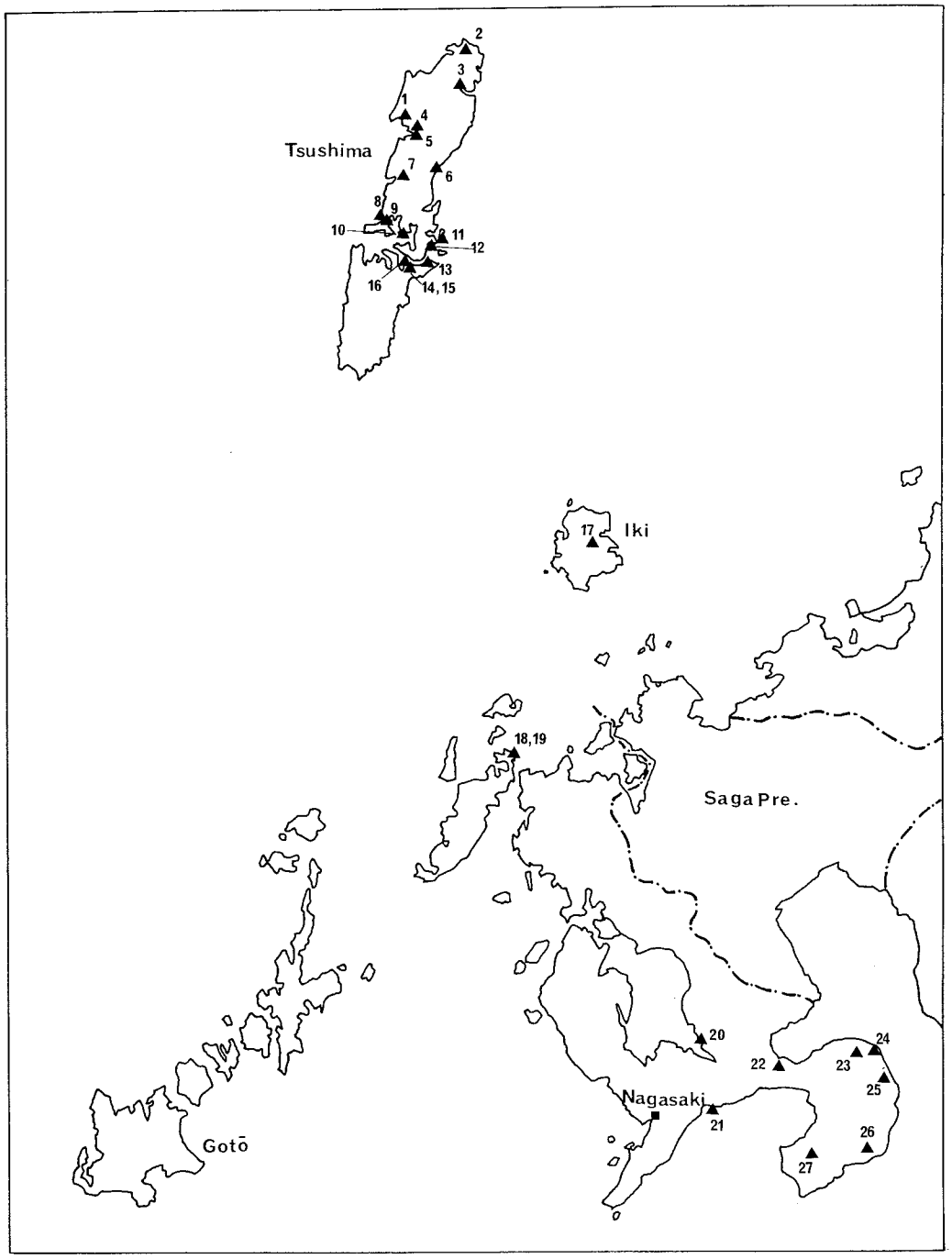


Fig.26　県内ガラス製品出土遺跡（古墳時代）

Tab.13　県内ガラス製品出土地名表（古墳時代）

番号	遺跡名	所在地	出土状況	勾玉	管玉	丸玉	小玉	共件遺物	時期	文献
1	大将軍山	上県郡上県町志多留	箱式石室				多数	鏡，鉄鏃，管玉	4　C	12
2	豊カミカラ崎	〃　上対馬町豊	箱式石棺				数不明	勾玉		〃
3	朝日山	〃　〃　浜久須	拝殿隅				数不明	鏡		〃
4	下ガヤノキG地点	〃　峰町三根	箱式石棺				1	紡錘車		2
5	チゴノハナ1号 〃　2号	〃　〃　吉田 〃　〃　〃	箱式石棺 〃				2 25	鉄剣，銀環 鉄刀子	 6C中頃	12 2
6	椎ノ浦	〃　〃　志多賀 〃　〃　〃	箱式石棺				225	蕨手刀子，鉄矛 鉄刀，鉄鏃他		2
7	恵比寿山1号 〃　5号 〃　9号 〃　12号	〃　〃吉田字橋辺 〃　〃　〃 〃　〃　〃 〃　〃　〃	箱式石棺 〃 〃 〃				85 12 4 4	陶質土器他 勾玉，管玉，鏡 土師器片	5C中頃 〃 5C末 弥生中(?) 5C中(?)	14
8	蒙古塚	下県郡豊玉町桑原	箱式石棺				2	管玉，勾玉		13
9	貝口寺浦崎1号 2号	〃　〃貝口寺浦崎 〃　〃　〃	箱式石棺 〃				105 50	 石製紡錘車		2
10	貝鮒崎	〃　〃　貝鮒	箱式石棺				14	鉄剣，鉄矛，鉄刀子 勾玉，管玉，棗玉	6C初	2
11	海落2号	〃　美津島町芦ケ浦	箱式石棺				17	管玉，臼玉，鉄剣	5　C	2
12	仁兵衛島3号	〃　〃　仁兵衛島	箱式石棺				1	鉄刀，土師器		2
13	緒方浦1号	〃　〃　緒方	箱式石棺			11	30			13
14	白蓮江第1，6号	〃　〃　大船越	箱式石棺				3	管玉，		2
15	白蓮江第2，1号 〃　3号	〃　〃　〃 〃　〃　〃	箱式石棺 〃				3 2	土師器片 管玉，土師器片	4　C 4　C	2
16	竹敷高坊	〃　〃　竹敷高坊	箱式石棺				数不明			13
17	妙泉寺1号墳	壱岐郡芦辺町緒吉	横穴式石室				4	馬具片，須恵器片他		13
18	田助	平戸市大久保町	箱式石棺				39	鏡，勾玉，管玉		15
19	田助3号 〃　5号	〃　〃 〃　〃	箱式石棺	1			418	勾玉		16
20	玖島崎古墳	大村市玖島崎	横穴式石室				数不明	鉄刀，勾玉，管玉		13
21	曲崎3号墳	長崎市牧島町	横口室石室				17	管玉		17
22	小野古墳	諫早市宗方町館	横穴式石室				少数	鉄剣，鉄刀子，他	6　C	18
23	杉山古墳	南高来郡吾妻町守山三室	横穴式石室				13	素環頭，鉄鏃， 鉄刀子，金環，銀環	6C～ 7C	19
24	柿の本古墳	南高来郡瑞穂町古部	横穴式石室				5	鉄鏃，金環，銀環 鉄刀，須恵器他	7　C	20
25	高下古墳	南高来郡国見町多比良	横穴式石室	1	1	141	19	馬具，刀子，直刀 鉄鏃，金環他	6C中	21
26	原尾古墳	南高来郡有家町原尾名	箱式石棺				数不明	鉄鏃，他		13
27	諏訪の池	南高来郡小浜町大亀	円墳				数不明	須恵器，他		13

文　献

1．坂田邦洋　1976　「対馬の考古学」
2．長崎県教育委員会　1974　「対馬一浅茅湾とその周辺の考古学調査」　長崎県文化財調査報告書第17集
3．対馬遺跡調査会　1964　「長崎県対馬調査報告」　考古学雑誌49―1
4．高倉洋彰　1980　「対馬豊玉町ハロウ遺跡」　豊玉町教育委員会
5．藤田　等　1977　「弥生時代のガラス」　考古論集所収
6．1974年県教委調査，報告書未刊
7．長崎県教育委員会　1977　「原ノ辻遺跡(Ⅱ)」　長崎県文化財調査報告書第31集
8．長崎県教育委員会　1978　「原ノ辻遺跡(Ⅲ)」　長崎県文化財調査報告書第37集
9．正林　護　1973　「栢ノ木遺跡」　松浦市教育委員会
10．1979年1月，福江市下大津町一本木で農道拡幅工事中に壺棺に副葬された状態でガラス玉240と管玉1個が出土。壺は弥生後期以降のものであるが未詳。
11．宮崎貴夫氏教示。
12．小田富士雄　1976　「対馬・壱岐の古墳文化」　九州考古学研究古墳時代編　学生社
13．長崎県教育委員会　1966　「長崎県遺跡地名表」　長崎県文化財調査報告書第1集
14．坂田邦洋・永留史彦　1974　「恵比須山遺跡発掘調査報告」　長崎県峰村教育委員会
15．樋口隆康・釣田正哉　1952　「平戸の先史文化」　京都大学学術調査団
16．平戸市教育委員会　1979　「平戸市文化財調査報告書」　平戸市の文化財11
17．長崎市教育委員会　1977　「曲崎古墳群調査報告書」
18．長崎県教育委員会　1978　「Ⅱ小野古墳の調査」　長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第35集　遺物は粉失しているが，鉄製刀子とガラス玉数点が出土。
19．吾妻町教育委員会　1978　「杉山古墳調査報告書」　吾妻町の文化財3
20．長崎県教育委員会　1978　「Ⅰ柿ノ本古墳の調査」　長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第35集
21．国見町教育委員会　1959　「高下古墳調査報告」

豊富になっていく事で，ガラス玉などに特定する必要がなくなった事を示しているものであろうか。

ガラス玉の色調は，大旨，弥生時代のものを踏襲しており，やはり紺系統が主体を占めるが，佐賀県城ノ上遺跡[註5]や猿の塚古墳[註6]などでは黄色や黄緑色系統のものがこれに加わる。

中野ノ辻出土のガラス玉の成分については化学分析を行っていないので何ともいえないが，一般的に弥生中期のガラス製品は鉛ガラスが多く，後期になってアルカリ石灰ガラスが登場し，

以後，併存するといわれている[註7]。一方，小玉の場合は現在までの分析例では何れもアルカリ石灰ガラスとされているが，分析は後期以降のものに限られており，国産の可能性が薄い中期のガラス小玉については，他の製品と同様鉛ガラスではないかと思われる。この点については原ノ辻出土の中期ガラスについて後日分析を行ってみたい。

最後に，時期別にみるガラス小玉の特徴について述べておきたい。但し，前述した如く，玉自体による差異や色調による区別は非常に困難であるため，ここでは主に玉の径による比率について一般的な傾向を出してみたい。Fig. 24に示したように弥生後期前半から古墳後期に至る過程で小玉の総数に占める径の大小の比率が異なっている。すなわち，弥生後期前半の段階では，副葬される小玉でもAグループの極小のものとBグループの小のものが圧倒的に多く，大・中のC・Dグループの占める割合は極めて低い。しかし，以後，時期が新しくなるにつれてその差異は変化し，古墳時代後期では，ほぼその比率は逆転する。なお，6C後半に比定される門田2号墳[註8]の如く，470個の小玉の内，92%がA，Bグループである例もあるが，例外的であり上述の傾向が一般的であろうと思われる。

以上のような特徴からみても，中野ノ辻遺跡のガラス玉を副葬する石棺は，弥生時代に属する可能性が高く，前石棺の項で述べた結果と一致する。只，中野ノ辻6号石棺については，石棺の法量やガラス玉の比率の特徴から，弥生から古墳期に到る過渡期な位置にあるのかも知れない。

註1．この他にも島原半島景華園遺跡で弥生時代のガラス玉が出土しているらしいが，報文例がないので一応割愛しておく。

註2．1974年，県教委調査，報告書未刊。

註3．山口県土井ケ浜での出土例があり，前期の可能性があるらしいが不明瞭とされる。

註4．佐賀県教育委員会　1979　「二塚山」

註5．基山町教育委員会　1977　「城ノ上遺跡」　基山町文化財調査報告書第1集。

註6．福岡市教育委員会　1971　「和白遺跡群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集。

註7．藤田等　1977　「弥生時代のガラス」　考古論集所収。

註8．福岡県教育委員会　1978　「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集」

3、その他の出土遺物

石棺からの出土遺物は，述べてきた如く第5号・第6号のガラス小玉，第7号の刀子，そして第9号の管玉とガラス小玉を除いては若干の土器片が出土しているのみである。それらについては，すでに各石棺の項で触れているので，ここでは新出遺構である12号石棺周辺より出土した土器片に限定して説明しておきたい。（PL.27）

土器片は甕の口縁で，色調は黄褐色を呈する。胎土に石英粒，砂粒を含み，焼成は良好である。弥生中期中葉に比定し得る。

なお，この土器片は12号石棺北側蓋石直下附近より出土したものであるが，ともに出土した他の若干の土器片は，何れも無文の胴部細片で明瞭な特徴を有していない為割愛しておく。

里田原遺跡

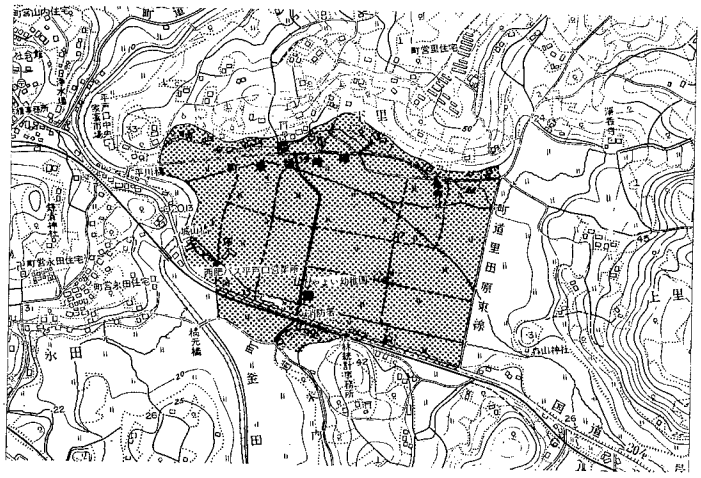


Fig.27　調査地点位置図

Ⅲ　里田原遺跡

1．調査経過

調査を開始したのは歴史民俗資料館建設工事工程を逆算して，まだ梅雨が明けきらぬ昭和56年7月6日のことであった。当然のことながら調査開始当初は雨に降られ，水田は満水し，一夜明けるとグリッドはプールと化しポンプアップするという悪循還の連日であった。

現在，やよい幼稚園が建設されている部分は，第9次調査を実施した地点で南側の新川に最も近い部分で性格不明の竪穴が2基確認されており，今次調査区域においても遺構の検出は容易に判断がつくところである。

調査は対象地域を2m×2mのメッシュにきり，北から数字を東から英字を附し，南側から着手し，標高は県指定史跡地内に設置してある基点Ⅱ（21m 333）を利用した。M—60区より開始した調査は次第に北へ規則的に20mおきに進めていったが，遺物の出土，遺構の検出は認められなかったため，H区より北の部分はユンボを使ってトレンチを掘った。

H—60からM—60にかけて認められた遺物や遺構は，従来からの推察どおり第1次調査区（県史跡指定地から北西に流れていることが判明した。そのため，歴史民俗資料館の当初の建設計画し建物が建設予定地の南側，新川に近い部分に建つ予定であった。）に遺構がかかる懸念が生じたので，より北側へと設計変更し遺構部分は客土して保存することとなった。

PL.28　調査地点遠景（中央部），手前の2基は支石墓

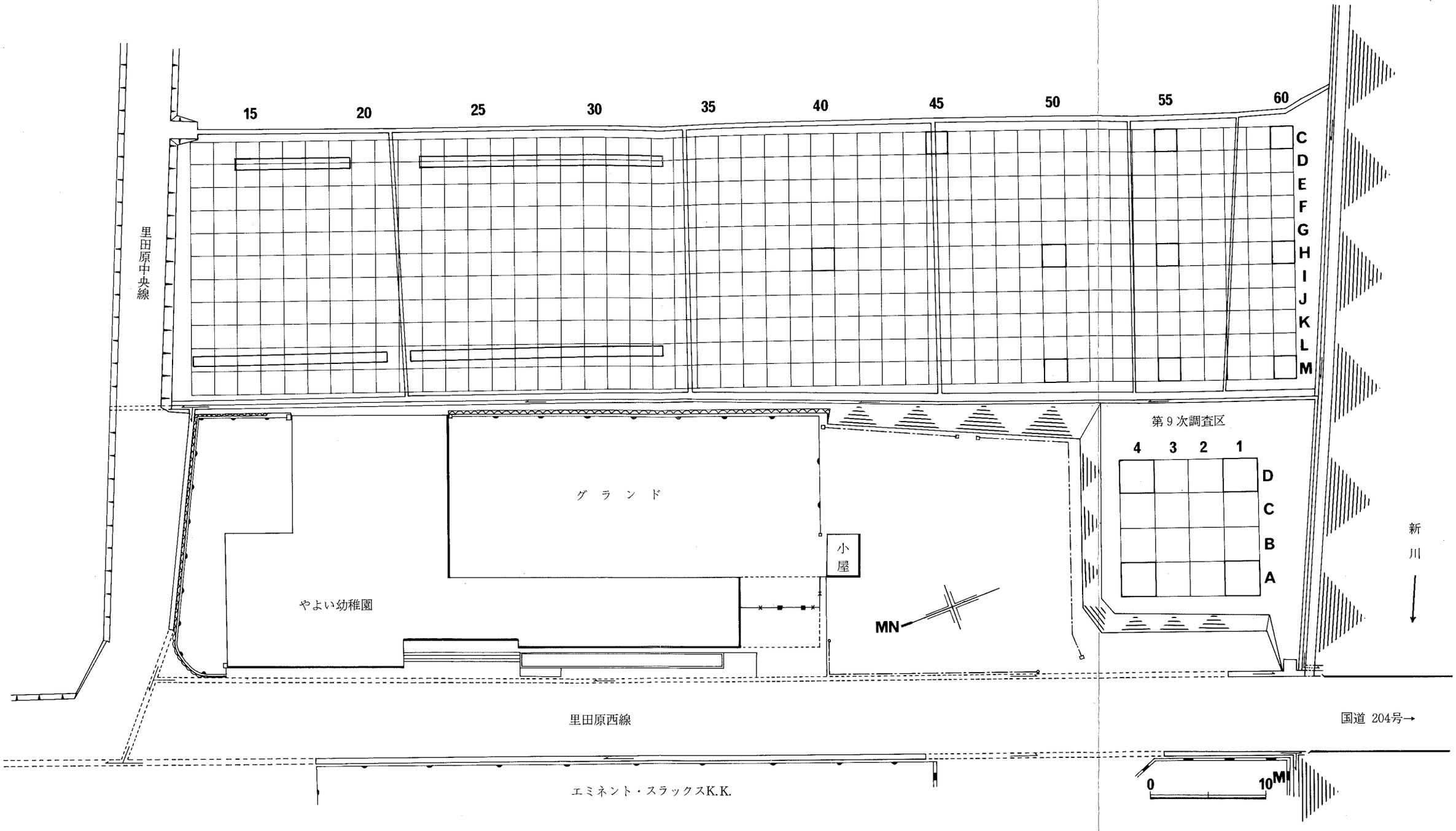


Fig.28　里田原調査区配置図

1．　土層（Fig.29，PL.29）

里田原遺跡の土層については，今までに刊行された報告書に詳しいし，加えて今次調査の対象となった歴史民俗資料館建設予定地は，第７次緊急発掘調査と第９次範囲確認調査が実施された隣接地であり，大略相似するので簡略に説明することとする。

今次の調査で，遺物包含層の分布範囲は予想通り新川に近い部分，C—60，H—60，M—60に見られる。機械的に10m おきに掘っていった55ラインでは姿を消す。それ以北も同じ状況であるため青灰色粘質土層が確認された段階で調査を中止した。H—55G（Fig.29）１・２層は耕作土で20～40cmある。３層は色調により一応区別したが本来は同一層位と考えて良いかも知れない。４層はいわゆる青灰色粘質土層であり，上部は幾分か白っぽく，下部になる程鉄分を多く含むため茶色が増す。遺物，遺構等全く認めない。

図示したのはM—60の北壁と東壁である。今次の調査は遺物，遺構等の確認をした段階で調査を中断し，保存あるいは本調査とすることにしていたので図の如く中途半端な土層図で終っている。１・２層は耕作土である。３層は黒褐色粘質土層で約20cmの厚さをもつ。４層が遺物包含層としている暗褐色粘質土層である。多量の遺物や自然木を包含する。層の厚さは約40cmくらいでその下層は一部分の観察では砂礫層となるようである。H—60，C—60ともに同様の層序を見るが，遺物の出土量は構状遺構の下流であるM—60に多く，C—60に少い。

今次の調査では基盤の粘板岩まで確認していない。

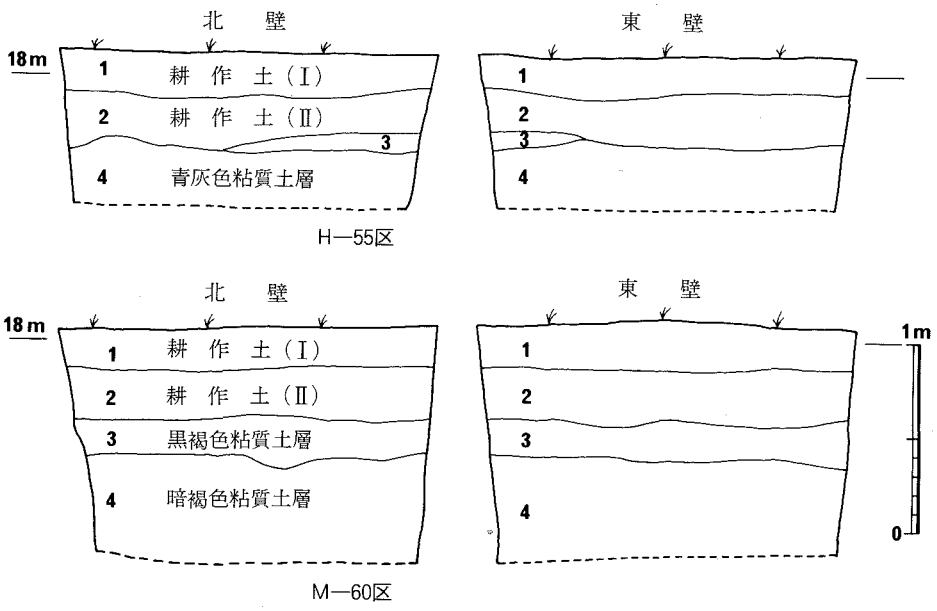
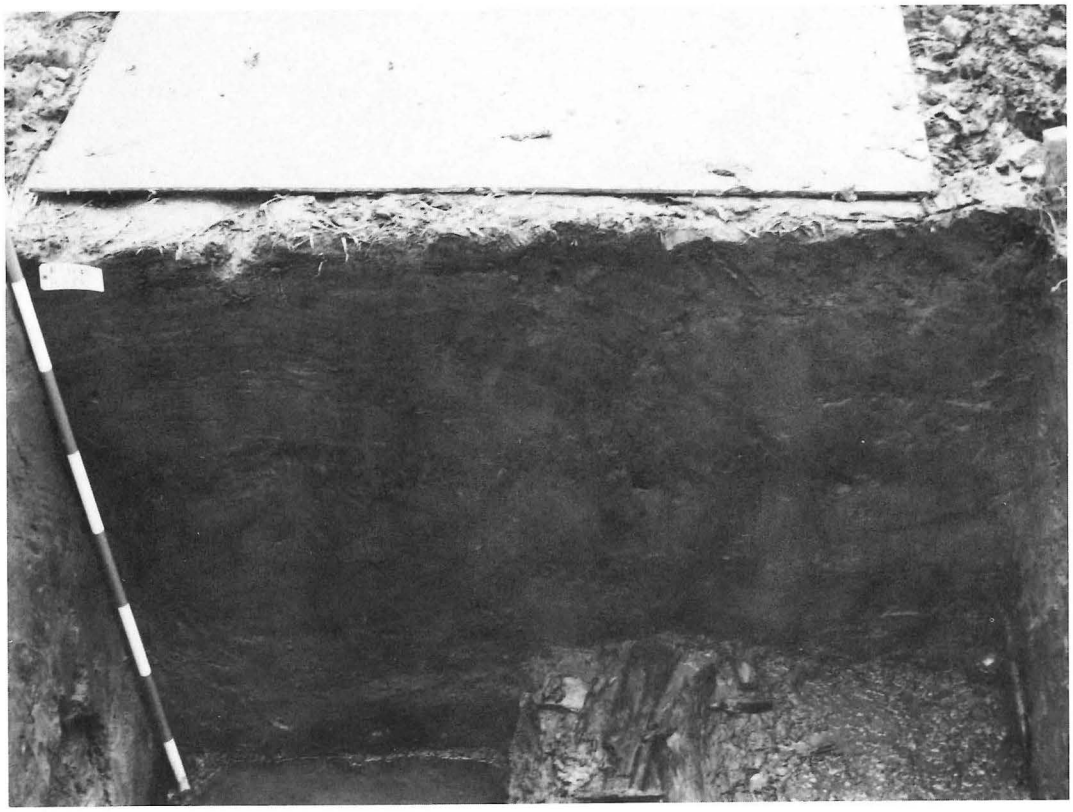


Fig.29　土層図（$\frac{1}{40}$）



PL.30　調査風景

2．遺物出土状況（Fig.30, PL.31）

遺物の出土状況は後述する遺物の項でも若干述べるが，遺物は調査区南西に片寄り出土量の最も多いM—60区を図示した。M—60区は第9次調査区[註1]の東に隣接し，今回の調査区では南西隅に位置するため，当初より第9次調査で確認された竪穴遺構の関連等が期待されたが，同様の遺構の検出はできなかった。しかし遺物の集中度，時期的なものを見ると同一の遺物包含層を継続するものと考えられる。又ブロック状に混入する貝層も第9次調査同様確認された。図中の木器の多くは自然木で，一部分に加工痕を有す杭なども出土している。製品としては木器の項に図示した鋤状の木器がある。土器は別項に図示した，縄文時代晩期～弥生時代中期に至るもので，他遺物同様試掘壙南西部に片寄っている。一部に集中した土器片は同一個体のものが多くかなり接合した。この面下部は図示しなかったが，遺物は少なくかなり大きな自然木が壁に入り込んだ状態で出土している。

註1．昭和49年4月9日～5月24日，長崎県教育委員会調査，長崎県文化財調査報告書第21集「里田原遺跡」 1975 長崎県教育委員会

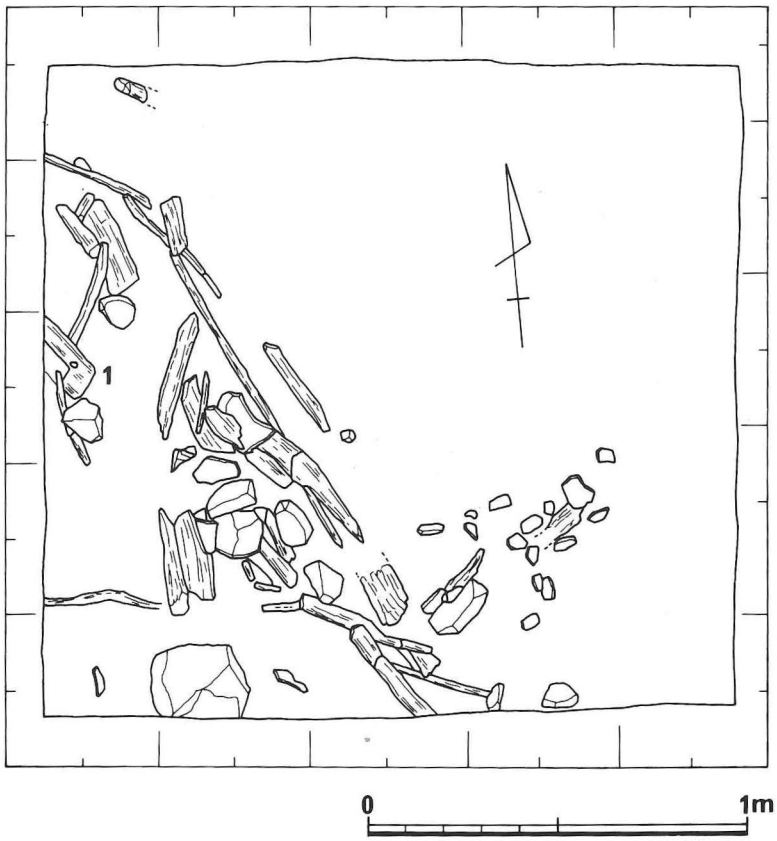


Fig.30 遺物出土状況図（$\frac{1}{20}$）M—60区

3．土　器（Fig.30・31・32，PL.31・32・33）

今回の試掘調査では，M—60・H—60・C—60等の60ラインの試掘壙を中心に少量の土器が出土しているが，多くは小破片であり本報告では底部・口縁部等の特徴的なものを中心に図示した。

各々の試掘壙における出土量は，M—60が最も多く，H—60・C—60・M—55の順となる。図示したものでは，**1・2・7・8・10・11・12・14・15**がM—60出土で，**3・6・13**がH—60出土，**4・9**がC—60出土，**5**がM—55出土である。

出土した土器の多くは，弥生式土器で前期から中期までの板付Ⅱ式，城ノ越式が主流を占めている。又縄文時代晩期のものと考えられる土器も少量であるが出土している。

1は縄文時代の晩期の粗製土器である。復原口径25.5cmを計り，やや外へ胴部がふくらむ深鉢であろう。器面は粗い条痕が見られ，内面は横ナデによる調整である。**2・3・4・8**は甕の口縁部を中心とした破片で，ある程度復原が可能なものである。**2**は下り気味の口縁の下に断面三角の突帯を張りめぐらせている。突帯上下は指頭によるナデ調整が行なわれ，器面は縦方向の刷毛調整が観察される。器面全体にススが付着している。口縁内側は内部へ突起している。胎土，焼成共良好である。**3**は「く」の字形に外反する口縁をもち，口唇部内外に刻目を施している。外部は連続的に，内部は1cm間隔程である。器面には縦方向に細かな刷毛目が見られ，口縁部が外反するあたりにはススが帯状に付着している。**3**は暗褐色を呈し，石英粒を含む粗い胎土である。口縁部を中心にススが付着している。口縁部は外反し，大き目の刻目を施している。胴部はややふくらむようで，横方向の刷毛目が上部に，下部には縦方向の刷毛目痕が残る。口縁部内側には外反するあたりに横方向の刷毛目が見られる。**7**は割合密な胎土で，焼成もよい。口縁は水平に張り出し，口縁端にはわずかにススが付着している。**5・6・7**は底部で，**7**はややゆがんだ8.6cm程の径をも

PL.32　出土土器①（縄文土器）

1

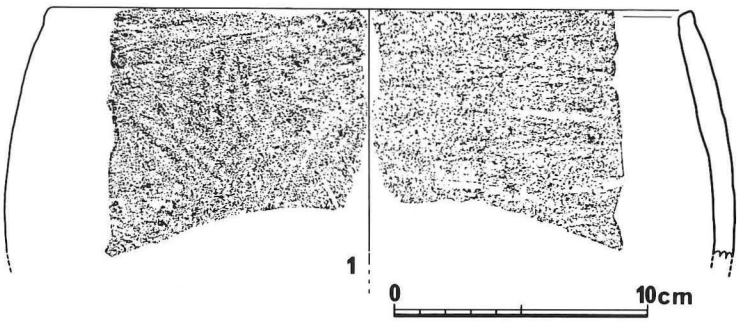


Fig.31　出土土器実測図①（$\frac{1}{3}$）

つ。粗い刷毛目が縦に残る。内部はヘラのようなものでけずり出し，指頭による整形が見られる。又内部はススの付着も見られる。平底である。**5**・**6**は赤褐色を呈し，胎土中に多量の石英粒が含まれる。2点共上げ底で**5**は縦に刷毛目が残る。**9**～**15**は復原不可能な小破片で，**13**・**14**は胴部，他は口縁部である。**9**・**10**・**11**は口縁部に刻目をもつもので，3点共胎土中に石英粒を含む粗いものである。**11**は黒雲母も少量含んでいる。**9**は口縁部に刻目突帯を張りめぐらせ，突帯下は横ナデと斜行する刷毛目による調整が行なわれている。口縁内側は6条程の条痕が残っている。器面にはススの付着が見られる。**11**は**9**に比べ刻目が深く，内外共ナデ調整である。**10**は逆L字形の口縁端に浅い刻目が施してあり，斜行する刷毛目痕が見られる。口縁内側は，つまみ出したような隆起が見られる。器面にはススが付着している。**12**は甕の口縁部から胴部で，口縁部は外反するものと考えられ，胴部には断面三角形の突帯を一条張りめぐらせている。城ノ越式に属するものと考える。器面は口縁，突帯上下は横ナデ，他は縦方向に細かな刷毛目が見られる。胎土，焼成共良好で薄手である。器面全体にススが付着して真黒である。**13**はやや肥厚する段をもつ板付Ⅱ式の甕と考えられる。**14**は4条の沈線をめぐらす壺の肩

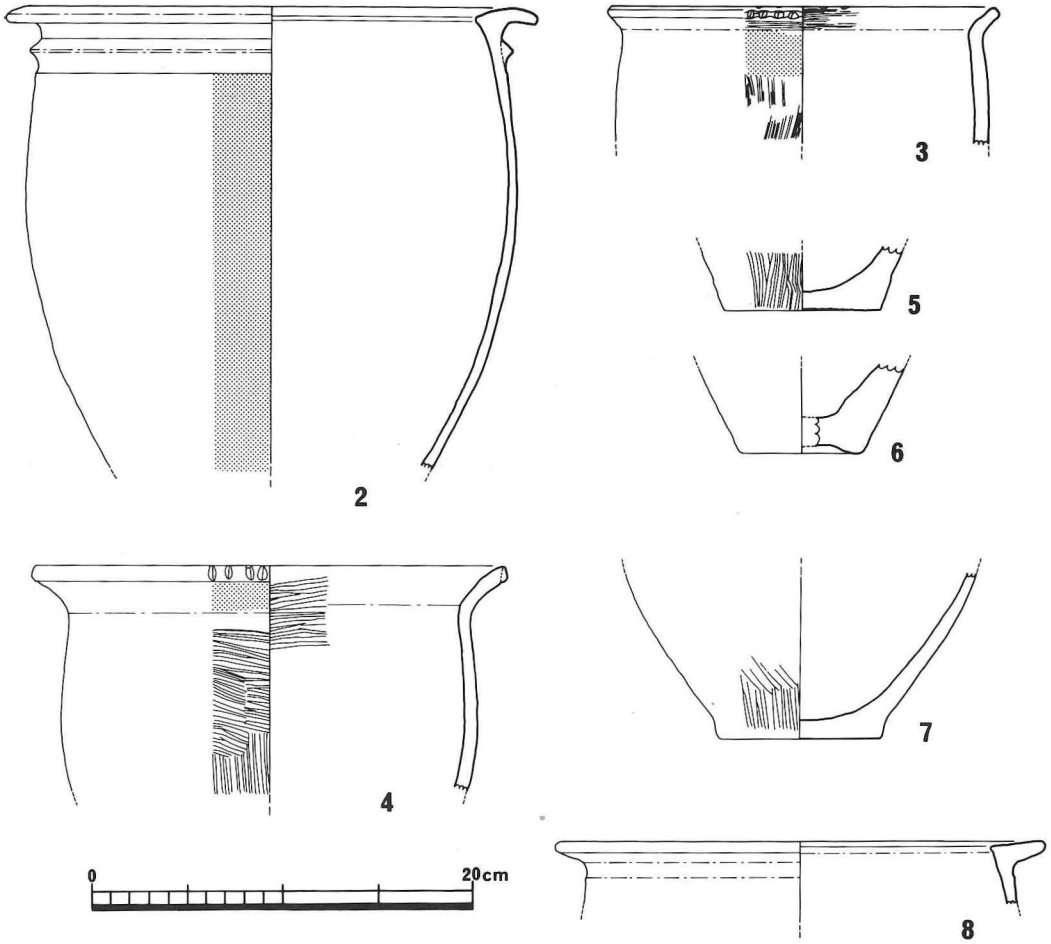


Fig.32　出土土器実測図②（$\frac{1}{4}$）

部と考えられる。赤褐色を呈し，胎土には石英粒を多く含む粗いものである。**15**は胎土も粗く焼成もあまりよくない。口縁内側に条痕のようなものが数条見られる。口唇部は指でつまみ出したようである。

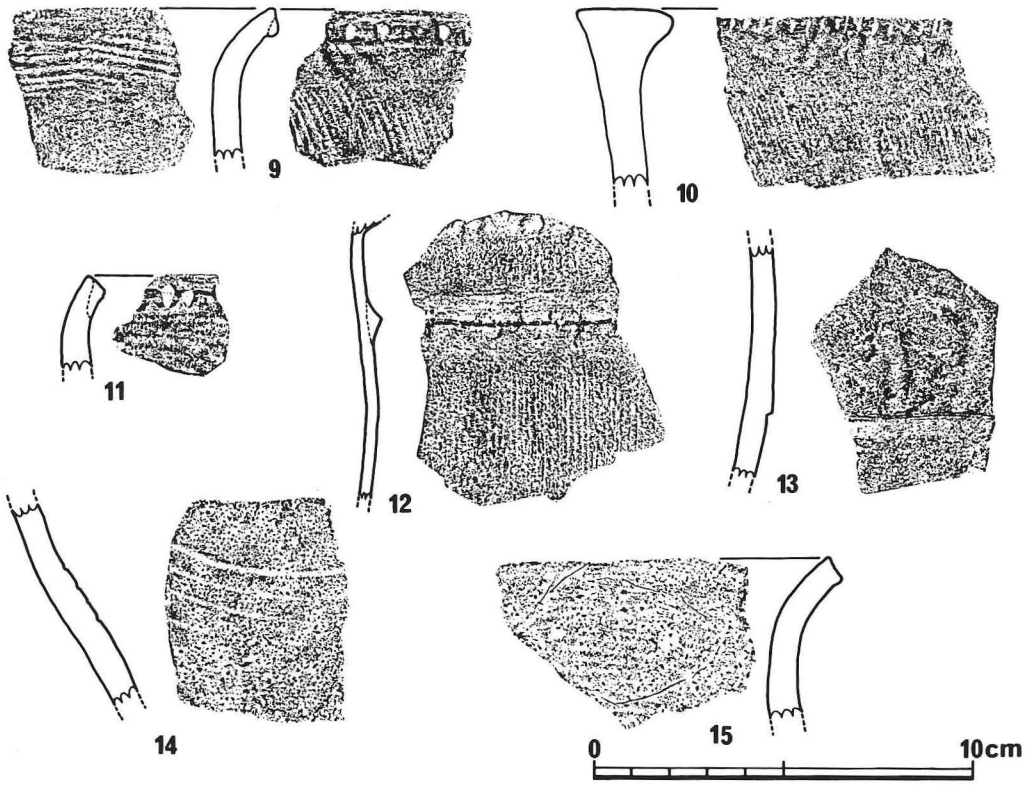


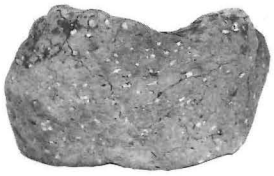
Fig.33　出土土器実測図③（$\frac{1}{2}$）

PL.34　出土土器(弥生土器)③ (1/2)

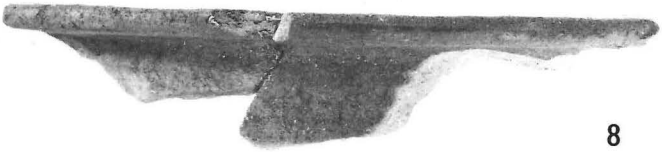
3

4

5


6

7


8

12

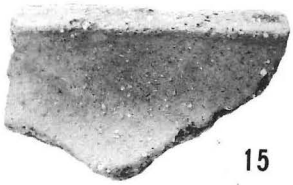
9

10

11

13

14


15

4．石　器（Fig.34，PL.36）

1は大形の石鏃で右脚部を欠損している。H—60区出土。**2**も石鏃でえぐりの部分を欠損。H—55区出土。**3**は表面の½ほどに自然面を残し，側縁に使用痕のある剥片である。H—60区出土。**4**は表面の½ほどに自然面を残し，裏面の側縁に加工を施した削器で，断面三角形である。H—60区出土。**5**は平担打面で裏面に荒い加工痕を有し，刃こぼれが顕著な削器である。先端部に自然面を有する。C—60区出土。**6**は不定形の剥片にほぼ全面に加工を施した削器で，一部自然面を有する。M—55区出土。**7**は表面に自然面，先端部に刃こぼれを有し，肩部に細部加工を施した使用痕のある剥片である。H—55区出土。**1**～**7**のすべてが黒曜石製である。**8**は使用痕のある剥片で，裏面は上部より1回の剥離。安山岩製である。M—60区出土。**9**は肥厚な剥片の一側縁に加工を施した削器で，断面台形状を有する。C—50区出土。**10**は打面に自然面を有する使用痕のある剥片である。H—55区出土。**9**・**10**は黒曜石製。**11**は先端部に使用痕がある剥片。M—60区出土。**12**は打面部に自然面を有し，側縁と先端部に使用痕がある剥片である。H—60区出土。**11**・**12**は安山岩製。**13**は中央部に稜線をもつ縦長剥片で一側縁に鋸歯状に加工を施した削器である。断面三角形でメノウ製である。C—55区出土。**14**は打面部に自然面を残した石核で，不定形に剥片を剥いでいる。安山岩製。M—55区出土。

PL.35　遺物出土状況

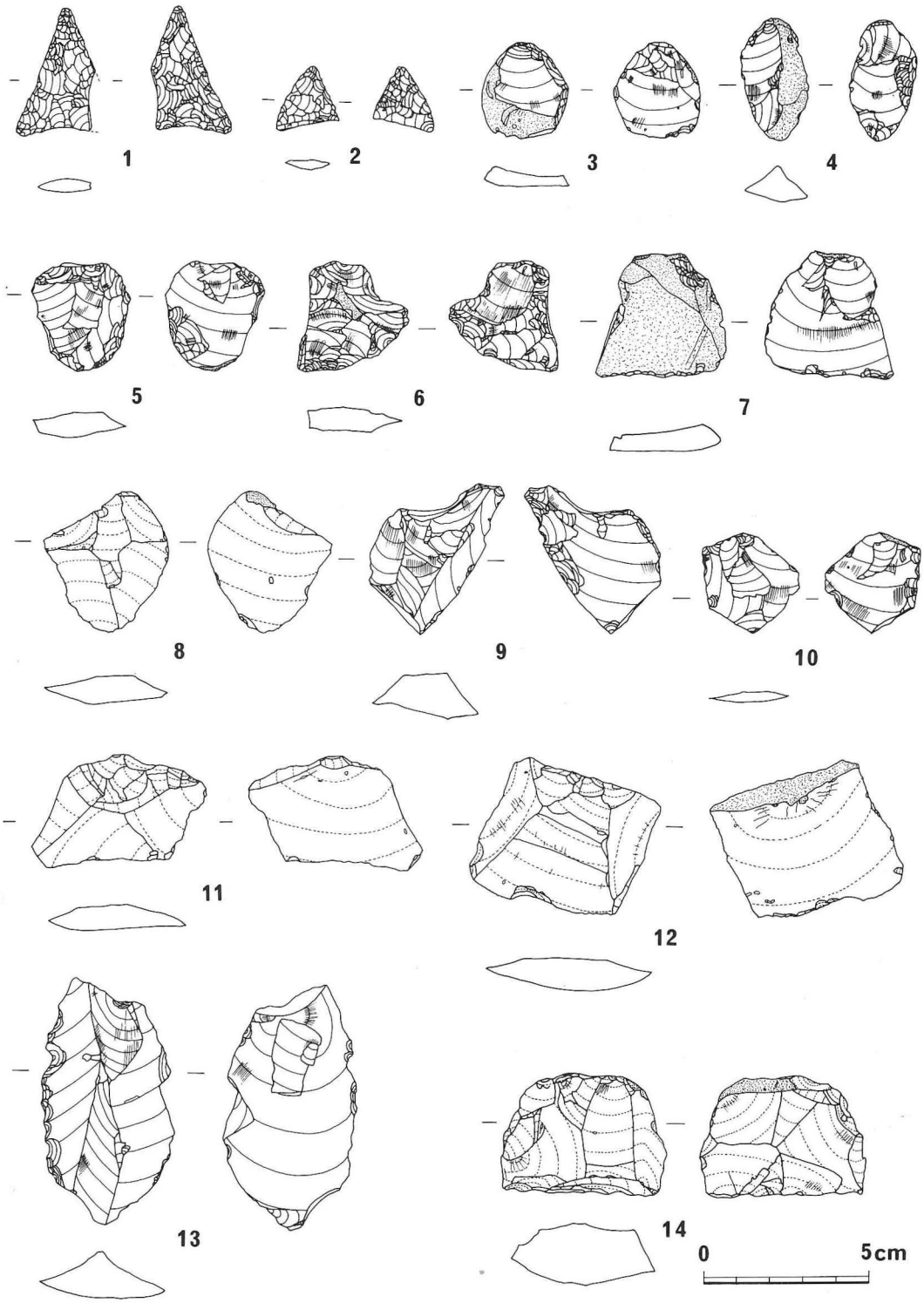
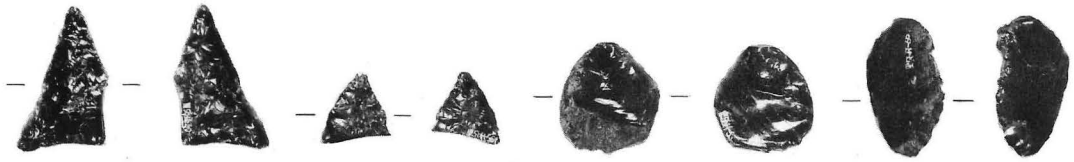
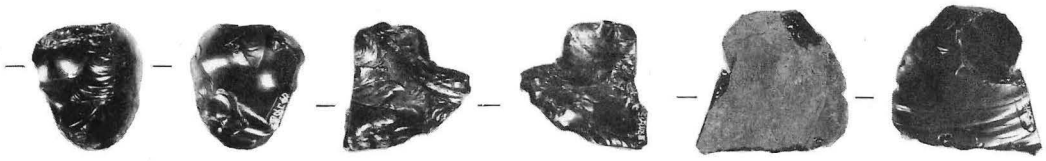


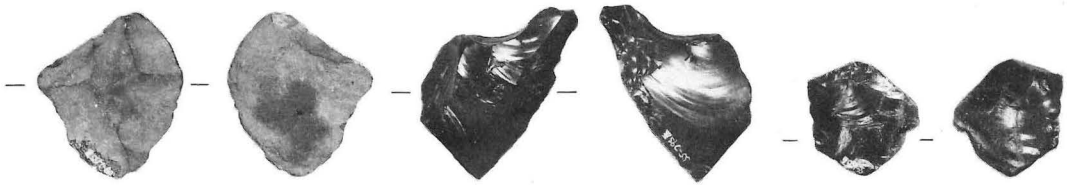
Fig.34　石器実測図（$\frac{1}{2}$）



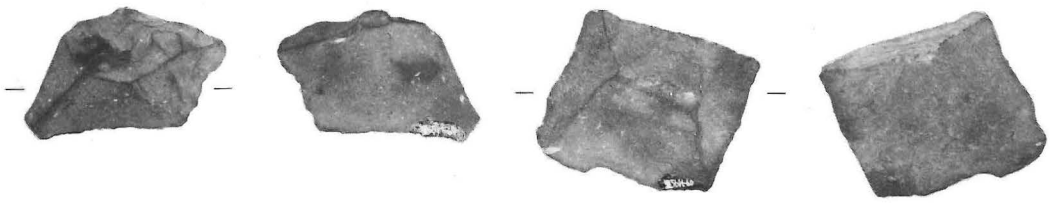
1　2　3　4



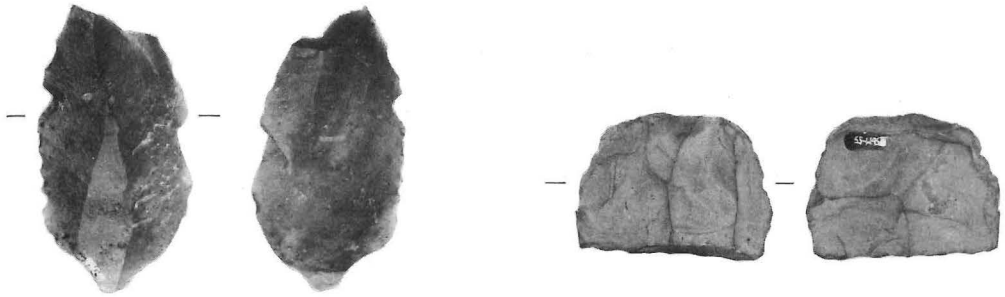
5　6　7



8　9　10



11　12



13　14

5．木　器（Fig.35，PL.37）

1は出土遺物の最も多いM—60試掘壙の出土である。全長36cmほどで，鋤であろうと考えられる。完形品ではないが全体の形態を推測出来る。薄い扁平な板状で，中央に方形，両側に円形の穴があくもので，中央に柄を装着し両側の穴にヒモ等を通し固定するものと考えられる。又先端から8cmほどの所で段がつき，この段より先端をけずり出し，薄くして刃部としているようである。形態から見て，柄の装着部が弱そうで，この部分から折れている。全体的に使用による摩耗はあまり見られない。2はH—55試掘壙の表土層出土で，割合新しい時代のものであろう。材質は杉のようで，断面方形の棒状をなしている。表面に1穴，側面に2穴の穿孔をしている。表面の穴の方がやや大きく，側面の2穴は先細の穴である。この側面の2穴には，竹製の栓状のものが差し込まれており，2点共同形のものであった。この栓状のものと穴との関係は不明であり，表面の穴にもこの栓状のものが差し込まれていた可能性が強い。一応不明木器としておく。

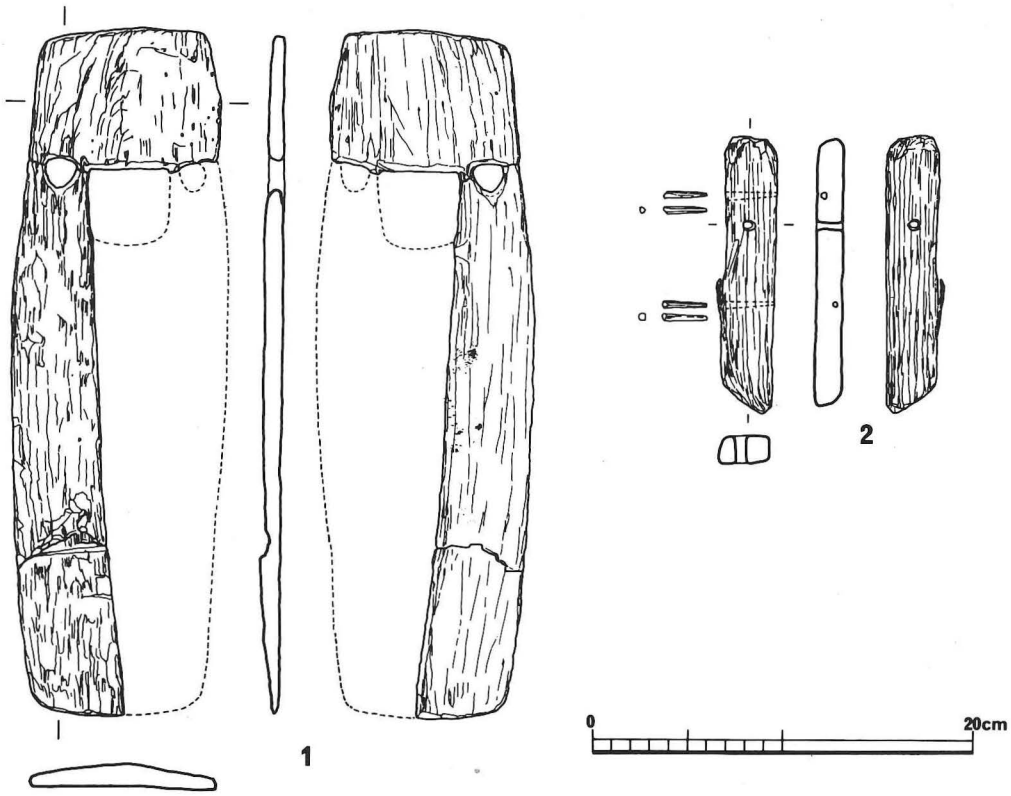


Fig.35　木器実測図（$\frac{1}{4}$）

1

2

中野ノ辻遺跡
里田原遺跡
田平町文化財調査報告書 第1集
昭和57年3月31日
発行 田平町教育委員会
長崎県北松浦郡田平町山内免
印刷 日本紙工印刷株式会社